縁帯文土器の編年的研究

山崎　真治

はじめに
Ⅰ　研究史
Ⅱ　瀬戸内の編年
Ⅲ　山陰の編年
Ⅳ　九州の編年
Ⅴ　近畿の編年
Ⅵ　関東編年との対比
Ⅶ　東海地方の状況
Ⅷ　縁帯文土器の推移とその特質

はじめに

縁帯文土器とは，西日本の縄文時代後期前葉に位置づけられる土器型式の総称である。

縁帯文土器を特徴づける，口縁に沿って加えられる帯状の装飾＝いわゆる縁帯文は，後期前葉の土器型式に広く共通する特徴であり，また，一般に西日本の縁帯文土器は東日本の土器型式と強い近似を示すため，しばしばその成立の背景には東日本からの文化的影響が想定されてきた。

縁帯文土器の広域的類似について論じた田中良之・松永幸男両氏は，縁帯文土器の成立について「この現象は，近畿地方以東を中心として，東から西へと傾斜をもった伝播といってよいものである」と述べている（田中・松永 1984）。また，千葉豊氏は，縁帯文土器の成立過程について詳細な分析を行った上で，「東海西部から瀬戸内，山陰の西日本に成立した広瀬土坑40段階（縁帯文土器成立期－筆者註）の類似相は，共通の基盤であった福田Ｋ２式に由来する伝統と関東系土器の流入という外来の影響の混交の中から生じてきたと理解しうる」（千葉 1989a）として，やはり東日本系土器の流入が，縁帯文土器成立のひとつの契機となったことを論じている。

このような見方は，後晩期の西日本において，土器型式のみならず物質文化一般に認められる東日本的要素を説明する上で，実態に即したものであったと言えるが，東日本からの影響が強調される一方で，西日本内部での地域間関係や土器型式の系統的変遷については，検討が不十分であるように思われる。そもそも東日本からの影響という文化的現象を，土器の上において具体的に評価するためには，個別地域における土器編年を整備し，確実な編年的枠組みを築いた上で，西日本にお

ける土器型式の変遷に，東日本の土器型式がどのように関わったかという問題が議論されなければならないであろう。

また，こうした大局的な文化の動向に関する問題とは別に，個別の土器編年についても近年，詳細な検討がなされており，特に編年の実質に関わる問題として，福田Ｋ２式の位置づけや平城式の編年を巡って議論がある。

従って本稿では，こうした編年上の問題を検討しつつ，縁帯文土器の成立と変遷を改めて論じ，縁帯文土器と東日本の土器型式との関わりについて考察を加えるものである。これは，縁帯文土器が，従来指摘されてきたように，東日本との密接な関わりの下に展開した土器群であることを再確認する作業であるとともに，西日本における土器型式の自律的展開を明らかにするためのものでもある。この記述は，まず地域ごとの土器型式の変遷をたどり，次に，それぞれの編年を横につないでいくことによって編年的枠組みを示すという方法に拠っているため，非常に煩雑であるが，こうした個別地域の分析を省略して広域編年を論じることはできないであろう。

結論を先取りして述べると，西日本の縁帯文土器は，東日本系土器の流入というような，土器の上に直接的に観察される現象を契機として生み出されたものと言うよりも，むしろ，深く伏在する地域間の緊密な相互的交渉の中で成立，展開したものと考えられる。こうした現象は，大局的に見れば情報の伝播とそれが波及した地域での変容という性格のものであるが，土器の安定的な地域性に支えられている点に大きな特色があり，地域的伝統の上に立って積極的に他地域と共通性の強い土器型式を生み出している。そしてこの時期，九州まで含めた西日本一帯が，変化の論理を共有する類似の土器型式によって覆われるという事実は，縄文土器の長い歴史の中でも，ひとつの画期をなす現象として認めなければならない。

Ⅰ　研究史

実際の編年に入る前に，現在までの研究の経緯を概観しておきたい。縁帯文土器の研究史についてはすでにいくつかの文献があるので，ここでは本論に関係して重要と思われるものを選択して，取り上げることにする。

まずはじめに，これまであまり触れられることのなかった，縁帯文土器という語の定義について，簡単にその経緯を振り返っておこう。

縁帯文土器という用語をはじめて用いた三森定男氏は，加曽利Ｅ式やその並行型式に見られる，口縁に沿って加えられる円文や渦文を縁帯文と呼び，これが縮約されることによって津雲Ａ式などに見られる口縁部の円文，渦文が生じるとした[1]（三森 1938)。三森氏の提唱した縁帯文土器という語を，津雲Ａ式や彦崎Ｋ１式など，西日本の後期前葉土器に対する総称として用いたのは，鎌木義昌氏らの概説が最初ではないかと思われる（鎌木・木村 1956，鎌木・高橋 1965)。また，麻生優氏は，静岡県蜆塚貝塚出土土器を総括する中で，蜆塚Ⅰ，Ⅱ式に伴う津雲Ａ式近似の土器を縁帯文土器と呼んでいるが，同時にこれらと津雲Ａ式との相違点についても指摘している[2]

（麻生 1962）。その後，泉拓良氏は，近畿地方における堀之内式～加曽利Ｂ１式並行の土器群を北白川上層式として一括し（泉 1980，1981b），これを縁帯文土器と呼んだ（泉・玉田 1986）。

泉氏の言う縁帯文土器は，彦崎Ｋ１式に後続する型式をも含んでおり，津雲Ａ式，彦崎Ｋ１式を縁帯文土器とする鎌木氏らの立場とは異なるものである。しかし，形態装飾上の連続性，特に口縁部文様帯の系統性から見ると，むしろ彦崎Ｋ１式とＫ２式（および四元式）の間に線を引いた方がすっきりするように思われる（千葉 2002a）。従ってここでは取り敢えず，縁帯文土器を，福田Ｋ２式に後続し彦崎Ｋ２式に先行する土器群として記述を進めることにしたい。

この他，九州方面に分布する縁帯文土器近似の型式を，縁帯文土器に含めるかどうかという点についても議論があり，特に小池原上層式や鐘崎式の扱いが問題とされている（田中・松永 1984，千葉 1989a など）。かつて愛媛県平城貝塚の報文中において，鎌木義昌氏は平城式１類（小池原上層式）を縁帯文土器である同２類とは区別して扱っており，筆者もこの見解は妥当であると考えているが，平城式１類については，後述するように，同２類とされた縁帯文土器の推移と密接な関係にあり，区別の難しいものも少なくない。また，口縁部文様帯を有するという点では，南九州の指宿式の一部なども無視できないものである。しかしこれらは小池原上層式や鐘崎式と同様に，瀬戸内，近畿の縁帯文土器とは異なる経過をたどるので，縁帯文土器本体とは区別しておいた方が良いであろう。

さて，次に編年論について見ておきたい。

現在，特に縁帯文土器の編年に関わる問題として，以下の二点が中心的に議論されている。

（１）福田Ｋ２式の位置づけ

（２）平城式の編年

前者の議論は，主として1977年に発表された，今村啓爾氏による福田Ｋ２式と称名寺Ⅱ式の並行説（今村 1977），およびこれに準拠してきた西日本での編年研究に対する反論としてなされており，土肥孝氏や鈴木徳雄氏は，型式学的分析および出土状況から，福田Ｋ２式の一部が堀之内１式に並行する可能性を指摘している（土肥 1988，鈴木 1993）。また，近年では加納実氏が，千葉県武士遺跡711・712号土坑出土の関西系土器を報告する中で，資料に基づいた実証的な分析を行っており，福田Ｋ２式と堀之内１式が並行することを論じている（加納 1994，2000b）。なお，この加納氏の主張については，千葉豊氏による反論がある（千葉 1995）。

福田Ｋ２式と堀之内１式が並行するという説は，1977年以降，柳澤清一氏によっても論じられている。柳澤氏の論点は多岐に渡っており，その論旨を十分に要約することはできないが，西日本の縁帯文土器を，関東の堀之内１式の影響を受けて成立したものと見て，その影響関係を細かく検討している。それによれば，近畿においては琵琶湖を挟んで，福田Ｋ２式と東正院１式（堀之内１式）の影響を受けた縁帯文土器（今安楽寺式）が対峙する。そして，福田Ｋ２式直後に堀之内１式の影響が強まって，堀之内１式近似の形制を有する縄手１式が成立し，これが瀬戸内に影響を与えて津雲Ａ式が生まれ，これがさらに西に進んで九州の小池原上層式や平城式を成立させた，

とされる。

これは堀之内１式の影響が次第次第に西に広がっていくことによって，伝わった先の土器型式を変容させていくという説であり，基本的な枠組みは，田中良之・松永幸男両氏の見解（田中・松永 1984）に近いものと言える。しかし後述するように，西日本では福田Ｋ２式の終末期に，ほぼ全域にわたって一斉に，口縁部文様帯と胴部文様帯を独立的に配する型式が並立することから見て，縁帯文土器の成立には，堀之内１式およびその影響を受けた土器の傾斜的伝播を想定するよりも，福田Ｋ２式やその並行型式からの自律的展開という側面を重視しなければならないと考えている。

また，近畿において福田Ｋ２式と縁帯文土器が並存したとする考えは，かつて泉拓良氏や田中・松永両氏によって主張された見解であるが，これについても，福田Ｋ２式が近畿のほぼ全域で検出されていることや，福田Ｋ２式末～直後の土器型式は，近畿や瀬戸内を含めた広い範囲で共通した様相を示すことから，近畿の縁帯文土器だけを切り離して，福田Ｋ２式の段階まで引き上げることはできない。

一方，後者の平城式の編年についての議論は，1990年の西脇対名夫氏による平城式の逆転編年説を受けて，活発になされるようになったもので，細かな経緯については九州の編年の項で述べるが，現在では平城Ⅱ式→Ⅰ式という編年が一般化しているようである（千葉 1992，2002b，水ノ江 1993，木村 1996，柳澤 1997）。しかし，この逆転編年には確たる裏付けがあるわけではなく，土器の系統的整理が不十分なまま漠然とした編年が行われているために，周辺地域との編年対比を考える上で不都合な状況にある。

従って本稿では，まず西日本（瀬戸内，山陰，九州，近畿）における編年的枠組みを再検討し，続いてこの編年と関東を中心とする東日本の編年との対比を示す。その上で，縁帯文土器がどのようにして成立，展開したかという問題について検討を加えることにしたい。

なお，編年にあたっては，主として深鉢形土器の型式変化を根幹に据えているが，該期の編年研究は，深鉢の型式変化とともに，土器の組み合わせを重視して進められてきた経緯がある。これは，この時期以降，器形の分化が顕著になることを反映したものと言え，本稿でも必要に応じて深鉢以外の器形についても言及しているが，記述が煩雑になるので，土器の組み合わせの全体を網羅的に示しているわけではない。この点については，別に補足したいと考えている。

Ⅱ　瀬戸内の編年

瀬戸内海沿岸地域は，縁帯文土器分布圏の一つの中核をなす地域として重要である。特に備讃瀬戸周辺の資料は充実しており，福田Ｋ２式から縁帯文土器への変化を連続的に追うことができる。

この地域では，千葉豊氏による福田Ｋ２式→縁帯文土器成立期→津雲Ａ式→彦崎Ｋ１式という編年があり（千葉 1989a），西部瀬戸内から大阪湾岸周辺までは，おおむね類似の変化を示していると言える。注目しなければならないのは，縁帯文土器に先行して存在する，福田Ｋ２式と宿毛式という二つの土器型式の伝統であり，両者は続く縁帯文土器の地域性に深く関わっている。

千葉氏が縁帯文土器成立期とする福田Ｋ２式直後の段階については，西部瀬戸内では小松川式[3]（犬飼 1985）が，南四国でも松ノ木式（出原 1992）が設定されている。一方，備讃瀬戸に位置する香川県大浦浜などの資料は，小松川式や松ノ木式とは異なる独自性を有しており，これを区別しないのは周辺地域との対比から見ても都合が悪いので，ここでは仮に，該期の土器がまとまって出土した香川県大浦浜遺跡下層の資料に基づいて，備讃瀬戸周辺における該期の土器を，大浦浜下層式と呼ぶことにしたい[4]。これら備讃瀬戸の大浦浜下層式，西部瀬戸内の小松川式，南四国の松ノ木式は，福田Ｋ２式や宿毛式を母胎として派生したもので，それぞれ独自の地域性を有しているが，続く津雲Ａ式，彦崎Ｋ１式では地域間で土器型式の統合が進み，地域性は次第に弱まる方向に向かう。

１．福田Ｋ２式

まず，縁帯文土器に先行する福田Ｋ２式について概観しておきたい（図１）。福田Ｋ２式は，伊勢湾岸以西の広い範囲に分布しているため，ここでは瀬戸内のものに限って記述を進める。

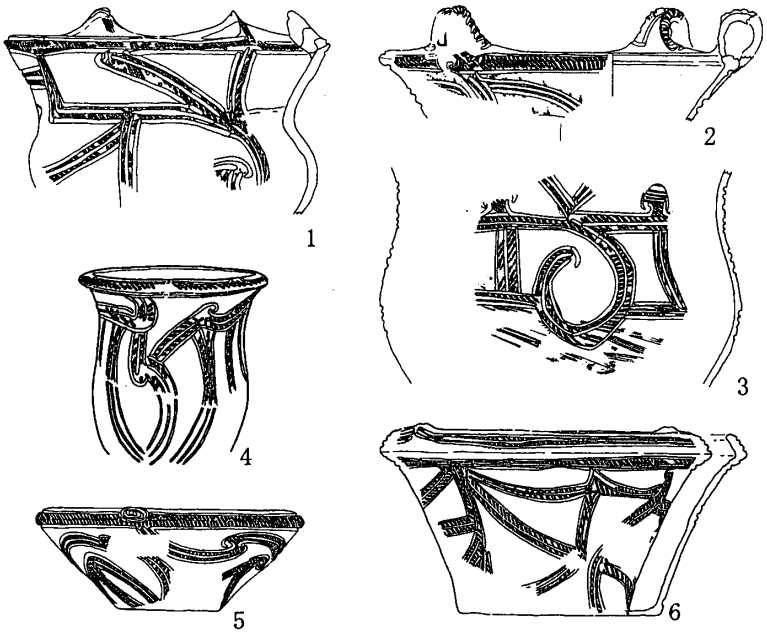


図１　福田Ｋ２式（１～６：福田）　約１/８

福田Ｋ２式の変遷を体系的に示した今村啓爾氏は，その変化を，施文の中心の移動と口唇部文様帯の発達という観点から論じている（今村 1977）。その後千葉豊氏は，今村氏の見解を発展させて，福田Ｋ２式を三段階に細分した（千葉 1989a，1992）。千葉氏の細分は，主として深鉢における口縁部形態と胴部文様の変化を重視したものであるが，現在のところ，瀬戸内では福田Ｋ２式の良いまとまりを示す出土例に乏しく，各段階における土器の組み合わせを明らかにすることは難しい。また，福田Ｋ２式の上限をどこに置くかという点についても，近年活発な議論があるが，本稿の主題から大きく外れるので省略し，別に触れる機会を持ちたい。

福田Ｋ２式では，胴部のくびれる深鉢と，直線的に外反する胴部に，強く屈曲する口縁部を有する鉢が一般的な器形である。このうち，鉢については福田Ｋ２式以後にほとんど続かず，文様構成も特殊なので，ここでは深鉢を中心に概観することにしたい[5]。

縁帯文土器との関わりで問題となるのは，福田Ｋ２式の最も新しい段階の様相である。千葉氏は，口端部に肥厚帯が発達し，この部分に口縁直下の縄文帯が上昇して，一種の口縁部文様帯を形成する一群を福田Ｋ２式第３段階（新段階）とした（千葉前出)。このような土器は，岡山県福田貝塚資料中に多く見られる。

深鉢では平縁のものが多く，口縁上には２単位の把手，突起が発達する。未発達な口縁部文様帯や口縁上の把手，突起は，これに続く成立期の縁帯文土器にも共通する特徴である。

胴部文様帯では，胴部のくびれを境に文様帯が上下に分かれる傾向を認めることができ，胴部下半が文様の中心となって，胴上部への施文は簡略化される傾向にある。三本の沈線を平行させた幅狭い帯縄文によって，曲線的な文様図形が器面全体にわたって表現され，沈線の末端は，主要部で途切れて鈎手状に入り組む特徴がある。また，図形の主たる意匠部分，すなわち「図」の部分が縄文充填部で，背景，すなわち「地」の部分が無文であることは，後述する宿毛式との対比において重要である[6)]。

福田Ｋ２式の主たる分布域の西，広島県洗谷貝塚や愛媛県糸大谷，石井国友（４次)，山口県月崎など，西部瀬戸内に位置する諸遺跡では，福田Ｋ２式に伴って，南四国に分布の主体を置く宿毛式近似の土器が一定量出土することが知られている。

宿毛式は，福田Ｋ２式に先行するとされたこともあったが，前田光雄氏によってその内容と変遷が明らかにされ，福田Ｋ２式との型式変化の共通性，および並行関係が改めて示された（前田1994)。また千葉豊氏は，福田Ｋ２式と宿毛式の型式構造の対比を体系的に示している（千葉1997)。

宿毛式は中津式の一部を祖型として生み出された土器型式で，南四国を中心に分布し，福田Ｋ２式とは異なる地域性を有する。吉野川上流に所在する高知県松ノ木遺跡は，宿毛式の分布域としては縁辺部に位置するが，これまでの調査で宿毛式が比較的まとまって出土しており，ここではこの資料を中心として宿毛式の内容を概観することにしたい（図２)。

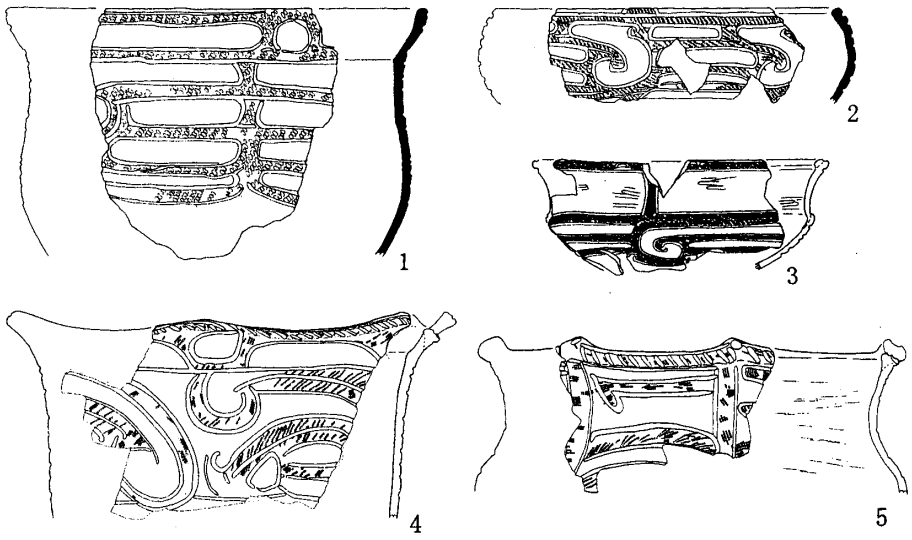


図２　宿毛式（３は小松川藤木，他はすべて松ノ木）　約１/８

宿毛式と福田Ｋ２式は，千葉氏が指摘し

ている通り，明快に両断することのできない部分を含んでいる（千葉前出）。松ノ木遺跡出土の宿毛式系土器について，瀬戸内の福田Ｋ２式との対比，および後続する松ノ木式との関係から，注目すべき点を列挙すると以下のようになろう。

（A）器形と文様帯の配置

（B）区画文主体の文様構成

（C）浅鉢や皿など浅い器形の盛行

（A）まず器形と文様帯の配置であるが，宿毛式の深鉢では，福田Ｋ２式とは異なって，口縁下のくびれを境に文様帯が上下に分割され，口縁部文様帯がきちんとした横帯をなして加えられる[7]。また，波状口縁がさかんで，口縁上に付される把手，突起の発達に乏しい。これに対して，松ノ木５次調査資料中には，福田Ｋ２式と同様，口端部に肥厚帯が発達し，口縁部直下の縄文帯がこの部分に上昇したものがある（４，５）。これは明らかに福田Ｋ２式の影響と言え，これによって宿毛式が福田Ｋ２式と近似の文様帯配置をとるようになって，続く松ノ木式では器形や個々の文様の近似がすすみ，互いの系統を区別することが困難なまでに類似が強まる。

（B）次に文様構成について見ると，福田Ｋ２式の三本沈線による曲線的な帯縄文構成に対して，宿毛式では三本沈線がふるわず，縄文部と無文部を交互に繰り返す多段区画文が盛行する[8]。この，沈線によって囲まれている区画の部分は，福田Ｋ２式では「地」の部分に相当するが，宿毛式では区画文が文様図形のように用いられるものもあり（１，２），「図」と「地」の関係が不明瞭である。また，全体的な文様構成も，福田Ｋ２式の曲線的・懸垂的な構成に対して，直線的な横帯構成となっており，胴部文様帯下端を沈線によって画する点も特徴的である。

（C）浅い器形の発達は，松ノ木式にも続く様相であり，福田Ｋ２式の鉢形土器と同様，このような浅い器形は精製傾向が強く（赤彩を有するものが多い），宿毛式本来の分布域を超えて，類似の土器が広範に分布する。また，この種の土器について重要なのは，一般の深鉢に比べて型式変化が鈍いらしいことで，例えば２の浅鉢は，１の深鉢に伴出したものであるが，この土器とほとんど同じ装飾を有する３の土器は，器形と文様構成から見て宿毛式末に属するものと見られ，松ノ木５次調査でもまとまった量が出土している。これはちょうど，山陰方面で福田Ｋ２式の鉢形土器が縁帯文期まで残存する事例とよく似た現象と言えるかも知れない（千葉 1990）。しかし，松ノ木式の基準資料である松ノ木１次調査資料中には，この種の土器はほとんど見られず，沈線文系の浅鉢が多量に伴うので（図３－10），深鉢の型式変化との細かな対応関係の検討は今後の課題であろう。

この他，続く縁帯文土器との関わりで，岡山県福田貝塚，高知県松ノ木（５次），大阪府四ツ池などから発見されている，口縁端に刻み目を有する土器は注目すべきものである（図２－４，５，図16－１）。口端への刻み目は，大浦浜下層式や四ツ池式など，初期の縁帯文土器に共通して見られる手法であり，これらの土器は福田Ｋ２式や宿毛式の終末に関わるものであろう。

2．縁帯文土器成立期（大浦浜下層式，小松川式，松ノ木式）（図3，4，表1）

福田K 2式直後に位置づけられる資料として，備讃瀬戸周辺では香川県櫃石島の大浦浜遺跡出土資料の一部や，岡山県津島岡大3次調査資料がまとまっており，上述のように，ここではこの一群を大浦浜下層式として，西部瀬戸内の小松川式とは区別しておきたい。また，吉野川上流で設定された松ノ木式は，南四国の宿毛式の影響を強く受けて成立したもので，独自の位置を占めている。

これら備讃瀬戸の大浦浜下層式，西部瀬戸内の小松川式，南四国の松ノ木式は，後述するように細かな点では差異を認めることができるものの，胴部のくびれる深鉢で胴部上半が無文化して，口縁部文様帯が胴部文様と切り離されることにより生じた，未発達な縁帯文を有する点で共通した様相を示し，成立期の縁帯文土器として位置づけられるものである（千葉 1989a）。

この時期の土器型式に認められる地域性は，このような器形，文様の割りつけの共通性を前提として，前段の福田K 2式と宿毛式という，系統上の差異を引き継ぐことによって生み出されている。この時期の複雑な土器の様相は，前段にも増して型式の境界を明確に区分することを困難にしており，その意味では，ここで行う区分も大まかな系統的解釈を優先した不十分なものと言わざるを得ない。

個々の土器型式に認められる地域性の詳細を個別に記述することは煩雑なので，図4に器形と文様帯配置の模式図を示し，表1にその特徴をまとめておく。

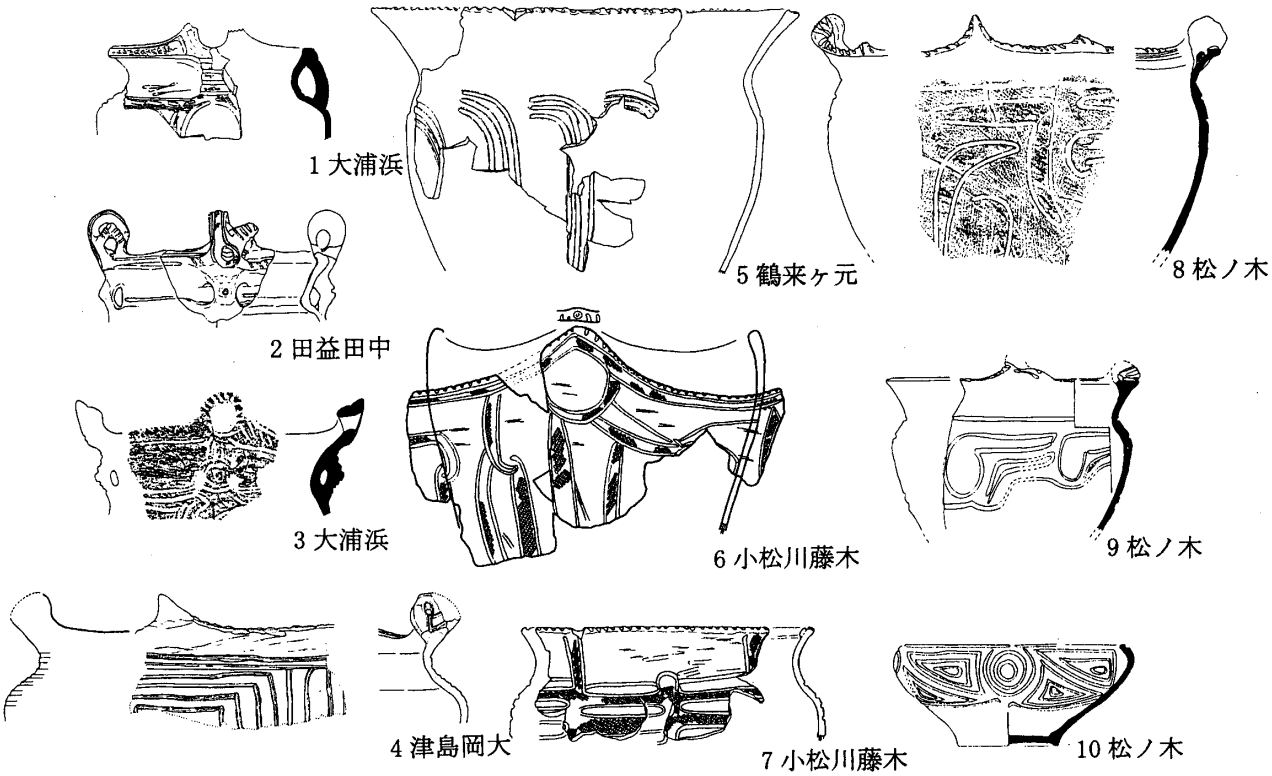


図3　縁帯文土器成立期（1～4：大浦浜下層式，5～7：小松川式，8～10：松ノ木式）　約1/8

［器形］　胴部で強くくびれる深鉢が主体となる。松ノ木式では，胴上部無文帯の幅が狭い土器（E）が多いが，これはこの無文帯が宿毛式の口縁部の文様帯に由来するためであろう。土器の大きさという点から見ると，大浦浜下層式では，口径の小さな土器が主体を占める一方，松ノ木式には口径の相当に大きな土器が含まれており，前段の福田Ｋ２式と宿毛式の差異を反映したものと言える。

また，この時期の深鉢は基本的に平縁であるが，松ノ木式や小松川式には，胴部のくびれの弱い寸胴形の器形で，波状口縁を有する大型の鉢形土器が存在する（F）。このような土器は，そもそも宿毛式の深鉢に由来するもので，胴部文様帯の分割がなされなかった一群と見ることができ，その後に続かない点から見て，型式変化の主流とはならなかった短命な器形と言える。

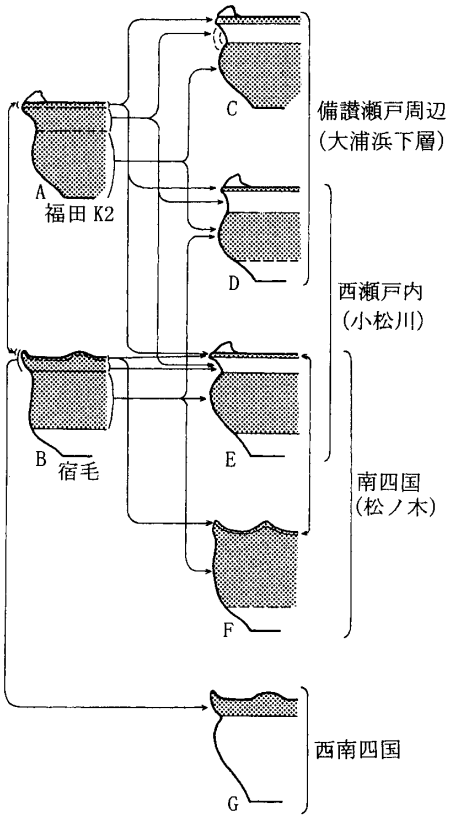


図４　器形・文様帯配置の模式図

［口縁形態］　口端の肥厚がさらに強まって，この部分に文様帯が押し上げられ，前段で口縁直下に位置した沈線は省略される（千葉前出）。また，これに伴って，口縁外端への刻み目が盛行するようになる。

これとは別に，香川県大浦浜などには，口縁直下に痕跡的に沈線を有するものも見られる（図３１～３）。これらの土器は，口縁部文様帯が胴部文様帯から分離されている点からみて，福田Ｋ２式とするよりも縁帯文土器と見た方が良いであろう。

［口縁部文様帯］　この時期の口縁部文様帯には，福田Ｋ２式の口縁直下の縄文帯に由来するものと，宿毛式の口縁直下の縄文帯に由来するものとの両者があるが，もはや両者の系統を区別することは不可能である。

なお，宿毛式の本拠地と目される西南四国では，松ノ木など，宿毛式分布域の外縁に位置する地域とは異なる変化の方向があったようで，高知県三里や大宮宮崎，愛媛県犬除には，口縁部に窓枠状の区画文と渦巻きを配し，胴部を無文とすることによって縁帯文土器に似せた形制をとる土器がある（G）。まだ資料に乏しく，変化の全体を論じることができないが，これらの土器に見られる口縁部文様帯は，宿毛式の口縁部文様帯に対比されるものとみられ，宿毛式の伝統を色濃く伝える点で特異な存在と言えよう[9]。

［口縁部の把手］　大浦浜下層式や小松川式では，環状や筒状の貫通孔を有する把手が盛行し，松ノ木式では耳状の中空把手が盛行する。このような把手の地域性を生み出す要因は明らかでないが，宿毛式に把手を付すものがほとんど見られないことから考えて，この時期の把手は，口縁部文

様帯の成立とともに，福田Ｋ２式が型式変化を主導することによって広まったものと見られる。

また，大浦浜下層式には，口縁部から胴部にかけて橋状把手を有するものが一定量存在し（C），これは山陰の布勢Ｉ式において盛行する特徴であることから，その影響を受けたものと見ることができる。備讃瀬戸周辺で発見されているこのような布勢式類似の土器と，日本海沿岸の布勢式本体とをつなぐためには，中間地域である中国山地の状況が問題となるが，現在のところ該期の資料に乏しく実態は不明瞭である。

［胴部の文様構成］　この時期には胴部の文様構成が多様化するので，これらを整理して考えることが必要である。以下に，主要な文様構成を列挙してみる。

（１）帯縄文

二～三本の沈線を平行させて図形を描き，沈線間に縄文を充填するもの。

（２）平行沈線文

帯縄文からの変化で，沈線間への充填縄文が省略されたもの。

（３）多条沈線文

平行沈線文の一種であるが，多数の沈線を密に平行させて加えるもの。

（４）区画文

宿毛式の影響を受けたもので，区画文の追い回し施文となるもの。

このうち（１）～（３）は主として福田Ｋ２式の影響下にある文様図形，（４）は宿毛式系統の文様図形で，縄文施文を有する場合には前者では「図」への充填，後者では「地」への充填となる。また全体として，この時期には個々の文様図形が相互の脈絡なくバラバラに用いられる傾向が強い。

各型式において採用される文様構成は，表１の通りである。ただし，この時期には型式相互で文様図形の交換，統合がすすむので，特定の系統の文様が排他的に用いられるわけではない。

表１　大浦浜下層式，小松川式，松ノ木式の型式的特徴の対比

	分布	把手・突起	口縁部文様帯	胴部文様帯	胴部文様の意匠部
大浦浜下層式	備讃瀬戸周辺	筒状，環状のものが多い。	口縁上面，内面への施文が主であるが，外面施文が一定量存在。	帯縄文，平行（多条）沈線文が主。区画文は懸垂的な施文となる。	基本的に縄文充填部。区画文系では空白部。
小松川式	西部瀬戸内	筒状，環状，耳状のものがある。	口縁上面，内面への施文が主。	帯縄文，平行沈線文，区画文がある。	大浦浜下層式と松ノ木式の中間的な様相を示す。
松ノ木式	南四国	耳状のものが多い。	小松川式に同じ。	区画文が主体で，胴部文様帯下端を横走沈線によって画する特徴がある。	基本的に空白部。稀に縄文充填部の反転が見られる。

3．津雲Ａ式（図５）

大浦浜下層式直後の瀬戸内では，小規模な遺跡が点々と知られているのみであるが，その中にあって香川県なつめの木の資料はまとまっており，渡部明夫氏はこれをなつめの木式として，縁帯文土器成立期→なつめの木式→永井Ｉ（永井 SR8601下層）という詳細な段階的変遷を提示している（渡部 1994）。筆者も渡部氏が示した変化の方向性自体は，首肯し得るものと考えている。その一方で，渡部氏の言うなつめの木式から津雲Ａ式への変化はかなり連続的であり，個々の土器について判別の難しい場合も少なくない[10]。従ってここでは，なつめの木式を固定的に考えるよりもむしろ，なつめの木式から津雲Ａ式までの型式変化の連続性を重視して，大浦浜下層式直後から，彦崎Ｋ１式直前に位置づけられる一群の土器について広く津雲Ａ式と呼ぶことにし，資料の充実を待ちたいと思う。細かな型式名の設定は，土器の具体的な変遷過程が明らかになってからでも遅くはないであろう。

このように考えると，津雲Ａ式はなつめの木の資料を中心とする前半（古段階）と，永井Ｉに代表される後半（新段階）に区分することができる。永井Ｉは有文土器に乏しいが，渡部氏自身が指摘しているように，おおむね津雲貝塚資料に準じて考えることができるであろう。

一方，西部瀬戸内では該期の資料に乏しく土器型式の様相は不明瞭である。愛媛県南海放送遺跡

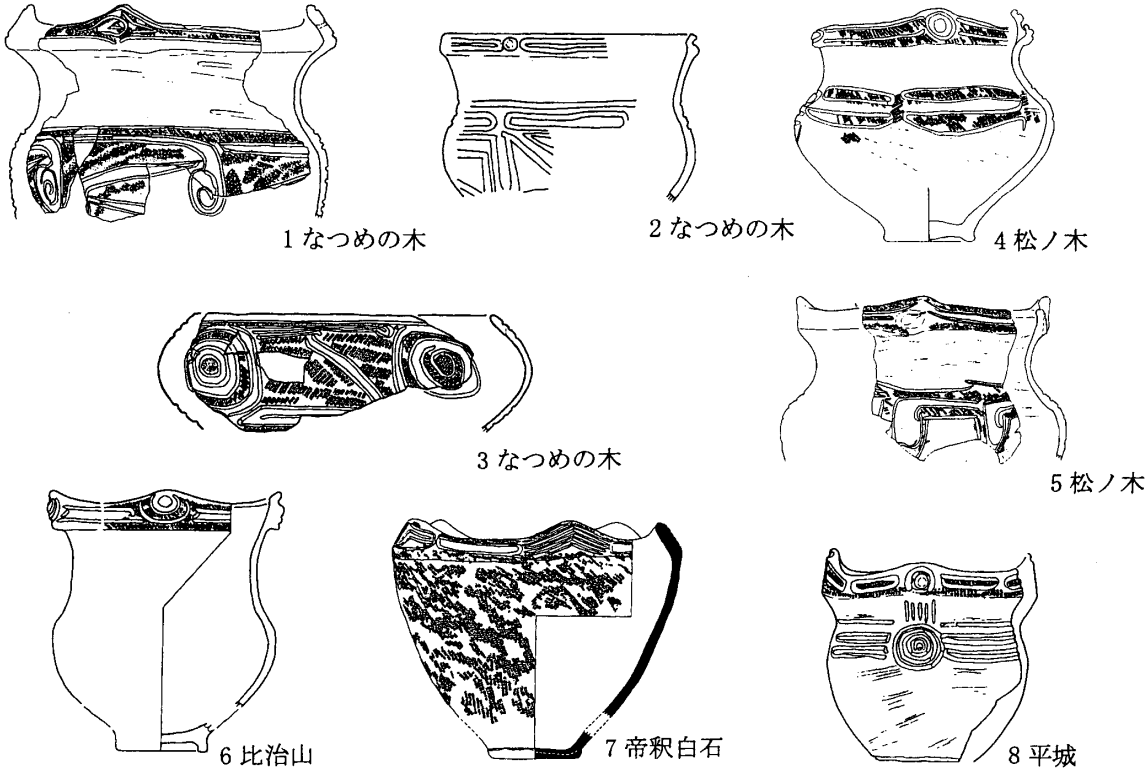


図５　津雲Ａ式（１～５：古段階，６～７：新段階，８：古～新段階）　約１/８
＊８の胴部文様は平城式Ｂ群

出土土器の一部はなつめの木に対比され，広島県比治山貝塚，愛媛県川原谷，矢田八反坪の資料は，津雲貝塚のものに近似する。さらに西，愛媛県平城貝塚の著名な完形土器（8）は，津雲A式として見ると古段階と新段階の中間的な感じである。平城貝塚の位置する豊後水道沿岸，および周防灘沿岸周辺は，この頃から九州系土器の勢力下に置かれ，このような土器はむしろ例外的な存在である。この他，南四国では高知県松ノ木5次調査資料がまとまっており，最近居徳遺跡群からも良い資料が報告された。

全体的に見て，津雲A式では，大浦浜下層式とその並行型式に見られた多様な形態装飾の統合が進んで，斉一性が強まる傾向にあると言える[11]。

［古段階］　ここで言う津雲A式の古い部分，渡部氏のなつめの木式では，口縁外面に肥厚帯を巡らせて，窩文や渦文を中心とした口縁部文様帯を配する点に特徴がある。口縁は前段と異なって波状をなすものが多いが，この時期の波状口縁は，大浦浜下層式で口縁上に位置した把手や突起が，口縁部文様帯に取り込まれることによって生じたものと見ることができ，強く突出するような形を留めたものが多い。また，大浦浜下層式に比べると，口縁部文様帯の幅が広がって，2条の沈線で区画された内側や外側への充填縄文がさかんである。

前段とは大きく異なるこのような口縁外面への施文が，どのように生じるのかが問題となるが，千葉豊氏が指摘しているように，くの字形に屈曲する口縁形態や，口縁外面への施文は，山陰の布勢式に見られる口縁部文様帯に類似し，その影響を受けたものであろう（千葉 1990）。小松川式や松ノ木式で，盛んに用いられていた口縁外端への刻みがなくなるのは，布勢式の口縁部文様帯にそれがないためと説明される。要するに，大浦浜下層式およびその並行型式から津雲A式（古）への変化は，近似の口縁部文様帯の存在を前提として，口縁部文様帯の施文形態が布勢式で盛行する外面施文への傾斜を示し，互いに斉一性を強めていく過程として捉えることができる[12]。

胴部文様帯については，引き続き帯縄文・平行（多条）沈線文系，区画文系のものがともに見られる。この段階では，個々の文様図形相互の連携が強まる傾向を認めることができ，前段に比べると器面に対して均等な割りつけを意識した施文へと変化している。

［新段階］　津雲貝塚資料の主体をなす段階である。古段階からの変化は連続的であるが，強いて区分の基準を示すならば，波状口縁がなだらかになり，口縁部主文様を強調する傾向が強まる点，沈線の多条化に伴う条線の採用，磨消縄文の衰退などを挙げることができる。特に波頂部下の弧線を重ねて描かれる円文は目につきやすい特徴である。また，深鉢以外の器形として寸胴形の鉢が加わる（7）。

完形土器に乏しく，胴部の文様構成を知ることのできる資料は少ないが，個々の文様図形は衰退する傾向にあり，懸垂的に引かれた単純な沈線文を有するものや，無文のもの，縄文のみとなるものが多いようである。なお，津雲貝塚資料中には，胴上部無文帯や胴下部文様帯に，細い条線を縦に多数並べて加えたものが見られるが，条線の使用や胴上部無文帯への施文は，なつめの木や松ノ木5次調査資料中にはほとんど見られず，むしろ近畿の北白川上層式で発達するものであり，その

影響を受けたものと考えられる。北白川上層式の影響は，続く彦崎Ｋ１式にかけて強まる傾向にあり，後述するように，彦崎Ｋ１式のうち縁帯文土器の系統を引く一群（a類）は，北白川上層式に近似するというよりも，その一部と見た方が良いであろう。

４．彦崎Ｋ１式（図６）

彦崎Ｋ１式は，岡山県彦崎貝塚上層出土土器を基準として設定された土器型式である[13)]。彦崎Ｋ１式は，津雲Ａ式と同一視されたこともあったが，近年，備讃瀬戸周辺のいくつかの遺跡でまとまった資料が報告されており，これが一時期を画する土器型式であることは明らかである。また，周辺地域との対比から見て，彦崎Ｋ１式の主要部分がさらに細分されることは確実と見られるが，この時期には深鉢の施文形態が単純化するので，明確な形で細分することは難しい。

彦崎Ｋ１式では，津雲Ａ式以来の縁帯文土器の系統に加えて，周防灘・豊後水道方面の平城式や鐘崎式の影響が及ぶので，土器の系統関係がかなり複雑になってくる。彦崎Ｋ１式の基準資料である彦崎貝塚出土の土器には，大まかに見て，津雲Ａ式から変化した縁帯文土器（a類），平城式の影響を受けた一群（b類），鐘崎式の影響を受けた磨消縄文土器（c類）の三者が含まれているので，ここではこのa～c類についてその特徴を整理しておくことにしたい。

［a類］　津雲Ａ式の系統をひく縁帯文土器である。基本的なプロポーションに変化はないが，口縁部や胴くびれ部など，屈曲部の作り出しが明瞭になる。また，口径の小さな土器では，なだらかな波状口縁が盛んで，山の高いものも目立つ（１）。口径の大きな土器には山の低い波状口縁や，平縁のものが多いようである。

口縁形態では，津雲Ａ式に見られた口縁外面への施文に替って，丸く肥厚させた口縁上面や内面に施文を行うものが増加する。津雲Ａ式で盛行した円文や渦文などの主文様を有するものは稀であり，直線的な沈線文を組み合わせた鋸歯状文，区切り文などが盛行する。こうした幾何学的な施文は，津雲Ａ式末で口縁部の円文や渦文が変形することによって生じたものと見られ，後述するように近畿の北白川上層式とも連動した変化と言える。

胴部文様は単純で，条線を垂下，斜行させたものが主流となる。注目されるのは，本来無文で残されるべき胴上部無文帯への施文が復活，盛行することで，これは上述のように，近畿の北白川上層式の影響によるものであろう。垂下条線自体は，津雲貝塚資料中にも見られるが，津雲のものに比べると，彦崎では一本一本の線の幅が細く，櫛歯状施文具によって一度に何本も引かれたものがある。また，これとは別に，比較的太い沈線によって文様が表現されるものもあり（２），このようなものは後述する平城式（Ｃ群）と深い関わりを有する。縄文の使用はふるわず，津雲Ａ式に少量存在した充填縄文を有するものは，全く見られなくなるようである。総じてａ類では，粗製化の傾向が強いと言える。

［b類］　豊後水道方面の平城式の影響を受けたもので，口径の大きな深鉢が主となる。現在のところ，津雲Ａ式までさかのぼる確実な例は知られていない。瀬戸内ではまだ報告例が少なく，

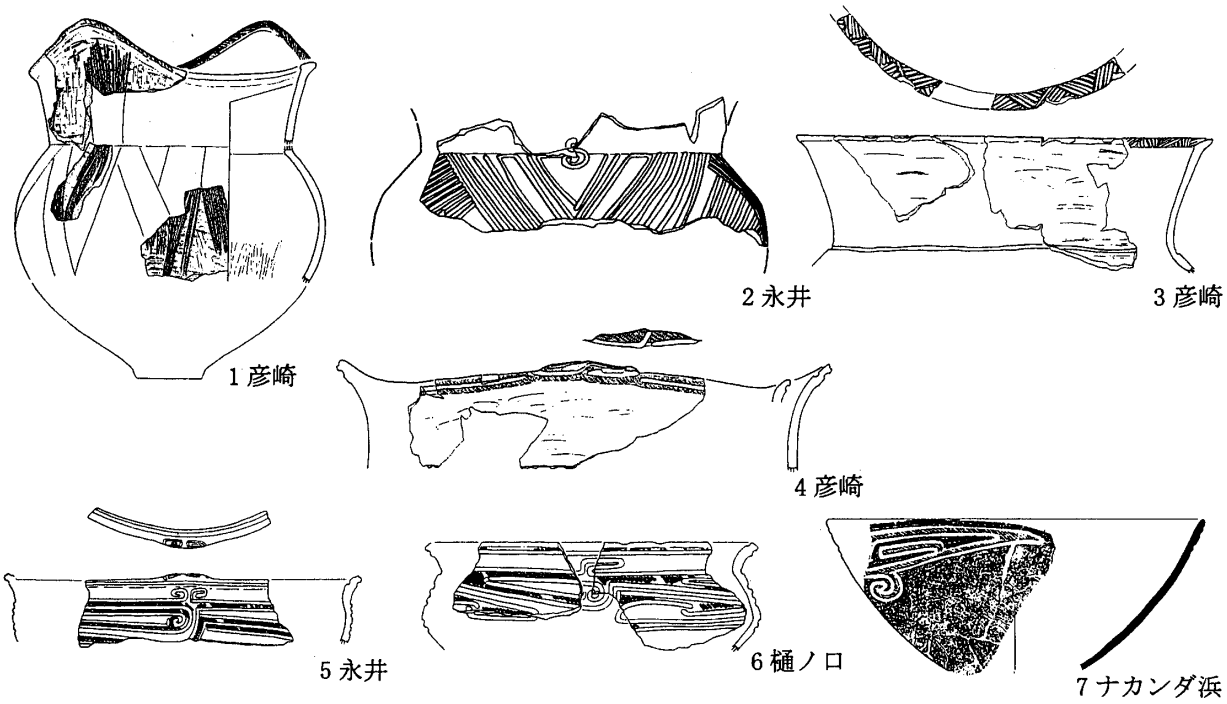


図6　彦崎K１式（１～３：a類，４：b類，５～７：c類）　約1/8

彦崎貝塚でも１個体分の破片が知られているのみである。図示した部分以下の破片は直接接合しないが，強くふくらむ無文の胴部が続くものと見られる。口縁上の突起や，これに絡みつく沈線，幅狭い口縁部文様帯は，後述する平城式A群（小池原上層式）の特徴であるが[14]，突起の形態は著しく扁平化しており，むしろ一種の波状口縁と見た方が良いであろう。このように見ると，大きくなだらかな波状口縁，口縁部文様帯全面に縄文を充填する特徴などは，むしろ平城式C群や同D群に近く，後出的な様相である。なお，b類と平城式との関わりを追求する上で，愛媛県平城貝塚などで発見されている胴部を無文のまま残す一群は注目されるものである（西田・鎌木 1957：図版9－7）。

また，現状では細かな型式変化を論じることができないが，b類は，彦崎K１式に後続する四元式にも受け継がれており，口縁部と胴部に縄文を加えた大型の深鉢として定型化し，安定的に組成の一部を担うようになる点に特色がある（橋本 1994）。

［c類］　磨消縄文を有する一群で，鉢や浅鉢，皿など，浅い器形が多い。

c類に見られる直線的な磨消縄文は九州の鐘崎式に酷似し，香川県永井などでは，鐘崎式類似の橋状把手を有する土器も出土している。鐘崎式は本来，九州方面に分布の主体を置く型式であるが，鐘崎式類似の土器は，彦崎K１式および彦崎K１式類似の土器に伴って，中・四国のほぼ全域にわたって分布することが知られている。これらの中には，高知県田村遺跡群や三重県下川原（名張市遺跡調査会 1997：P 9－9）のように，鐘崎式そのものの進出，あるいは搬入と考えられる事例も散見されるものの[15]，多くの場合，細かな点において鐘崎式とは異なる特徴を有し，在地への

定着を示す。

c類は，全体に粗製化傾向の強い彦崎Ｋ１式にあって，一種の精製土器としての位置を占め，赤彩を有するものも少なくない。また，c類について今一つ注目すべき点は，近畿の北白川上層Ⅱ式に見られる磨消縄文土器との近似で，両者は，器形，文様構成，個々の文様図形において共通する部分が少なくない[16]。北白川上層Ⅱ式の磨消縄文土器については，千葉豊氏の詳細な分析があり，これが堀之内２式の磨消縄文と密接な関係を有し，自律的な変化をたどることを指摘している（千葉 1989b)。従って，彦崎Ｋ１式c類と北白川上層Ⅱ式の磨消縄文土器は，本来全く別の系統に属する土器と見なければならないが，こうした系譜上の問題とは別に，両者の相似的関係が，続く後期中葉に再び西日本のほぼ全域を覆って成立する，類似の土器型式圏の成立に深く関わったと見られる点には，注意しておく必要があろう。

Ⅲ　山陰の編年

山陰地方は，日本海沿岸をたどって北部九州や北近畿との関わりの深い地域である。

この地域では，千葉豊氏による福田Ｋ２式→布勢式→崎ヶ鼻１式→同２式という編年があり（千葉 1989a)，その後，布勢式は古，新の２段階に細分された（千葉 1990)。この編年は，大筋において首肯しうるものであり，ここでもこの編年に従って，記述を進めることにしたい。

特に，周辺地域との関わりで注目されるのは，福田Ｋ２式直後に位置づけられる布勢式の動向である。布勢式は，山陰東部～丹後方面に分布の主体を置く型式であるが，周辺地域の縁帯文土器と密接な関わりを有し，いわゆる縁帯文の盛行に重要な役割を果たしたことが知られている（千葉前出)。

従って，ここでは布勢式の成立と変遷を中心として編年を概観し，周辺地域との対比から若干の整理を試みたい。

１．福田Ｋ２式（島式）

福田Ｋ２式の詳細については，既に瀬戸内の項で述べたので，ここでは重複を避け，瀬戸内の福田Ｋ２式とは異なる点を中心に記述をすすめる。

柳浦俊一氏は山陰における福田Ｋ２式の並行型式として，島式を設定しており，これを１式と２式に細分した（柳浦 2000a，b)。布勢式との関わりで重要なのは柳浦氏の島２式で，島根県平田，三田谷Ⅰ，鳥取県島，栗谷の資料のそれぞれ一部は，口縁部文様帯の成立，把手・突起の発達などの点において，瀬戸内の福田Ｋ２式の新しいものとよく似た様相を示すが，瀬戸内のものに比べると，くの字形に屈曲する口縁形態のものが一定量存在し，口縁部文様帯への施文が二条の平行沈線となるものが目立つ。また口縁外端部への刻み目がふるわない点も，この地域の特色である。

胴部文様では，胴部文様帯が胴くびれ部できちんと分割されたものが多く，これは続く布勢式で，福田Ｋ２式の文様構成を維持した帯縄文が盛行することと関係するのであろう。また，沈線間に

縄文を施さないものが一定量見られ，布勢式に続く。

2．布勢式（図7）

布勢式は鳥取県布勢の資料を基準として，久保穣二朗氏によって設定された土器型式であり，福田Ｋ２式と縁帯文土器との過渡的段階に位置づけられた（久保 1987）。布勢式は，山陰東部から北近畿の一部を主たる分布域としており，類似の土器は瀬戸内や近畿からも出土している。

布勢式については，千葉豊氏による古，新の２細分がある（千葉 1990）。これは主として口縁形態の変化に基づいた細分と言えるが，変化の方向性をよく捉えている。また，千葉氏も指摘しているように，遺跡での出土状況から見ても，古段階と新段階が区分されることは明らかなので，ここでは前者を布勢Ⅰ式，後者を布勢Ⅱ式と呼び換えておくことにしたい。布勢Ⅰ式としては，兵庫県小森岡，見蔵岡の主たる土器が挙げられ，同Ⅱ式では鳥取県布勢，栗谷の資料がまとまっている。

なお，布勢式分布域の外縁に位置する山陰西部では，布勢式に並行する時期のまとまった資料に乏しい。島根県都橋，半田イセなどのわずかな資料がこれに相当するものと見られ，布勢式本体とはやや異なる地域性を有するようであるが，詳細については今後の検討が必要であろう。

［布勢Ⅰ式］　福田Ｋ２式からの変化は連続的であるが，胴部上半が無文化し，口縁部文様帯が胴部の文様から独立する。口縁上の把手や突起，胴部で強くくびれる器形など，全体的なプロポーションは，瀬戸内の大浦浜下層式や小松川式に近似し，口縁部から胴部にかけて橋状把手を有する

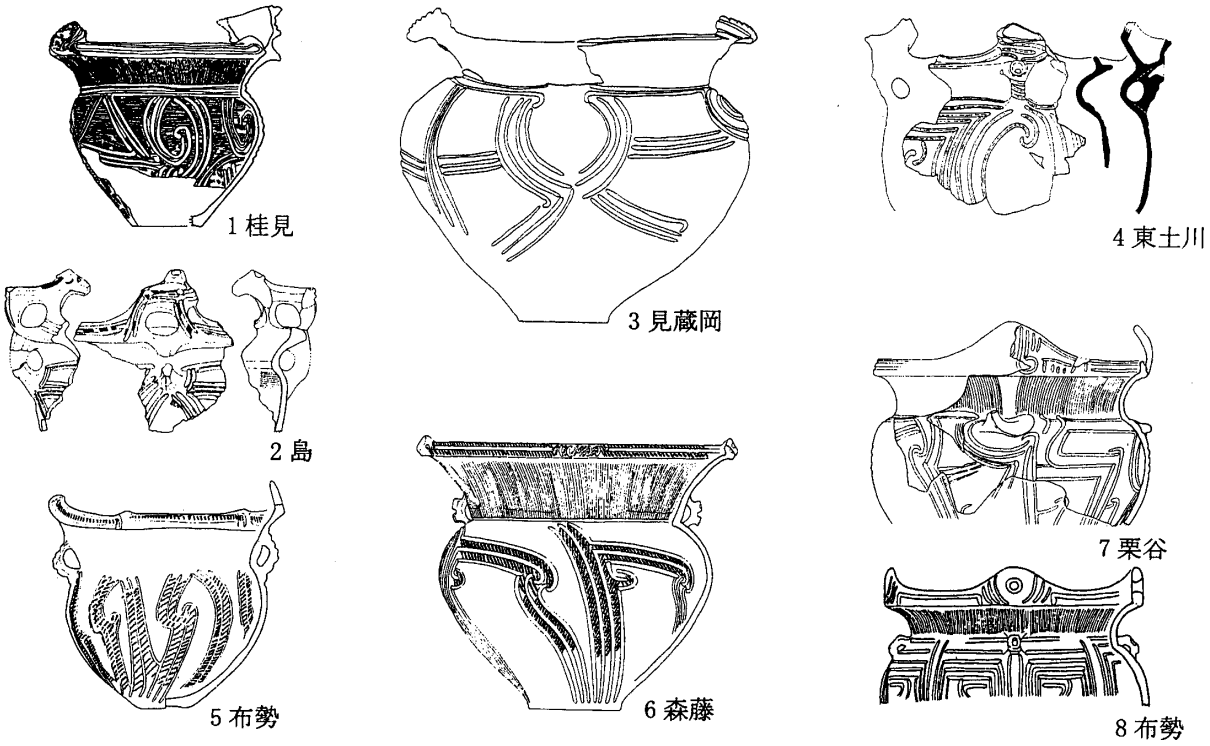


図7　布勢式（1～4：Ⅰ式，5～8：Ⅱ式）　約1/8

ものが多く見られる点は，布勢式の基本的な特徴として重要である。また，胴上部無文帯には，目の細かな条痕（細密条痕）や，雑描き風の細線を加えて一種の文様帯のような効果をあげているものも見られる。

口縁形態では，大浦浜下層式などに見られる口縁上面への施文に対して，口縁外面に施文を行うものが一定量見られ，これは前段の福田Ｋ２式と同様の状況を示していると言える。なお，この点について，千葉氏は，布勢式前半（おおむねここで言う布勢Ⅰ式）の口縁形態に，上面施文型→外面施文型という変化を予想し，この段階がさらに細分される可能性を示している（千葉前出）。しかし，千葉氏が分析の対象とした兵庫県小森岡遺跡は，布勢式分布域の東縁に位置するものと見られ，小森岡に見られる上面施文の系統は，北近畿の影響によるものではないかと思われる。一方，布勢式分布域の中核に位置する鳥取県桂見の完形土器（１）には，くの字形に屈曲する外面施文型の口縁形態が見られ，胴部の文様構成とも合わせて，福田Ｋ２式からの連続的な推移を認めることができる。

胴部の文様構成については，引き続き帯縄文による渦巻きなどの文様が良く維持されおり，沈線間に縄文を充填しない平行沈線文系のものも一定量存在する。また，瀬戸内方面に多く見られる，区画文を並べてその間に縄文を充填するものが全く見られない点は，この地域の特色として重要である。

［布勢Ⅱ式］　全体的なプロポーションに大きな変化はないが，布勢Ⅰ式で盛んだった口縁上の把手が次第に平板化し，口縁部文様帯に飲みこまれて波状口縁への傾斜を示す。布勢Ⅱ式に見られる口縁外面への施文は布勢Ⅰ式から連続的な変化を追うことができるもので，この段階では波状口縁と結びついて発達する。布勢式の特徴である口縁外面に幅広く加えられる口縁部文様帯は，瀬戸内の津雲Ａ式や，近畿の芥川式に見られる口縁外面に加えられる口縁部文様帯の成立に影響を与えている（註12参照）。

胴部文様では個々の文様図形が懸垂化し，垂下する縄文帯を鉤手状につないだ単純なものが目立つようになる。また，縄文を施さないものでは描線の多条化が顕著である。総じて，渦巻きなどの図形は衰退する傾向にあり，単純な施文によって器面を均等に埋める傾向が顕著である（７，８）。

布勢Ⅰ式からⅡ式への変化において認められるこれらの諸特徴は，瀬戸内の津雲Ａ式や近畿の北白川上層式にも共通するもので，大局的に見て，Ⅰ式からⅡ式への変化は，津雲Ａ式や北白川上層式との差異を薄めていく過程として捉えることができる。特に口縁形態に認められる斉一性の強まりや，胴部文様の懸垂化，沈線の多条化，器面に対する割りつけの均等化といった大局的な傾向は，相互の強い影響関係を窺わせる。

３．崎ヶ鼻式（図８）

山陰では，布勢式に後続する土器型式として，崎ヶ鼻式がある。千葉豊氏は，崎ヶ鼻式を津雲Ａ式に並行する１式と，彦崎Ｋ１式に並行する２式に細分しており（千葉 1989a），妥当な見解と

見られるが，近年の１式に属する資料の増加に比して，２式段階の資料は乏しい。図８には，おおむね１式に属すると考えられる資料を図示している。

崎ヶ鼻１式に見られる，縁帯文の盛行，胴部文様の単純化，橋状把手の衰退などの特徴は，瀬戸内の津雲Ａ式や近畿の北白川上層式に共通し，前段に増して地域間で斉一性が強まる傾向を認めることができる。また，布勢Ⅱ式には見られなかった，胴部に広く縄文を加える手法は，そもそも瀬戸内や近畿に見られる，文様図形の「地」の部分に幅広く縄文を充填する手法から生じるものとみられ，その影響を受けたものであろう。この辺りの経緯は，１の土器に端的にあらわされている。

要するに，布勢Ⅱ式から崎ヶ鼻式への変化は，布勢Ⅱ式からの独自的展開というよりも，瀬戸内や近畿との類似性の強まりとして理解した方が適切である。

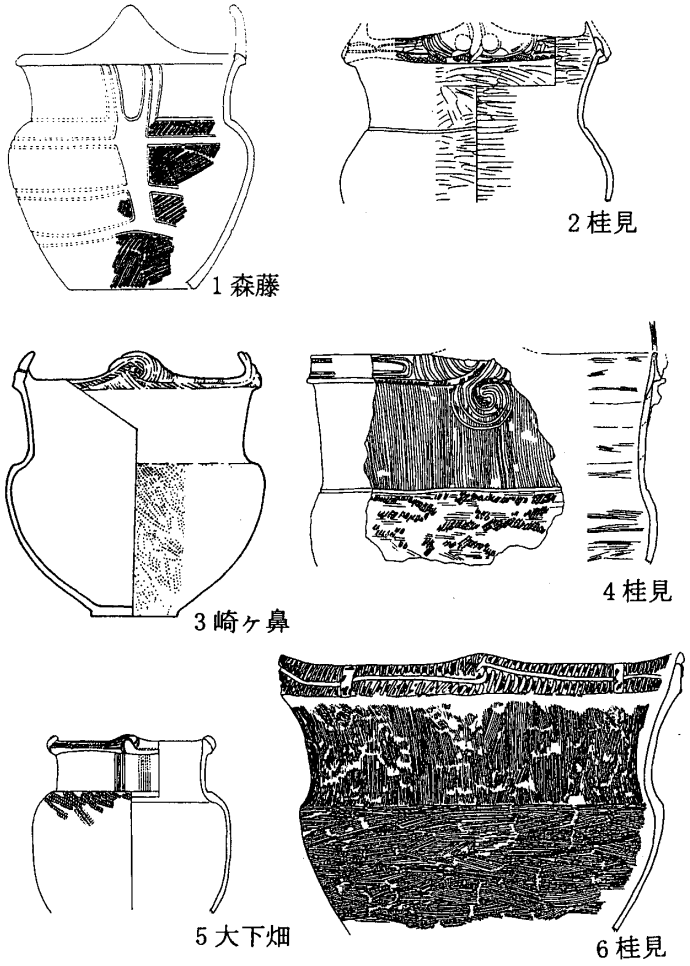


図８　崎ヶ鼻式　約１/８

崎ヶ鼻１式に属するまとまった資料としては，島根県五明田，百塚第七，桂見などの例が挙げられ，特に桂見では完形土器が多く出土している。なお，崎ヶ鼻１式の典型とされる崎ヶ鼻洞窟の完形土器（３）は，実際には崎ヶ鼻１式としては後出的な土器と見られ，布勢Ⅱ式からはやや隔たりがある。

続く崎ヶ鼻２式では，彦崎Ｋ１式近似の鋸歯状文などの幾何学的な口縁部文様や，条線文が盛行するようであるが，まとまった資料に乏しい。断片的な資料から見て，瀬戸内の彦崎Ｋ１式に準じて考えておいて大過ないであろう。なおこの段階の山陰西部では，島根県三田谷Ⅰ，崎ヶ鼻洞窟などで九州の鐘崎式の出土が点々と知られており，九州系土器の影響が強まったことを窺わせる。

４．山陰・瀬戸内編年の対比

山陰における福田Ｋ２式の状況は，瀬戸内と大きな違いがなく，両者が時間的に並行することは明らかなので，ここでは布勢式以降の対比について述べておく。

布勢Ⅰ式に見られる胴部上半の無文化は，瀬戸内の大浦浜下層式や小松川式に共通するので，こ

れらが並行した変化であることは明らかである。また，先に指摘したように，香川県大浦浜，岡山県田益田中には，橋状把手を有する布勢Ⅰ式近似の土器があり，逆に，布勢Ⅰ式の一部には，口縁上の突起や把手の発達，口縁外端への刻み目など，大浦浜下層式に共通した特徴を認めることができる。

布勢Ⅱ式段階では，把手や突起の衰退と，それに替わる波状口縁の盛行，口縁部主文様の発達，懸垂的な胴部文様などの特徴が，香川県なつめの木や松ノ木５次調査資料の一部など，ここでいう津雲Ａ式（古）に共通する。また，なつめの木や津雲貝塚には，懸垂的な帯縄文を有する布勢Ⅱ式近似の胴部破片が見られ，松ノ木５次調査でも，布勢Ⅱ式の系統に属するとみられる土器が出土していることは布勢Ⅱ式の影響力を示す事例として重要である（本山町教育委員会 2000：第57図3240）。

布勢Ⅱ式に続く崎ヶ鼻１式と瀬戸内の津雲Ａ式（新），崎ヶ鼻２式と彦崎Ｋ１式は，並行するというよりもほとんど同一型式と見て良いものであり，両者が並行することは明らかである。

Ⅳ　九州の編年

近年の九州における資料増加にはめざましいものがあり，中でも周防灘，豊後水道沿岸地域を中心とする東九州，および宮崎県南部～鹿児島県にかけての南九州で著しい。従って，ここではこの両地域を取り上げて土器型式の変遷を検討し，これを瀬戸内の編年と対比することによって編年的整理を行うことにしたい。また，この地域では，特に編年論上の問題として，平城式の編年に関する議論が長らく続いており，あわせてこの問題についても，整理を試みるものである。

１．東九州

ここで言う東九州とは，おおむね豊後水道，周防灘沿岸，およびその周辺地域を対象としている。この地域では，前川威洋氏の提示した小池原下層式→小池原上層式→鐘崎式という編年を基礎として，後藤晃一氏や水ノ江和同氏らによる細分研究が行われている（乙益・前川 1969，西 1980，後藤 1993，水ノ江 1993など）。このうち，小池原下層式から小池原上層式への変遷については，四国の平城式との関係から，近年，細かな議論がなされているので，特にこの点を中心として，検討を加えることにしたい。

１－１．小池原下層式（図９）

小池原下層式は，大分県小池原貝塚貝層下黒土層出土の一群の土器を基準として設定された土器型式であり，当初，四国の宿毛式に対比された（乙益・前川 1969）。その後，前田光雄氏は小池原下層式の内容を検討し，小池原貝塚下層資料中に，宿毛式や福田Ｋ２式に並行する一群と，縁帯文土器成立期との過渡的な一群が含まれていることを指摘している（前田 1994）。この見解はおおむね妥当なものであり，これによって小池原下層式は，大きく古，新の２段階に区分できる[17]。こ

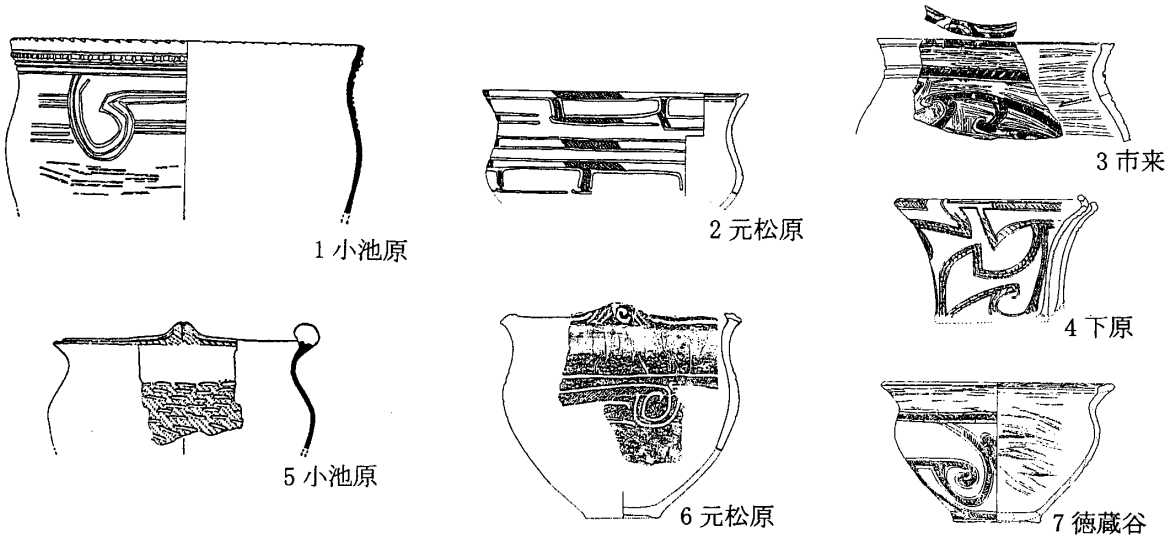


図9　小池原下層式（1～4：古段階，5～7：新段階）　約1/10

れとは別に，小池原下層式と周辺型式との区分や，地域性に関わる問題もあるが，ここでは型式内容を広く捉えて，九州に分布する福田K 2式および成立期の縁帯文土器に並行する土器群を，小池原下層式と呼ぶことにしたい。

小池原下層式のまとまった資料を出土した遺跡として，標式遺跡である小池原貝塚の他，佐賀県徳蔵谷，福岡県貫川，永犬丸，山鹿貝塚，元松原，天神山貝塚，大分県下原，西和田貝塚などがあげられ，遠く宮崎県石河内本村，尾立，鹿児島県市来貝塚にも良い資料がある。

古段階の小池原下層式には，小池原貝塚や下原の資料に代表されるように，福田K 2式に近似するものと宿毛式に近似するものの両者が認められ，1の口縁部に見られる刻み目を有する隆線は，南九州の岩崎上層式とも関わりの深いものである。全体として，器形や文様帯の配置は宿毛式に近いものが多く，文様構成については福田K 2式的な帯縄文を用いたものが目立つようである。

一方，新段階では，西部瀬戸内の小松川式や南四国の松ノ木式との近似が強く，口縁上の小突起や幅狭い口縁部文様帯，器壁の丁寧な磨研，胴部に加えられる大きな渦巻きなどの特徴は，後続する小池原上層式や平城式との関わりで注目しておく必要がある。

なお，小池原下層式の細分に関して，水ノ江和同氏は，小池原下層式を縁帯文土器成立期に属するⅠ式と，福岡県土佐井6号住居址出土の土器に代表されるⅡ式に細分している。詳細については次の項で述べるが，土佐井の土器は小池原貝塚の小池原下層式とは明確に区別されるもので，むしろ平城式B群やC群に近いものと思われ，この土器を抜き出して小池原下層式と上層式の中間に置くことは適当ではないと考えている。

1－2．小池原上層式と平城式（図10，11，12）

小池原下層式に続く小池原上層式は，四国の平城式と密接な関わりを有する土器型式である。この辺りの編年をめぐっては，1990年以降長らく議論が続いているので，以下にその経緯を簡単に振り返っておこう。

1957年，鎌木義昌氏は愛媛県平城貝塚出土の土器を1～5類に分類して解説し，このまとまりをもって平城式を設定した。鎌木氏の平城式1類は，現在の観点から見ると，小池原上層式を主体に鐘崎式をも含むもので，大分県小池原貝塚上層資料とほぼ同じ内容と言ってよい[18]。同2類は縁帯文土器の仲間とされ，口縁部に円文，渦文，窓枠状文などの縁帯文の発達した津雲A式近似の一群を挙げている。同3類は浅鉢，同4類は，瀬戸内の彦崎K 1式に相当するもの，同5類は縄文の加えられた一種の粗製土器である。鎌木氏はこれら1～5類を，時間的まとまりとして捉え，鐘崎式＝平城式＝津雲A式・彦崎K 1式という並行関係を示している（西田・鎌木 1957）。

鎌木氏らによる平城貝塚の報告発表後，豊後水道を隔てた九州側において，ほぼ同時期の遺跡である小池原貝塚が調査され，前川威洋氏はこの調査成果によって小池原上層式→鐘崎式→北久根山式という変遷を提示している。さらに前川氏は，小池原上層式と平城式1類との類似を指摘しており，これによって平城式1類が鐘崎式に先行することが示された（乙益・前川 1969）。

一方，四国側ではその後，犬飼徹夫氏によって平城式1類→同2類→片粕式という序列が想定され（犬飼 1976），のちに平城式1類，同2類は，それぞれ平城Ⅰ式，同Ⅱ式と改められた（犬飼 1982）。また，鐘崎式土器の詳細な編年的検討を行った西健一郎氏も，平城式Ⅰ群（鎌木氏の平城式1類）→同Ⅱ群（同2類の一部）→同Ⅲ群（同2類の一部）という平城式の変遷を示し，これが九州の小池原上層式→鐘崎式という変遷に並行することを論じている（西 1980）。

このような変遷観は，九州側と四国側で，小池原上層式や平城式1類に由来する土器群が，別個の系統的変遷をたどって後期中葉の北久根山式・片粕式に至るという理解に立つもので，その後長らく支持を得ていたが，1990年，西脇対名夫氏は長崎県伊木力遺跡の報文中において，九州における後期前葉～中葉の土器を分析し，“浮線の輪廻”という観点から，平城Ⅱ式→同Ⅰ式→鐘崎式という平城式の逆転編年を提示した（西脇 1990）。西脇氏の具体的な土器の分析は非常に難解で，筆者にはこれをよく理解することができない。しかし，そもそも西脇氏のいう“第一浮線”や“第二浮線”など，“浮線”の認定が，客観的に見て理解しづらい点は問題であるし，土器の変化の方向性自体についても，筆者には納得できない部分が少なくない。

伊木力報告の刊行をひとつの契機として，その後の当該期の資料増加には目を見はるものがある。特に平城Ⅱ式とされる資料の検出例が九州側で増加したこと，鐘崎式に属する資料の検出例が四国側で増加したことは，新たな形勢として注目しなければならない事実である。この点については，土器の変遷を概観した後に筆者の考えを述べたい。

西脇氏の逆転編年説の発表以降，このような資料的充実を背景として，平城式や小池原上層式，鐘崎式を巡る議論が活発化したことは，従来の編年を再考する良い機会となった。

宮本一夫氏は，愛媛県文京11次調査の報告中において西脇氏の説を支持し，改めて平城式の変遷過程を提示した（宮本 1990）。また水ノ江和同氏は，福岡県土佐井6号住居址出土の資料を，従来の小池原下層式と小池原上層式との中間に位置付け，小池原下層Ⅱ式と呼んでいる（水ノ江 1993）。そして今日，この平城Ⅰ式と同Ⅱ式の逆転編年は広く支持されているようである[19]（千葉 1992, 2002b，坂本 1994，木村 1996，柳澤 1997など）。

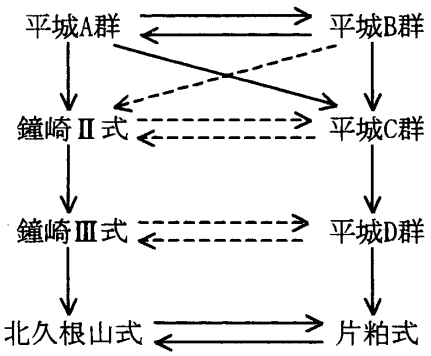
これに対して前田光雄氏は，主として①平城Ⅰ式と，宿毛式および成立期の縁帯文土器との近似，②平城Ⅱ式と片粕式との近似から，平城Ⅰ式→同Ⅱ式→片粕式という変遷を改めて主張している（前田 1993，1994）。また三輪晃三氏は，宿毛式直後に位置づけられる高知県三里の土器を平城Ⅱ式と見て，三里→平城Ⅰ式→同Ⅱ式→片粕式という編年を示しているが，土器の変遷観自体は，前田氏の見解に近いものと言える（三輪 1996）。犬飼徹夫氏も三輪氏の分析を支持して，改めて平城Ⅰ式→同Ⅱ式という変遷観を提示し，この変遷過程が，小池原上層式から鐘崎式への変遷とは異なる系統に属することを再論している（犬飼 1993，1997a，b，2001）。

結論が先になるが，現在平城Ⅱ式とされているものには，大雑把に見て，平城式1類（ここで言う平城式A群）に並行するもの（同B群）と，1類に後続し，北久根山式・片粕式に先行するもの（同C，D群）があり，これらを区別することが必要である。従って，ここでは平城式の編年を表2のように整理しておく。

平城式A群は，鎌木氏の平城式1類，犬飼氏の平城Ⅰ式のそれぞれ一部に相当し，前川氏の設定した小池原上層式にほぼ一致する。平城式B群およびB群から変化したC，D群は，鎌木氏の平城式2類，犬飼氏の平城Ⅱ式のそれぞれ一部に相当し，瀬戸内方面の縁帯文土器の影響を強く受けたものである。

要するに，九州側では小池原上層式→鐘崎式→北久根山式という変化があり，四国側，特に西四国ではこれに並行して平城式A群・B群→同C群→同D群→片粕式という変化がある。これは，1990年以前の編年観に近いものであるが，平城式や鐘崎式の一部は中四国地方にも進出し，系統的に変化するので，状況は複雑である。

表2　平城式土器の編年



＊矢印は影響関係を示す。実線は強い影響関係、破線は弱い影響関係。

［平城式土器の編年］

A群（図10）

A群は，九州の小池原上層式に相当し，両者は同一型式と考えて良いものである。

器形には，大型の深鉢と，やや小型で器高の低い鉢があるが，両者の区別は曖昧である。鉢には，口縁部から胴部にかけて二対の橋状把手を取りつけたものが多い。

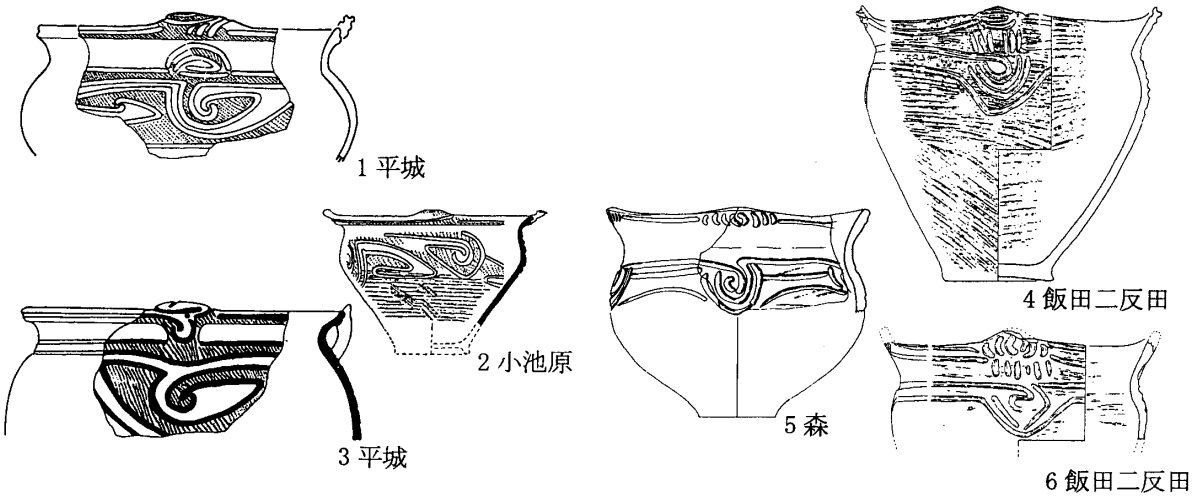


図10　平城式①（1～3：A群，4～6：B群）　約1/10

まず目につくのは，文様を描く沈線が太く浅い点で，小池原下層式の沈線とは明らかに異なる。

口縁は，基本的に平縁であり，口縁上には沈線の絡みつく小突起が付される。この他に，波状口縁をなすものや，突起下に列点，あるいは弧線が付加されるものもあり，これはB群の影響を受けたものであろう。口縁部文様帯の装飾は単純で，一条の横走沈線と，その直下に縄文が加えられることを原則とし，沈線末端を抉るように刺突する手法が特徴的である。

胴部の文様は，基本的に区画文の組み合わせと見て良いが，松ノ木式などに見られる追いまわし式の施文とは異なり，区画文を規則正しく繰り返すことによって，一種の帯縄文的な効果をあげており，両者の中間的な構成と表現した方が適切である。宿毛式や松ノ木式の区画文と，平城式A群（平城Ⅰ式）の区画文との関わりについては前田光雄氏の分析があり（前田 1994），両者の密接な関係を論じたものとして優れている。全体として，平城式A群の胴部文様は，小池原下層式や宿毛式などの文様構成に似て，幅広い縄文部と無文部が幾重にも重なる傾向が強く，文様の主たる意匠部を判断することが難しい場合もある。しかし，基本的には縄文の加えられた部分が「図」に相当すると見て良いであろう。

現在のところ，小池原下層式（新）と平城式A群との中間を埋める資料はほとんど知られていないので，両者の間にはある程度の空白が介在するのであろう。しかし，A群に見られる未発達な口縁部文様帯，口縁上の小突起，胴部の文様構成，器壁の磨研などの諸特徴は，小池原下層式（新）や宿毛式の一部に共通し，図9－5と図10－1の類似は無視できないものである。また，A群から新たに現れる，胴上部に跳ね上がる波頭状文様，図形を縁取る太く浅い沈線，沈線末端を刺突するように深く抉る手法などは，南九州の指宿式に共通するもので，特に鉢形土器ではその傾向が著しい（例えば図10－1と図15－8）。要するに平城式A群は，小池原下層式や宿毛式の伝統に加えて，南九州や中九州の土器型式の影響を強く受けて成立したものと考えられる。この点に関して，今後A群の最古のものを追求する作業が必要となろう。

平城式A群に並行する九州の小池原上層式は，細かく見ると周防灘沿岸周辺のものと豊後水道沿岸周辺のものとで違いがあり，周防灘沿岸のものでは文様構成の乱れが著しく，縄文施文がふるわない。一方，豊後水道方面のものは，当然のことながら平城貝塚の平城式に近い様相を示す。

B群（図10）

鎌木氏の平城式2類のうち，「口縁端部の丸い仲間」とされたものにほぼ相当するようであるが，平城貝塚資料中には完形土器がほとんどない（図5－8がそれに相当する）ので，図10には大分県の遺跡から出土した土器を挙げている。

B群は，小池原下層式から連続的に変化した縁帯文土器であり，小池原下層式（新）に通じる特徴を多く有するとともに，全体として瀬戸内の津雲A式との近似が強い。A群との相違点として，①橋状把手を有さず，丈の高い深鉢を主体とする点，②やや細い沈線，③広めの口縁部文様帯と，そこに加えられる円文や渦文，④波状口縁の盛行，⑤磨消縄文がふるわず，平行沈線文が多用されることなどを挙げることができ，特に沈線を重ねて描かれる胴部の渦巻文は，この種の土器として目につく特徴である。この渦巻文は小池原下層式（新）まで遡ると，図9－6のような鈎状文にたどりつくので，B群に見られる沈線の多条化，磨消縄文の衰退などの現象は，瀬戸内の津雲A式と歩調を合わせた変化と言える。

要するにB群は，当初鎌木氏が指摘した通り，縁帯文土器の仲間と見ることができ，基本的にA群とは異なる系統に属する土器と考えなければならない。ただし，太く浅い沈線が用いられる点や，口縁上の小突起，胴部文様帯下端を沈線で画する特徴などは，瀬戸内の津雲A式とは異なり，A群の影響を受けたものであろう。

A群とB群の良い伴出事例として，大分県飯田二反田4号住居址の資料が挙げられる。しかしこの資料は，実際にはC群や鐘崎Ⅱ式に近づいた段階に属するものと見られ，ここに示したA群（1～3）およびB群の一部（5）は，4号住居址のそれよりもやや古い特徴を有する。

なお，鎌木氏の報告（西田・鎌木 1957：図版五）や，平城貝塚4次調査資料（図5－8），愛媛県八幡野出土土器の一部に見られる，波頂部下に円文を配する土器は，瀬戸内との関わりで重要である。この一群は，明らかに瀬戸内の津雲A式に近似し，円文を囲む沈線が多条化していない点や，波状口縁の感じから見て，一部は津雲A式（古）まで遡る可能性がある。また，高知県三里などで出土している，口縁部文様帯のみを有する宿毛式系統の土器との関係も問題となろう。これら古式のB群は，平城式と小池原下層式との関係を追及する手がかりとなるものと見られ，今後の動向が注目される。

C群（図11）

鎌木氏の平城式2類のうち，「口縁端部が直角に削られた痕跡を有する仲間」にほぼ相当し，1976年に犬飼徹夫氏が平城式2類として図示した土器も，このC群が中心である。

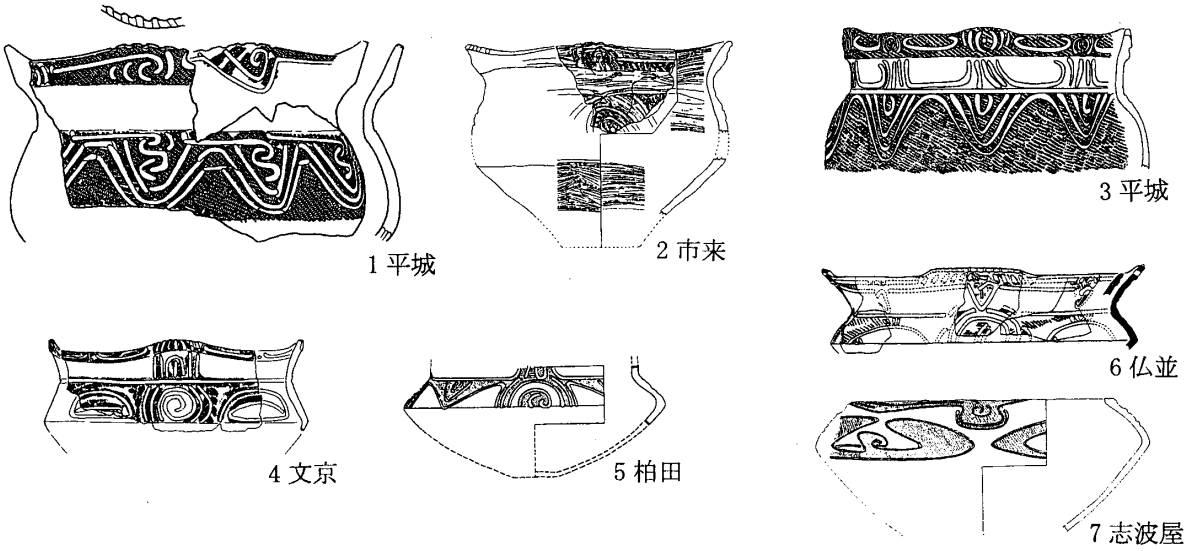


図11　平城式②（1～3：C群，4～6：D群，7：D群？）　約1/10

C群は主としてB群から変化したもので，B群に比べると規格的なプロポーションのものが多く，段や屈曲部が明瞭にあらわされるようになる。また波状口縁の形態は，B群に比して大きくゆるやかなものが多い。

この他目につく特徴として，口端を削り取ることによって平坦面を作出するものが現れ，波状口縁を有するのものでは，しばしば波頂部に刻み目が施される。この部分に縄文が加えられるものもある。また，口縁内面にも施文を行うものが現れ（1），片粕式に続く。

胴部文様はB群に引き続き，渦巻きを基調とした沈線文が盛んであるが，沈線を何本も並べて加える傾向が強まるとともに，渦巻きが懸垂的になって下向きの三角形になるものが現れる。文様図形の懸垂化は，瀬戸内の彦崎K 1式にも通じる特徴であり，C群の一部は彦崎K 1式の一部（図6－2など）と強い近似を示す。また，B群では無文地に直接文様図形を描く場合が多いようであるが，C群では地文に縄文を加えたものや充填縄文のものが見られ，縄文施文が盛行する点に特徴がある。

C群に属する資料としては，平城貝塚に典型的な土器（1）があり，この他に，高知県片粕や大分県エゴノクチにも良い資料が見られる。また，遠く鹿児島県市来貝塚からも類例が知られている（2）。

D群（図11）

胴部がソロバン玉状に強く屈曲する鉢形土器を中心とした一群をD群とする。この種の土器は，平城式の基準資料には含まれておらず，これを平城式と呼ぶのは躊躇されるが，これまで多くの論考において平城式とされてきた経緯があるので，とりあえずここでは平城式D群としておきたい。D群は，愛媛県文京11次調査で比較的まとまって出土している他，福岡県柏田，大分県ワラミノ，

佐賀県志波屋六本松，岡山県権現谷岩陰などからも報告されており，遠く大阪府仏並71－ODでも類似の土器が出土している。しかし，どの遺跡においてもD群が主体を占めるような状況ではなく，あくまで客体的な存在と言える。従って，そもそもD群が特定の地域において，主体的に一時期を画するものであるか否かという問題についても現状では不明瞭であるが，C群がまとまって出土している平城貝塚にこの種の土器が見られないこと，D群の器形や文様構成が，片粕式や北久根山式の一部に類似することから考えて，おおむねD群はC群に後出するものと考えられる。

D群は，C群に比べると小型，薄手の傾向があるようで，A～C群までの大型，厚手という平城式のイメージからはやや隔たりがある。胴部で強く屈曲する鉢はこの群に特徴的であるが，先行するC群には胴下部に湾曲を有するものがあり（図11－1，2），鐘崎Ⅱ式（図13－B）や彦崎K1式c類（図6－6）にもこれとよく似た特徴を認めることができる。さらにこれは，後続する片粕式や北久根山式の鉢形土器にも通じる特徴であり，胴部文様帯が屈曲部よりも上に位置する点でも共通している。

このような鉢形土器の他に，平城貝塚で報告されている片粕式的な深鉢（木村 1996：第313図－17）も，おおむねこの段階に近いのではないかと思われるが，まとまった資料に乏しく不明瞭である。今後は鉢形以外の器形の動向にも注意を払っておく必要があろう。

宮本一夫氏によって報告された愛媛県文京11次調査出土の一群の土器は，D群の編年的位置を知る上で重要である[20]。この資料は平城式の逆転編年説の一つの根拠となっているが，4の土器は，胴部で強く屈曲する特徴に加えて，節の非常に細かい整った縄文や，細めの沈線，胎土に金雲母を多く混入する特徴が，片粕式や北久根山式など，後期中葉の土器に近似する。文京では，この種の土器に条線文を有する彦崎K1式近似の深鉢，および三本沈線の磨消縄文土器が伴っており，後者はしばしば福田K2式との関わりで論じられてきた。しかし，断面凹条の浅い沈線，節の細かな縄文，胎土，焼成の感じなどは4の土器に共通し，むしろこのような土器は，備讃瀬戸の四元式などに見られる磨消縄文土器と関わりを有するものと考えられる。高知県田村遺跡群でもよく似た土器が出土している。従って，この種の三本沈線を有する磨消縄文土器は，福田K2式とは無関係な土器と見なければならない。

なお，D群に見られる胴部の屈曲する鉢形土器は，上述のように後期中葉の片粕式や北久根山式の鉢につながるものであるが，これとは別に，南九州の市来式や市来式の周辺型式に伴う鐘崎Ⅲ式も，この種の鉢の成立に影響を与えることが知られており，片粕式，北久根山式に伴う近似の形態を有する鉢は，いくつかの異なる系統の磨消縄文土器が統合されることによって生み出されたものとみられる。北久根山式の段階で，深鉢の明瞭な地域性とは対照的に，広い範囲に類似の形態装飾を有する鉢が広がるのはこのためであろう。

平城式の編年はおおむね以上のように整理されるが，この他，重要と思われるいくつかの点について検討を加えておきたい。

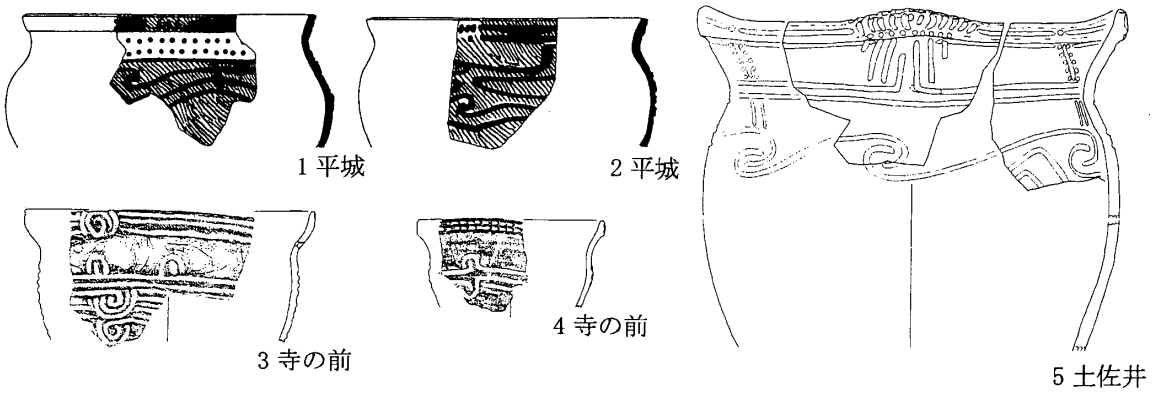


図12　平城式及び平城式と関連を有する土器　約1/10

水ノ江和同氏が小池原下層Ⅱ式とした福岡県土佐井6号住居址出土の土器（図12－5）は，類例の少ない土器であり明確な位置付けが難しい。しかし，なだらかな波状口縁の形態や，口縁部文様帯及び胴部上半への施文形態はB群やC群に近似し，器壁が分厚く大型という点でも一致する。この土器の胴部文様は，多くの研究者によって指摘されている通り，図12－1，2など，平城式2類に対比され，地文に縄文を施す点も共通している。これらの土器に見られる太く浅い沈線や弛緩した鈎状文，文様帯下端を画する波線は，やはり平城式B群やC群にも通じる特徴である。従ってこの土器は，小池原下層式の仲間というよりも，平城式，あるいは小池原上層式の一部と見なければならないであろう。

平城Ⅱ式として取り上げられることの多い大分県寺の前の土器（3，4）もまた特殊な土器で，類例に乏しい。3の土器に見られる胴部の整然とした渦巻きは，C群やD群に近似し，三本沈線による磨消縄文は，文京11次資料の一部に見られる磨消縄文に通じるものである。また，3の内湾する口縁形態は，鐘崎Ⅲ式の一部に見られる内湾口縁（図13－C）との類似が問題となろう。

［分布上の問題］

ここで土器の分布上の問題について二三私見を述べておきたい。

近年，高知県尻貝や田村遺跡群，愛媛県犬除など，南四国の一部の遺跡において，平城式A群や鐘崎Ⅱ式が，平城式2類（平城式B・C・D群）を伴わずに出土する事例が知られるようになってきた。これらの遺跡には継続期間の短いものが多く，逆に，宿毛式～平城式～片粕式へと連続的に形成される，愛媛県平城貝塚や岩谷，高知県片粕のような遺跡では，B群やC群が一定量出土している。調査された遺跡数自体がまだ少ないので，この少数例に基づいて具体的な議論をすべき状況にはないものの，前者の事例は，鐘崎式の東進という大局的な動向に関係するものではないかと思われる。高知平野中央部に位置する田村遺跡群での鐘崎Ⅱ式のまとまった出土は，近接する栄エ田や奥谷南から出土している彦崎K1式および平城式C群と関連して，今後検討を要する課題であろう。

これとは逆に，九州側でも福岡県土佐井，大分県エゴノクチなど，平城式B群やC群が，ほぼ単純に出土する事例が知られている。土佐井6号住居址の例は，土器の個体数自体が少ないので多少問題があると思っているが，エゴノクチの例はここで言うC群にほぼ相当する良いまとまりであり，本来鐘崎Ⅱ式の勢力下に属する大分県でのC群のまとまった出土は，やはり解釈の難しい事例である。このような事例は先行型式であるB群が，国東半島周辺に密に分布することと関係するのかも知れない。

全体的な状況をまとめておくと，A群は小池原貝塚や平城貝塚をはじめ福岡県中村石丸，大分県佐知などからまとまって出土しており，大分県森貝塚，飯田二反田，尾畑，横尾，十合野などではA群とともにB群がまとまって出土している。十合野や尾畑には，A群とB群の中間的な土器も多く見られる。C群は，平城貝塚，高知県片粕，大分県エゴノクチの資料がまとまっており，平城貝塚，片粕では鐘崎Ⅱ式が伴出している。続くD群は愛媛県文京に良い資料がある。こうして見ると，B群～D群への型式変化の主体を担ったのは，おおむね豊後水道両岸地域，特に西四国を中心とする地域と目される。しかし，この地域でも鐘崎式がまとまって出土する事例が知られており，土器の分布の実態は単純ではないようである。

以上のように，この時期の土器型式の分布は錯綜した状況にあると言え，今後の動向が注目される。しかし，土器の編年は，やはり土器自体の分析に基づくべきであり，個々の遺跡の状況は，最終的には土器自体の編年によって説明されなければならないであろう。

1－3．鐘崎式（図13，14）

鐘崎式は，主として小池原上層式（平城式A群）から変化したもので，両者の境目は極めて連続的である。鐘崎式の細分については，田中良之・松永幸男両氏によって示された鐘崎Ⅱ式→同Ⅲ式という編年が基礎となっているが（田中・松永 1981）[21]，文様図形の変遷過程の検討に重点が置かれており，個々の土器を対象とした具体的な細分の検討は今後の課題であろう。

鐘崎式の分布は九州のほぼ一円に及び，南九州でも市来式に伴出することが知られている。また，当初から指摘されていたように，近年，各地で増加しつつある資料を見ると，鐘崎式と総称されている土器群は，かなり細かな地域性を有するようである。しかし，ここで九州全体を取り上げて議論する余裕はないので，東九州の状況を中心として変化の概略を記すに留めたい。

まず，小池原上層式と鐘崎Ⅱ式との境をどこに置くかという点が問題となる。鐘崎Ⅱ式の一括資料として扱える事例は多くないが，大分県小池原貝塚上層，愛媛県平城貝塚，高知県尻貝の資料から，小池原上層式（および平城式）を差し引いた残りがおおむね鐘崎Ⅱ式に相当し，これらの資料中に特徴的に見られる，巴状の渦巻文（図14－2，3）の出現を鐘崎Ⅱ式の一つの指標と見ることができるであろう。しかしこれによって両者を区分するには限界がある。

この他，小池原上層式から鐘崎Ⅱ式への推移には，おおむね以下のような変化が認められる。

・口縁部の外反が短く強くなり，橋状把手を有するものが増加する。

・口縁の屈曲部内面が一種の文様帯のようにあしらわれるものがあり，この部分に渦巻きなどの施文を有するものが見られる。

・文様を描く沈線が細く深くなり，小池原上層式段階の曲線的な文様図形が整理されて，直線的な構成になる。

図13，14に鐘崎式の器形，胴部文様の変遷を簡単に模式化して示す。いずれも代表的なものを図示しているに過ぎないが，大雑把な変化の方向性はこのようなものと考えている。

［器形］

鐘崎Ⅱ式では，橋状把手を有するＢと把手のないＡが一般的な器形であり，Ａには大型の土器が多く，Ｂでは小型で丈の低い土器が目につく。また，Ｂには磨消縄文を有する土器が多いようで，精製の傾向が強い。なお，南九州で出土する鐘崎Ⅱ式はほぼＢに限られており，鐘崎式の広がりを考える上で興味深い現象である。

続く鐘崎Ⅲ式では，器形が多様化する。周防灘方面には，ＣやＤのように波状口縁を有するものが存在し，大型の土器が多い。また，Ｃのように口縁外面に文様帯を有する土器が存在する点は，北久根山式との関わりで重要である。一方，中九州や南九州に広がるＦのような器形には丈の低いものが多く，口縁部に貫通孔を有する把手が発達する。

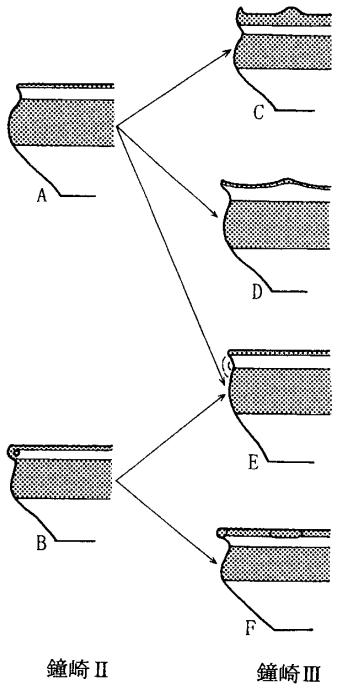


図13　鐘崎式の器形・文様帯配置の模式図

［胴部文様］

胴部文様の細かな変異は極めて多様であるが，図示したように鐘崎式に見られるすべての文様図形は，基本的に小池原上層式の渦巻きと区画の組み合わせの変化によって説明できる。

小池原上層式では，文様図形を構成する帯が太いのが特徴である（①）。鐘崎Ⅱ式では全体に文様帯が圧縮されたような感じになって，沈線を密に何本も平行させることが行われる。また，小池原上層式で胴部文様の中心に位置した鉤手状の入組文が，沈線を重ねることによって強調され，巴状の渦巻きになるものが現れる（②，③）。この間の変化には平城式Ｂ群の，沈線を重ねて描かれる渦巻き文が関与しているようで，渦の向きが逆回りになる[22]。

続く鐘崎Ⅲ式では，個々の文様図形が弛緩して，渦巻きとそれをつなぐ帯という感じになる。東

九州ではこの時期，縄文施文がほとんど見られなくなるが，南九州や中九州では縄文施文を有するものが一定量存在するようであり（⑧），北久根山式に続く。

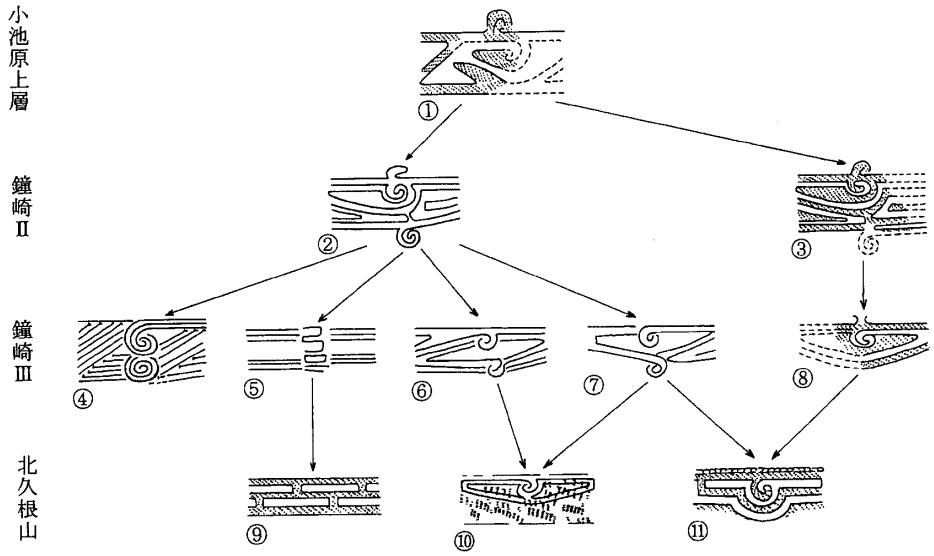


図14　鐘崎式の文様図形の変遷模式図（④～⑦：C，D，Eの胴部文様，⑧：Fの胴部文様）
＊①・③～⑤：中村石丸，②：十合野，⑥・⑦・⑨～⑪：山崎石町，⑧入部

2．南九州（図15）

ここで言う南九州とは，おおむね宮崎県南部～鹿児島県を対象としており，土器型式の分布，および東九州との関係を考慮して，地域的には大隅半島・志布志湾周辺を中心として記述を進めることにしたい。

この地域では河口貞徳氏によって編年的枠組みが定められ（河口 1957），その後，前川威洋氏によって岩崎上層式→指宿式→市来式という変遷過程の詳細が示された（前川 1968，乙益・前川 1969）。また近年では，水ノ江和同氏や三輪晃三氏らによる詳細な検討があり，土器の細かな系統関係について理解が深められている（水ノ江 1993，三輪 1996，1998）。端的に言って，この地域では，阿高式の影響を受けて成立したいくつかの地域型式が，磨消縄文系土器と密接な関わりを有しつつ，独自性の強い変遷をたどる点に特色がある。

2－1．岩崎上層式

岩崎上層式は，主として大隈半島方面に分布する凹状沈線を多用する土器型式である。

岩崎上層式の最も新しい段階に属するものとして，宮崎県崩野にまとまった資料があり，この資料は明らかな指宿式を含まない点でも重要である。

崩野には，大雑把に見て二種類の土器があり，以下にその特徴を整理しておく。

(A) 岩崎下層式の系統を引く一群。沈線を密に何本も重ねて加える特徴がある（1）。

(B) 小池原下層式など，磨消縄文系土器の影響を強く受けたもので，二本の沈線を平行させることによって文様図形が表現される一群（2，3）。前者に比べると，無文部が広くとられる点が特徴である。また，沈線間に二枚貝腹縁圧痕や，縄文を充填するものも見られる。

前者は，岩崎上層式の核たる土器であり，後者は，鹿児島県中原でⅣB類とされた一群に近いものである。

前者の器形，文様構成は，基本的に岩崎下層式を踏襲したものと言って良いであろう。単純な器形の深鉢と太く浅い凹状の沈線，幅の広い胴部の文様帯は阿高式の伝統をよく伝えるものである。

一方，後者に見られる波状口縁や胴部の鉤状文，沈線末端が途切れて鉤手状に入り組む特徴などは，後続する指宿式との関わりで重要である。この他，注目されるものとして，口縁部に二枚貝による刻み目を施した隆線を巡らせて，一種の口縁部文様帯を形成するものがある（2，3）。この文様帯はそもそも，岩崎下層式などで口縁部直下に加えられる二枚貝腹縁を用いた圧痕列に由来するものであるが，これが口端の装飾として用いられるようになる点には，やはり小池原下層式（古）などに見られる口縁部文様帯の影響を考えなければならないであろう。この種の口縁部文様帯と結びついた波頂部下の貫通孔（2）や，把手，突起の発達も，やはり小池原下層式（古）などに共通する特徴である。

また，この種の土器に散見される，沈線間に二枚貝腹縁圧痕を充填する手法について，宮崎県南部で綾式と呼ばれる型式との関係が問題となろう。一般に綾式と認識されている，密に加えられた凹状沈線間に二枚貝腹縁圧痕を充填する土器は，鹿児島県宮ノ迫で岩崎下層式とともにまとまった資料が出土しており，岩崎上層式に先行することは明らかである。綾式は，小池原下層式系統の土器とともに岩崎上層式の一部の祖型をなすものと見られる。

なお，三輪晃三氏は，鹿児島県武貝塚の分析から，岩崎下層式から指宿式への移行的型式として成川K式を設定し，これが岩崎上層式に並行するとした（三輪 1998)。三輪氏が扱った，武貝塚TP. 1調査区混貝土層出土土器の多くは，確かに岩崎上層式並行として納得できるものであるが，これに対比された鹿児島県成川の土器は，二本の沈線を平行させて描かれる文様図形，沈線末端が入り組む特徴などから見て後出的な様相を示し，指宿式に含めた方が良いと思われる。

2-2．指宿式

南九州で指宿式と呼ばれる土器型式には，相当に多様な土器が含まれている。ここでは鹿児島県中原出土のまとまった資料によって大隅半島周辺の様相を代表させ，記述を進めることにしたい。

中原からまとまって出土した指宿式では，口縁部下で強くくびれる深鉢と，器高の低い鉢が主要な器形であり，鉢には口縁から胴部にかけて橋状把手を有するものもある。この種の鉢は，阿高式や南福寺式にも見られ，岩崎下層式などにも少量伴うらしいが現在のところ資料が乏しい。

深鉢では，肥厚させた口縁上面に口縁部文様帯を有するものが一定量見られ，口縁上に把手や突

起が取り付けられるものもある。このような一群は，倉園タイプとして河口氏によって注目されたもので（6），市来式の祖型をなす（河口 1981）。

胴部の文様構成は単純で，二条の太く浅い沈線を平行させて描かれる帯状部を組み合わせた文様が主体となっており，沈線間に二枚貝腹縁圧痕や縄文を充填するものも少量見られる（7，8）。岩崎上層式では図形の一部に限られていた沈線末端を引っかける鉤手状の入組文は，指宿式では文様帯全体にわたって盛行するようになり，これから変化して生じた沈線の起点や終点を刺突するように深く抉る手法も特徴的である。また，岩崎上層式に比べると縦方向に連結される図形が目立つようになる一方で，胴部文様帯下端をきちんと沈線によって画する点や，文様帯の幅が広く取られる特徴などは，岩崎上層式の伝統をよく伝えるものと言えよう。

中原から出土している

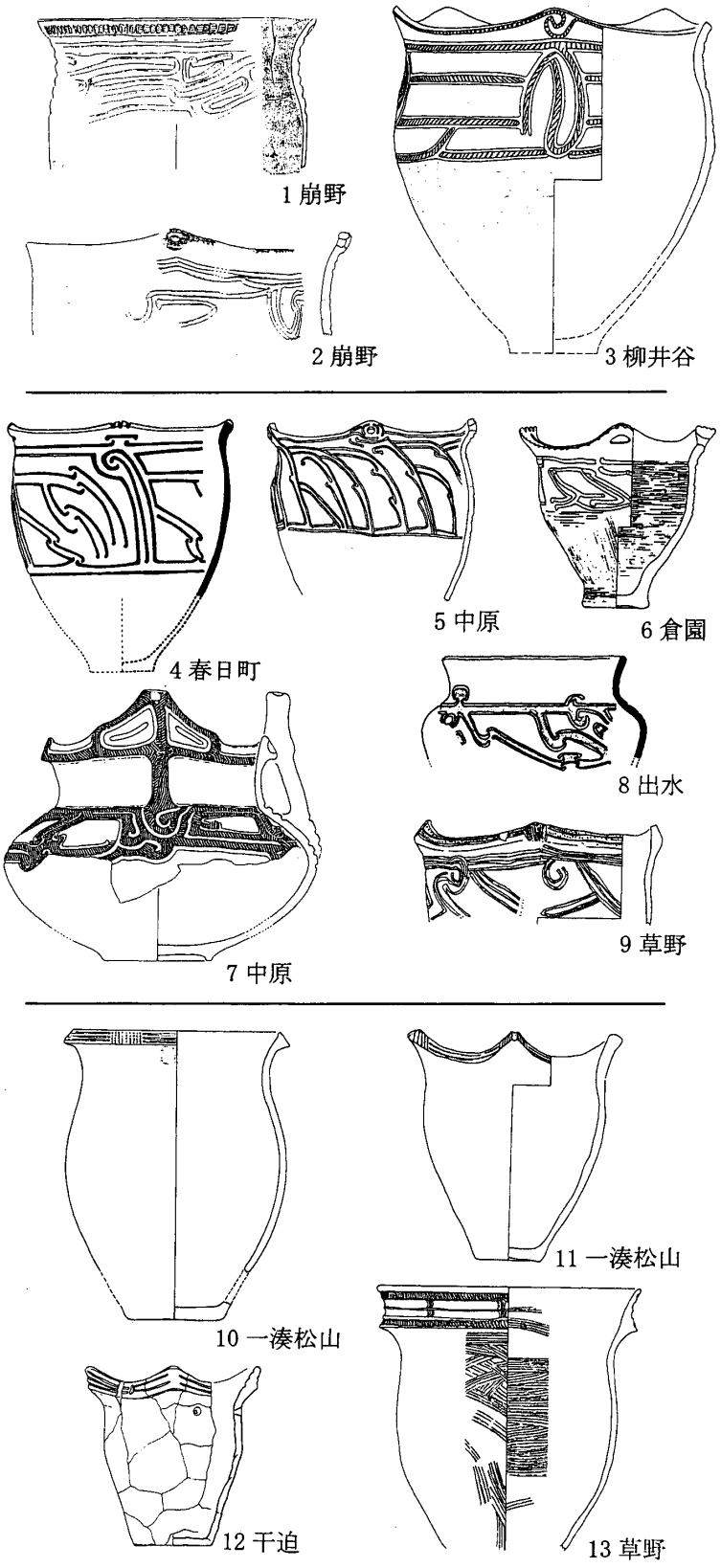


図15　南九州における土器型式の変遷　約1/10　＊8は縮尺不同
（1～3岩崎上層式，4～9：指宿式，10～11：松山式，12～13：市来式）

指宿式は，文様構成の多様さから見て，さらに細分される可能性もあるが，明確な形で区分することは容易でない。水ノ江氏は，中原でＶＢ類とされた口縁部に点列を伴うものを新しい様相として区別している（水ノ江 1993)。しかし，胴部の文様構成からは，これを他の土器と区別することは難しい。市来式との関わりで注目されるのは，草野貝塚から出土している，やや広めの口縁部文様帯を有する波状口縁の深鉢（９）であり，このようなものが中心となって，指宿式の新しい段階を構成するものと思われる。

２－３．市来式

指宿式に続く市来式は，南九州全域にわたってほとんど同じ内容の土器が分布しており，斉一性の強い型式と言える。

市来式の最も古い部分については，屋久島の一湊松山に代表的な完形土器があり，松山式と呼ばれている。指宿式から松山式への変化は必ずしも明瞭でないが，胴部への施文がふるわなくなって，指宿式で口端に位置した肥厚帯が発達して幅を広げ，この部分への施文が装飾の中心となる。施文は基本的に沈線と点列，あるいは二枚貝腹縁の圧痕列からなり，沈線末端を深く刺突する特徴がある。また，指宿式に引き続いて波状口縁が盛行する。

松山式から市来式の主要部分への変化は極めて連続的で，口縁部文様帯の幅が広がり，しばしば沈線に沿って爪形状の点列や二枚貝腹縁圧痕が加えられる。また，沈線には太く浅いものが用いられるようになる（13)。

この他，市来式では，土器に取り付けられる脚台の発達が顕著であり，深鉢に取り付けられたり，台付皿のように定型化したものも見られる。市来式の台付皿は，東九州でも鐘崎式に伴って出土することが知られており，類似の土器は，古く愛媛県平城貝塚からも出土したことが報告されている（長山 1933)。

市来式や市来式近似の型式は，種子島，屋久島を経て奄美，沖縄まで広がることが知られており，今後，この方面での動向が注意されよう。

３．九州・瀬戸内編年の対比

まず，東九州の編年と瀬戸内の編年との対比を見ておきたい。

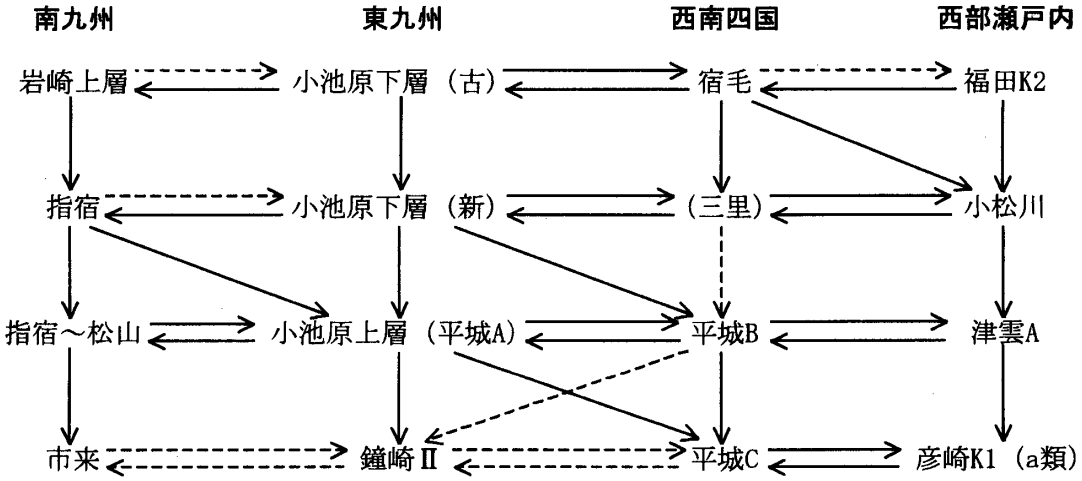
小池原下層式には，上述のように福田Ｋ２式や宿毛式に対比されるものと，小松川式や松ノ木式に対比されるものが含まれている。平城式，鐘崎式と瀬戸内との編年的対比については，先に述べたように平城式Ａ群，同Ｂ群がおおむね津雲Ａ式，同Ｃ群，Ｄ群が彦崎Ｋ１式に並行し，鐘崎Ⅱ式はやはり彦崎Ｋ１式に並行する。鐘崎Ⅲ式と平城式Ｄ群の関係を直接的に知ることのできる事例はないが，北久根山式や片粕式との関わりから見て，両者はおおむね並行するものと考えられる。

次に南九州について見ていこう。

岩崎上層式の一部に見られる口縁上の把手の発達，未発達な口縁部文様帯，胴部のきちんとした鈎状文などは，小池原下層式（古）や，宿毛式の新しいものに共通する。続く指宿式では，口縁上の把手や突起の著しい発達，口縁上面に施文される口縁部文様帯の形態などが，小池原下層式（新）や松ノ木式のそれに対比され，指宿式の鉢形土器の一部は，東九州の平城式Ａ群（小池原上層式）に酷似するので，両者は年代的に近い関係にあるものと見られる。この点について，小池原下層式（新）と平城式Ａ群（小池原上層式）が年代差であることは明らかなので，この変遷と指宿式との対比を整合的に示すためには，今後，指宿式自体の細分と，平城式Ａ群の最古のものを追求する作業が必要となろう。なお，中原から出土した橋状把手を有する磨消縄文土器（図15－７）は，指宿式としては異例の器形，文様構成であり，高知県松ノ木５次調査出土の橋状把手を有する土器（本山町教育委員会 2000：第57図3240）に類似するようである[23]。指宿式に続く市来式と，鐘崎式は，多くの遺跡において伴出関係にあり，両者が並行することは明らかである。指宿式と市来式の中間に位置する松山式については良いデータがないが，おおむね平城式Ａ群～鐘崎Ⅱ式に対比されるのであろう。

上記のような対応関係をまとめると，表３のようになる。

表３　九州の編年



＊矢印は影響関係を示す。実線は強い影響関係、破線は弱い影響関係。

Ⅴ　近畿の編年

近畿では福田Ｋ２式→縁帯文土器成立期→北白川上層式という編年がある（千葉 1989a）。近畿は，地理的に見て北陸，中部，東海といった東日本地域との接点に位置し，東西の編年を対比する上で重要な位置を占めているが，その地理的性格上，多様な土器の系統が入り混じって展開した地域である。従って，ここでは主として土器の系統と地域性を整理しつつ，その変遷を概観し，周辺地域との編年的対比を検討したい。

1．福田Ｋ２式から四ツ池式への変化（図16）

福田Ｋ２式は，かつて近畿には主体的に分布しないと考えられたこともあったが（岡田 1965，泉 1979など），近年，近畿一円で検出例が増加しており，かつて今村啓爾氏が指摘した通り，福田Ｋ２式から縁帯文土器への変遷は，近畿でも連続的にたどることができる（今村 1977）[24]。その一方で，近畿の福田Ｋ２式は瀬戸内のものとは異なる特徴を示すことから，両者は区別して考えなければならないであろう。

近畿における福田Ｋ２式直後の段階については，千葉豊氏によって“広瀬土坑40段階”が設定されている。千葉氏は，泉拓良・玉田芳英両氏が，福田Ｋ２式直後の型式として仮称した四ツ池式（泉・玉田 1986）の内容を検討し，泉氏らのいう四ツ池式には福田Ｋ２式とすべきものと，古式の縁帯文土器とすべきものの両者が含まれていることを指摘した上で，福田Ｋ２式直後段階に位置付けられる奈良県広瀬SK40出土の一括資料をもって縁帯文土器成立期とし，“広瀬土坑40段階”を設定した（千葉 1989a）。しかし，この部分だけを“段階”と呼ぶことは，周辺地域との対比から見ても適切とは言えないと考えるので，ここでは大阪府四ツ池Ｆ地点の資料から，中津式や福田Ｋ２式を差し引いた残りを狭義の四ツ池式と考えて，近畿における縁帯文土器成立期の型式名として四ツ池式を用いることにしたい。

近畿の福田Ｋ２式や四ツ池式について，近年では，今安楽寺式や新徳寺式など，地域型式の設定が進められている一方で，近畿全体を対象とした検討は，資料的制約もあり十分になされているとは言えない。近畿の福田Ｋ２式や四ツ池式に見られる細かな地域性を，簡潔に整理することは容易でないが，大雑把にみて瀬戸内との関わりの深い大阪湾岸周辺と，それ以外の地域に区分することができ，さらに，大阪湾岸を除く地域は，丹後半島・若狭湾岸を中心とするまとまりと，伊勢湾岸を中心とするまとまりに分けて考えることができる。これら三地域の中間に位置する琵琶湖盆は，やはり三者の中間的な様相を示し，相当に複雑な状況を示している（植田 1990）。

［福田Ｋ２式］　ここでは，四ツ池式との関わりから，福田Ｋ２式の中でもおおむね新しい段階に属するものについて概観しておくことにしたい。なお，胴部上半への施文の簡略化傾向や口縁上に付される把手，突起の発達など，大まかな傾向については瀬戸内のものとさほど大きな違いはないので，ここでは特に注目すべき点に絞って記述を進めることにする。

まず，大阪湾岸周辺の福田Ｋ２式では，器形，文様構成ともに，瀬戸内のそれに準じて考えることができ，充填縄文が盛んである（１）。

一方，丹後半島・若狭湾岸方面では，充填縄文がやや低調で沈線文のみのものも一定量存在する（２～５）。また，４のように口縁部文様が中途半端な形で加えられるものは，北陸方面の土器と関係するものと見られ，石川県吉野ノミタニではまとまった量が出土している。

伊勢湾岸方面のものは，基本的な構成において若狭湾方面のものに近く，やはり充填縄文がふるわない。器形の判明する例に乏しいが，大阪湾岸方面に比べると丈の高い土器が多いようである。

この他，近畿の福田Ｋ２式では，２や５のように口縁部文様帯を有する土器の中にも，口縁直

図16　福田K２式・四ツ池式（１～７：福田K２式，８～15：四ツ池式）　約1/10
＊15の胴部文様は堀之内１式

下に縄文帯（沈線帯）を留めたままのものが一定量存在することは注目される。これらは，瀬戸内や山陰で一般的に見られる，口縁直下の縄文帯が口端に上昇することによって形成された口縁部文様帯とは異なり，口端肥厚帯上に新たに発生した文様帯と見なければならないであろう。この種の口縁部文様帯には，しばしば５のように刻み目を並べるだけのものが多いようであるが，２のように，後者の文様帯が転移したと考えられるものも存在する。いずれにせよ福田K２式の新しい段階で，近畿一円に共通して口縁部文様帯を有する土器が広がる点は，四ツ池式との関わりにおいて重要である。

なお，４～７は福田K２式でも終末に近い土器と見られ，千葉氏は５の土器を縁帯文土器と考

えている（千葉 1989a)。しかし四ツ池式の深鉢では，特殊な土器を除いて胴部上半を無文帯とすることが原則なので，筆者はこのような土器は福田Ｋ２式末と見た方が良いと思っている。

［四ツ池式］　四ツ池式では，福田Ｋ２式段階で近畿一円に広がった共通の文様帯配置を受け皿として，個々の文様図形が交換，統合されていくので，土器の地域性は弱まる傾向にある。この経過を最も良く示すのが，深鉢で胴部上半が無文化し，口縁部文様帯と胴部文様帯が分離する現象であり，この変化は瀬戸内の大浦浜下層式や山陰の布勢Ｉ式にも通じるものである。全体的に見て，四ツ池式では文様構成の懸垂化，簡略化の傾向が顕著であり，文様図形も相互の脈絡を失って単純化する。

まず，大阪湾岸方面の四ツ池式では，周辺地域の影響を受けて充填縄文をもたない土器が増加する。口縁形態や全体的な文様構成は，瀬戸内の大浦浜下層式に近いものが多く，８のように明らかに瀬戸内方面の区画文の影響を受けた土器も見られる。

丹後半島・若狭湾岸方面では，前段に引き続いて充填縄文を有するものと有さないものの両者が見られる。この地域では，福田Ｋ２式以来の三本沈線を用いた帯状部による文様構成が比較的良く維持されており，描線の多条化はさほど顕著ではない。

伊勢湾岸方面の四ツ池式については，三重県新徳寺のまとまった資料に基づいて新徳寺式が提唱されている[25)]。この地域では充填縄文がほとんど見られなくなり，特に渦巻き文を中心として沈線の多条化傾向が著しい[26)]。また，明らかに堀之内１式の影響を受けた土器が見られる点は重要である（15)。この他，14や15に見られる口縁上の特異な形態の把手は，この時期に特徴的なもので，これと良く似たものは石川県吉野ノミタニなどでもまとまって出土している。

なお近年岐阜県下，特に美濃を中心とした地域では，四ツ池式に属する資料が多数報告されており，勝更白山神社周辺遺跡のように，四ツ池式がまとまって出土する事例もある。この地域の四ツ池式には，地理的位置を反映して若狭湾方面と伊勢湾方面の中間的なものが多いようである。

２．北白川上層式（図17）

北白川上層式は，そもそも，北白川小倉町遺跡上層から出土した後期土器を基準として設定された土器型式であり，近畿の縁帯文土器を代表する型式名であった。その後，泉拓良氏は，北白川扇状地上に点在する遺跡間に認められる出土土器の型式的差異から，京大植物園→北白川小倉町→京大教養部構内という段階的変遷を示し，これらをまとめて北白川上層式と呼んでいる（泉 1980)。

この三細分は，後に北白川上層式１～３期と呼び換えられ，近畿の縁帯文土器編年の基本的な枠組みとなっているが（泉 1981b)，遺跡ごとのまとまりを重視した段階編年であったため，明らかに堀之内１式と２式にまたがる京大植物園の資料を一括して扱っていることや，各段階の内容についても，土器の上での細分基準が必ずしも明瞭とは言えないために，周辺地域との編年対比を行う上で支障を来している。また，泉氏の言う北白川上層式３期は，北白川遺跡群ではまとまった資料の見られない時期であり，土器の様相から見ても２期と３期の間には画期を認めることができるの

で，３期は北白川上層式に含めない方が良いのではないかと思われる。

従ってここでは，北白川上層式の基準資料である北白川小倉町の土器，および北白川上層式の代表的資料と考えられている，京大植物園内遺跡で主体を占める土器を北白川上層式と捉えた上で，主として深鉢の型式変化によってこれを細分し，周辺地域との編年的対比を検討したい。

また，北白川上層式の細分に関して，橋本久和氏は，大阪府芥川の資料を四ツ池式直後の段階に位置付け，これを北白川上層式とは区別して，芥川式を提唱している（橋本 1995)。芥川の資料は，四ツ池式直後の様相として良いまとまりを示すだけでなく，東日本との編年的関係を窺うことのできる理想的な資料なので，この部分を芥川式とするのは妥当であると考えているが，芥川式から北白川上層式への変化は，土器の上では相当に連続的である。

前置きが長くなったが，ここでは北白川上層式の細分を，主として瀬戸内編年との対比から，以下のように整理しておく。

（１）芥川式

（２）北白川上層Ⅰ式

（３）北白川上層Ⅱ式

この変遷は，おおむね瀬戸内と同様の経過をたどるもので，後述するように，芥川式は瀬戸内の津雲Ａ式（古）に，北白川上層Ⅰ式は津雲Ａ式（新）に，北白川上層Ⅱ式は彦崎Ｋ１式に，それぞれ対比される。ここで泉氏の北白川上層式１期，２期の呼称を避けたのは，これが瀬戸内の津雲Ａ式（新）→彦崎Ｋ１式という変化と食い違うためであり，このずれは，関東の編年との対比を行う上でも支障になると考えているので，ここでは敢えてⅠ式，Ⅱ式と改めた。

北白川上層式の変遷は，基本的に福田Ｋ２式や四ツ池式に認められた，細かな地域性が整理，統合されていく過程と見ることができ，地域間で斉一性が強まる点に大きな特色があると言える。

［芥川式］　四ツ池式直後の段階は，大阪府芥川の資料，および滋賀県今安楽寺の資料の一部に代表され，前者は橋本久和氏による芥川式，後者は植田文雄氏による今安楽寺Ⅶ式の基準資料である。芥川の資料は，一括資料に乏しい近畿にあって良いまとまりを示すものと言え，明らかな堀之内１式を伴う点でも重要である。

橋本氏が指摘しているように，芥川の資料から堀之内１式を差し引いた残りは，おおむね香川県なつめの木の資料や布勢式（Ⅱ式）に対比でき，口縁上に付される把手・突起の衰退，口縁外面に加えられる縁帯文など，相互に共通する特徴を指摘することができる[27]。

瀬戸内の項でも述べたように，四ツ池式の段階で肥厚させた口縁上面や内面に加えられていた口縁部文様帯に替わって，口縁外面への施文が増加する背景には，山陰の布勢式との関係が考えられ，芥川でも布勢式系統の土器が出土していることから，両者の密接な関係が窺われる。但し近畿では，この系統とは別に福田Ｋ２式や四ツ池式から続く外面施文の系統が存在するので（例えば図16－４→同図14)，今後，両者の関係が問題となろう。しかし結局のところ，これらは次第に統合されて近似の形態に収斂していくことになる。

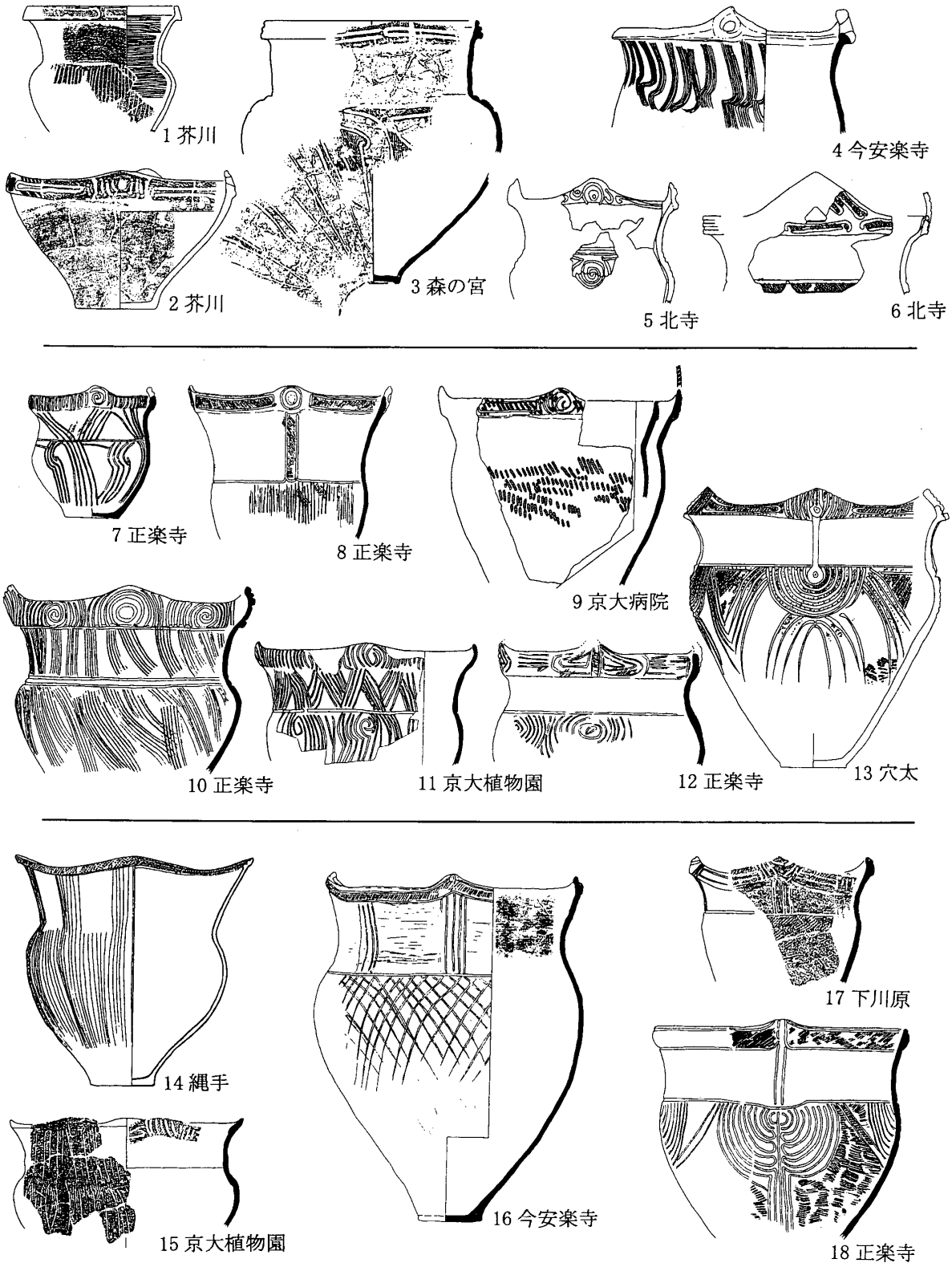


図17　芥川式・北白川上層式（1～6：芥川式，7～13：北白川上層Ⅰ式，14～18：同Ⅱ式）　約1/10
＊13，18の胴部文様は堀之内式

胴部文様では，文様図形の懸垂化，単純化が進み，これに伴って磨消縄文手法が衰退して，沈線文のみのものや縄文地上に施文を行うものが増加する。また，沈線の多条化傾向が強まるため，本来粗製土器に用いられていた櫛歯状施文具による条線の転用を生じる（4）。

この他，瀬戸内や山陰との相違点として，本来無文部として残されるべき，胴上部無文帯に施文を有するものが一定量存在することは重要である（4）。この部分への施文は，以後，北白川上層式を通じて盛行し，瀬戸内の彦崎Ｋ１式や山陰の崎ヶ鼻式に影響を与えている。

［北白川上層Ⅰ式］　瀬戸内の津雲Ａ式（新）に相当する段階で，泉拓良氏の北白川上層式１期，植田文雄氏の正楽寺１式および２式の一部に相当する。この段階に属する良い一括資料は知られていないが，大阪府林のわずかな資料がこれに相当する可能性があり，滋賀県正楽寺はこの段階から遺跡形成が開始されている。なお，この段階の資料として取り上げられることの多い大阪府仏並71－ODの資料は，明らかに複数の段階に渡るものなので，これを一括して考えるのは適当でない。

芥川式から北白川上層Ⅰ式への変化は連続的で，なだらかな波状口縁と，波頂部下に加えられる円文，渦文などの主文様を中心とした，幅広い口縁部文様帯が盛行する。円文や渦文は，沈線を重ねて加えることによって強調される傾向にあり，渦に取り付く弧線が口縁部文様帯全面に広がったものや（10，11），弧線の盛行に伴って，波頂部下の渦巻きが縦に分割されたものなども見られる（12，13）。後者は，北白川上層Ⅱ式の波頂部下の区切り文につながる点で，注目すべきものである。

胴部文様では，文様図形の懸垂化，単純化が徹底されることによって，区画文や鉤状文などの個々の図形は，流れるように描かれることになり，単純な沈線文に置きかえられていく。これとは別に，縄文施文のみとなるものや，縄文地上に施文を行うものも見られる。福田Ｋ２式以来の磨消縄文手法は，この段階で完全に衰退すると見て良いが，13や図20－６のように堀之内１式の影響を受けた土器には磨消縄文が見られる。また，胴上部への施文はこの時期に発達し，沈線帯をジグザグに組み合わせた文様が盛行する。

なお，泉氏が北白川上層式１期の典型として指摘した，京大植物園内遺跡出土の断面Ｔ字形口縁の土器（泉 1981b：第１図６）は，口縁部に加えられた区切り文などから見て，Ⅱ式まで下るものと見られる。この他にも，京大植物園の資料にはⅡ式とすべきものが若干含まれていると考えている（図17－15など）。

［北白川上層Ⅱ式］　当初の北白川上層式である北白川小倉町遺跡上層の資料に代表され，大阪府縄手（10次）や，三重県下川原などに良い資料がある。

北白川上層Ⅰ式からⅡ式への変化もまた連続的であるが，瀬戸内における津雲Ａ式（新）から彦崎Ｋ１式への変化に準じて考えることができ，Ⅰ式の口縁外面に幅広く加えられる口縁部文様帯に替って，口縁内面に施文を有するものや，くの字形に短く屈曲させた口縁部に施文を有するものが現われる。

また重要な点として，口縁部主文様に変化が見られ，Ⅰ式で盛行した波頂部下の円文や渦文に替わって，区切り文や鋸歯状文などが主体となる。このような新出の文様は，Ⅰ式末に渦巻きや円文が縦に分裂することによって生じたものと考えられるが（11～13），いずれにせよⅠ式のような沈線を重ねて強調される円文や渦文が，Ⅱ式ではほとんど用いられなくなる点に画期があると言える[28]。

胴部文様では，Ⅰ式に見られた全縄文のものと条線文のものが続いており，この両者が併用されることは少ないので意識的に区別されていたようである。渦巻きなどの個々の図形は懸垂化，弛緩化の流れの中で完全に失われ，替って堀之内２式の一部に見られる渦巻き文が転用されたものがある（18）。全体として北白川上層Ⅱ式では，瀬戸内の彦崎Ｋ１式同様，深鉢の粗製化傾向を認めることができる。

この他，注目しなければならないのは，深鉢の粗製化に対して，鉢や浅鉢など，浅い器形において，磨消縄文が盛行する点である。これは瀬戸内の彦崎Ｋ１式にも共通する現象であるが，北白川上層Ⅱ式に見られる磨消縄文土器については，千葉豊氏の詳細な分析があり，この種の土器が堀之内２式の磨消縄文と関わりを有し，独自の変遷をたどることを指摘している（千葉 1989b）。その一方で京都府桑飼下，大阪府縄手，滋賀県正楽寺などで出土している磨消縄文土器の一部は，彦崎Ｋ１式ｃ類の形態装飾に近似し，両者は明瞭な形で両断できない部分を含んでいると言える。逆に言えば，北白川上層Ⅱ式の磨消縄文土器と，彦崎Ｋ１式ｃ類との間には，密接な関係が指摘でき，両者は，続く後期中葉段階での，華麗な磨消縄文の盛行をもたらす共通の基盤となっている[29]。

最後に，北白川上層Ⅱ式の下限をどこに置くかという問題について触れておきたい。

泉氏が３期の古段階とした，京大教養部AO24区の資料（泉 1980）に見られる縁帯文系深鉢の口縁部文様帯は，北白川上層Ⅱ式のそれに準じて考えることができる。一方，京都府桑飼下や大阪府淡輪などでまとまって出土している，内湾口縁の外面に幅広い文様帯を有する土器は，千葉氏が指摘しているように，それまでの口縁部文様帯とは異なる系統に属するものと見た方が良いようである（千葉 2002a）。従って筆者は，口縁部文様帯の系統性に注目してこの両者の間に線を引き，それ以前を北白川上層Ⅱ式とするのがわかりやすいと思っているが，周辺地域との対比など，詳細については今後の検討が必要であろう。

３．近畿編年と瀬戸内・山陰編年の対比

近畿の四ツ池式が，瀬戸内，山陰の大浦浜下層式，布勢Ⅰ式に並行することは，胴部上半が無文化する現象，口縁上の突起や把手の発達，未発達な口縁部文様帯など，全体的な近似から見て明らかである。

四ツ池式直後の芥川式は，口縁部文様帯の施文形態や，強く突出する波状口縁の形態，胴部の文様構成などの特徴が，瀬戸内の津雲Ａ式（古），山陰の布勢Ⅱ式に対比され，芥川では布勢Ⅱ式類

似の土器が伴出している。

続く北白川上層Ⅰ式，同Ⅱ式は，瀬戸内の津雲Ａ式（新），彦崎Ｋ１式に対比される。彦崎Ｋ１式に見られる櫛歯状施文具による条線文や，胴上部への施文の復活は，明らかに北白川上層式側の影響によって生じたものと言え，近畿の系統がこの時期の変化を主導したことを示す良い事例と言える。

以上のような対比をまとめると表４のようになる。

表４　近畿と瀬戸内・山陰編年の対比

備讃瀬戸	山陰	近畿
大浦浜下層	布勢Ⅰ	四ツ池
津雲Ａ（古）	布勢Ⅱ	芥川
津雲Ａ（新）	崎ヶ鼻１	北白川上層Ⅰ
彦崎Ｋ１	崎ヶ鼻２	北白川上層Ⅱ

Ⅵ　関東編年との対比

続いて，近畿を中心とする西日本の編年と，関東の編年との対比を検討することにしたい。

当該期の関東では，豊富な資料に基づいた詳細な編年研究が行われており，土器の系統的変遷を細かくたどることができる。ただし，各細分段階の認定については研究者の間で食い違っている部分もあるので，ここでは，遺跡での伴出例を中心として重要と思われる事例を取り上げ，編年対比を試みることにしたい。

以下に，ここで中心的に取り上げる事例を列挙しておく。

福田Ｋ２式　…群馬県芳賀北曲輪11号土坑・千葉県武士711・712号土坑
福田Ｋ２式末～四ツ池式　…和歌山県亀川
四ツ池式　…三重県新徳寺・奈良県広瀬・愛知県朝日
芥川式　…大阪府芥川
北白川上層Ⅰ式　…京都府京大植物園・滋賀県穴太
北白川上層Ⅱ式　…三重県下川原

１．福田Ｋ２式（図18）

福田Ｋ２式段階では，近畿での関東系土器の出土例はむしろ乏しく，逆に，関東において福田Ｋ２式が出土する事例の方が目立っている。福田Ｋ２式と関東系土器との伴出関係を窺うことのできる事例として，群馬県芳賀北曲輪，千葉県武士の例を挙げることができる。

芳賀北曲輪11号土坑出土の土器（１）は加納実氏によって取り上げられたもので，二本の沈線を並行させた帯縄文，沈線末端が鉤手状に入り組む点などは，福田Ｋ２式の特徴をよく示していると言えよう（加納 2000b）。11号土坑からは，この他に称名寺Ⅱ式が出土している。

武士遺跡は，加納実氏によって，多数の関西系土器が報告された重要な遺跡であるが，中でも711，712号土坑出土の関西系土器は，本報告刊行以前から注目されてきた資料である（２）。加納氏は，これを福田Ｋ２式古段階（中津Ⅲ式）と評価し，これに称名寺Ⅱ式末の土器が伴ったこと

から，福田Ｋ２式の主要部分が，堀之内１式に並行する可能性を指摘している（加納 1994)。

２の土器は，断片的な破片から復元されているもので，多単位の波状口縁（把手・突起）をなし，半筒状の把手１個と尖頭状の突起３個が遺存している。多単位の波状口縁（把手・突起）は近畿や山陰の福田Ｋ２式に散見され，稀に把手のうちの１個が他よりも大きく発達したものが存在する（鳥取県南川など)。従って武士例は，１個の半筒状把手を有し，それ以外の波頂部には尖頭状突起が取り付けられていたのではないかと思われる[30]。把手・突起の形態については，加納実氏が中期末の箱状把手からの変化を細かく論じているが，千葉氏も指摘しているように，武士の把手は福井県北寺の完形土器（図16－２）に近く，福田Ｋ２式古段階までは遡らない（千葉 1995)。

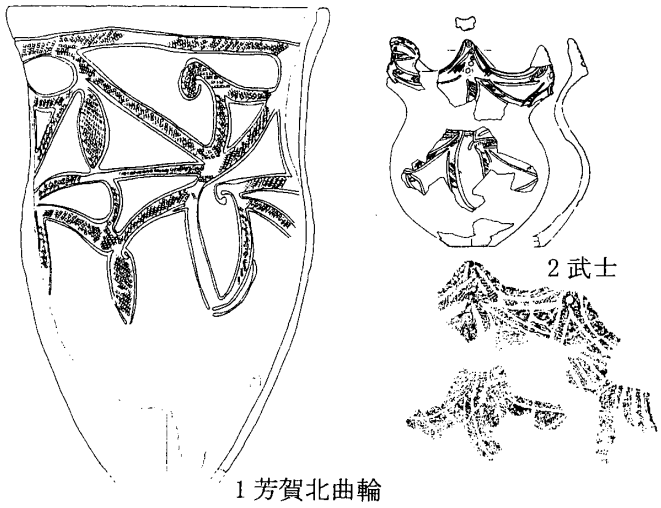


図18　関東地方出土の福田Ｋ２式　約１/10

この土器の口縁形態および胴部文様については，千葉豊氏の詳細な検討があり，妥当な見解と言える。くの字形に屈曲する口縁形態と，この部分に上昇した縄文帯，幅狭い帯縄文構成，空白部の面積が広く取られる特徴，胴部上半の文様帯が下半の文様帯と分離しつつある点，胴部下端まで広がった文様帯などの特徴は，福田Ｋ２式の新しいものに共通して見られるものであり，四ツ池式に近く，中津Ⅱ式からは遠い。

なお，武士資料についてはその一括性に否定的な見解もあり，柳澤清一氏は，近接する732号土坑出土の土器（千葉県文化財センター 1996：第990図１）を堀之内１式と見て，711，712号土坑の所属時期も堀之内１式まで下る可能性を論じている（柳澤 2000)。確かに，本例は密に切りあう土坑群からの出土という点で，扱いに注意しなければならない資料であるけれども，柳澤氏が堀之内１式とする732号土坑の土器は，加納氏も指摘しているように明らかな堀之内１式とは言えないものであるし（加納 2000b)，711，712号土坑の他の資料から見ても，称名寺Ⅱ式末という加納氏の見解は妥当なものと考えている。

この他，あまり良い状況とは言えないが，三重県新徳寺SK201でも福田Ｋ２式と称名寺Ⅱ式が伴出しており，これらの伴出例から見て，福田Ｋ２式の一部が称名寺Ⅱ式に並行することは確実である。

次に，こうした伴出例以外に重要と思われる点について記しておきたい。

第一に，福田Ｋ２式の末期に特徴的に見られる，懸垂的な鉤状文を斜行する帯でつなぐ構成（図16－４～７など）は，堀之内１式の一部に近似する[31]。奈良県広瀬には完形に復元される良い

例があり（橿原考古学研究所附属博物館 1987：P16），二段にわたって加えられる対弧文を斜行する帯でつなぐ構成は，東京都平尾№9遺跡2号甕棺の文様構成に近似する。特に，この種の土器に，口縁直下を横走する沈線が存在することは，称名寺Ⅱ式末～堀之内1式初頭の沈線文系土器との関わりにおいて注目されるべき点であろう（石井 1993）。微妙な問題になるが，このような事例は，福田K 2式の終末が堀之内1式に並行する可能性を示唆するものと考えられる。

第二に，称名寺Ⅱ式末～堀之内1式初頭では，ボタン状貼付文を文様図形の要所に貼付することが盛んに行われ，類似の貼付文は，奈良県沢など近畿の福田K 2式にも稀に見られることがある（橿原考古学研究所付属博物館 1987：p 6-1346）。これとは少し形が違うが，三重県上ノ垣外SK 1，新徳寺SK39から出土した四ツ池式には，このような貼付文を沈線表現に置き換えたと見られる事例があり（図19－6，9），大阪府芥川にも似た形のものがある。これらの例は，渦巻きの基部や渦の先端に位置する点で福田K 2式段階のものとは異なり，三重県新徳寺の例（図19－10）に見られるように，堀之内1式のそれに近似するものである。

2．四ツ池式（図19）

四ツ池式段階では，前段とは逆に，近畿において関東系土器の出土例が増加する。ここでそのすべてに言及することは不可能なので，重要と思われる事例に限定して以下に記述しておきたい。

まず，和歌山県亀川の資料は，奈良県広瀬SK40の例と並び，これまで多くの論考において取り上げられてきた著名な事例である（1～5）。

1は称名寺Ⅱ式系統の土器で遺存部分の少ない破片であるが，口縁部文様帯の形態や胴部の施文から見て，加納実氏が指摘しているように，堀之内1式まで降るものではないかと思われる（加納 1994）。5は，口縁下に痕跡的に沈線を有するようで，福田K 2式末～四ツ池式の口縁部破片として良いであろう。2は口縁部文様帯のみを有する粗製土器で，このような土器は典型的な福田K 2式には伴わないことから，口縁部文様帯が胴部文様から独立する福田K 2式末～四ツ池式頃に位置付けられるものである。3は判断が難しいが，縄文施文が省略されている点，および胴上部に比較的しっかりとした施文を有する点から見て，やはり福田K 2式末頃に属する可能性が高い。一方，4の浅鉢は，宿毛式の系統に属するもので，高知県松ノ木に類例があり（図2－2），福田K 2式並行まで遡る可能性がある。しかし，瀬戸内の編年の項でも述べたように，この種の特殊な精製土器は一般の深鉢に比べて型式変化が鈍く，ほとんど形態を変化させずに宿毛式末まで続くので，この土器のみをもって亀川の資料全体を古く位置づけるわけにはいかない。むしろ他の土器の形態装飾から見て，亀川の資料はおおむね福田K 2式終末を前後する頃のまとまりを示すものと考えた方が適切であろう。

奈良県広瀬SK40では，四ツ池式の一括資料中に堀之内1式が伴っている（11）。この土器は，地文に縄文を施す点が特異であるが，文様構成自体は関東南西部を分布の主体とする沈線文系の堀之内1式に対比され，類似の土器は大阪府四ツ池や西浦橋，愛知県朝日などでも出土している[32]。こ

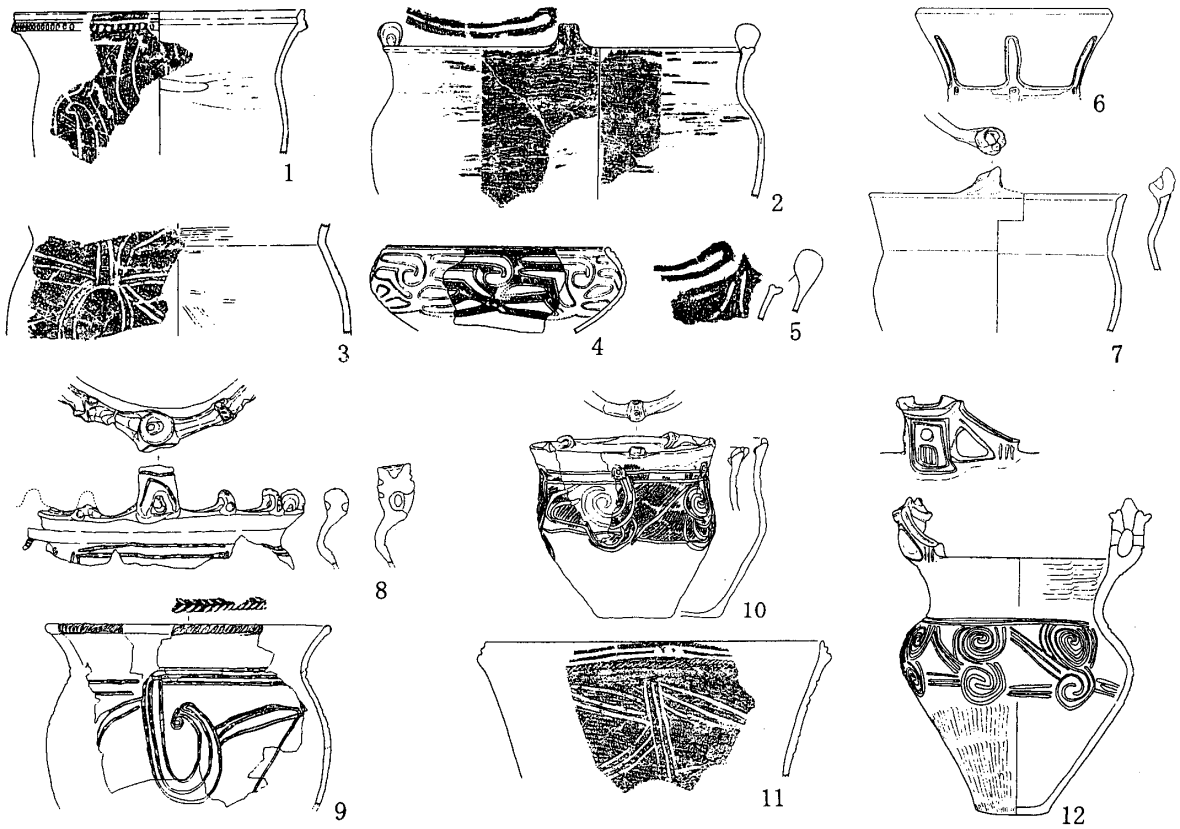


図19　堀之内１式及び堀之内１式と関連を有する土器①　約１/10
（１～５：亀川，６・７：上ノ垣外 SK １，８・９：新徳寺 SK39，10：新徳寺 SX10，11：広瀬 SK40，12：朝日）

の土器は，胴部文様帯の幅が狭くなっている点をもって堀之内１式末に位置づけられたことがあるが（鈴木 1993，加納 1994），実測図で施文が途切れているように見えるのは器面の剥離によるものであり，実際はさらに下方へ施文が続いている。この土器のみで細かな編年的位置づけを論じることは難しいものの，次に取り上げる10，12などに近い段階と考えて大きな矛盾はないと思われる。

この他，三重県新徳寺や愛知県朝日には，堀之内１式の胴部文様と四ツ池式の口縁部文様帯を兼ね備えた一種の折衷土器がある（10，12）。10の口縁形態は明らかな四ツ池式で，胴部には二段の渦巻きが加えられ，渦巻きの基部にはボタン状の貼付文を有する。12は，口縁の把手の形態から見て四ツ池式に属するものと見られ，胴部の渦巻文の形態は10よりも後出的で，芥川の土器（図20－２，３）に近い。

３．芥川式・北白川上層式（図20）

大阪府芥川では，四ツ池式直後の芥川式に伴って，堀之内１式そのものと言って良い土器が出土している（１～５）。これらは，四ツ池式の段階に多く見られた沈線文系の堀之内１式とは異なり，東関東を分布の中心とする縄文系の一群で，胴部文様帯の幅が狭い点は，関東南西部で出土するも

のに近似する。これらの土器は，伴出した縁帯文土器に比べて著しく大形で，際だった対照を示すが，類似の土器は京大植物園などでも出土しており，偶然搬入されたものではなく，在地で模倣されたものであろう。蕨手文類似の文様が加えられた粗製土器が，この辺りの経緯を端的に示す（5）。しかし，本拠地から遥かに離れたこの場所においても，単なる器形や文様の模倣に留まらず，土器の大きさまで模倣している点は興味深い。このことは，これらの土器が部分的模倣の積み重ねによって生み出されたものではなく，土器製作にかかわる技術構造をまるごと模倣することによって形作られていることを示すものであろう。

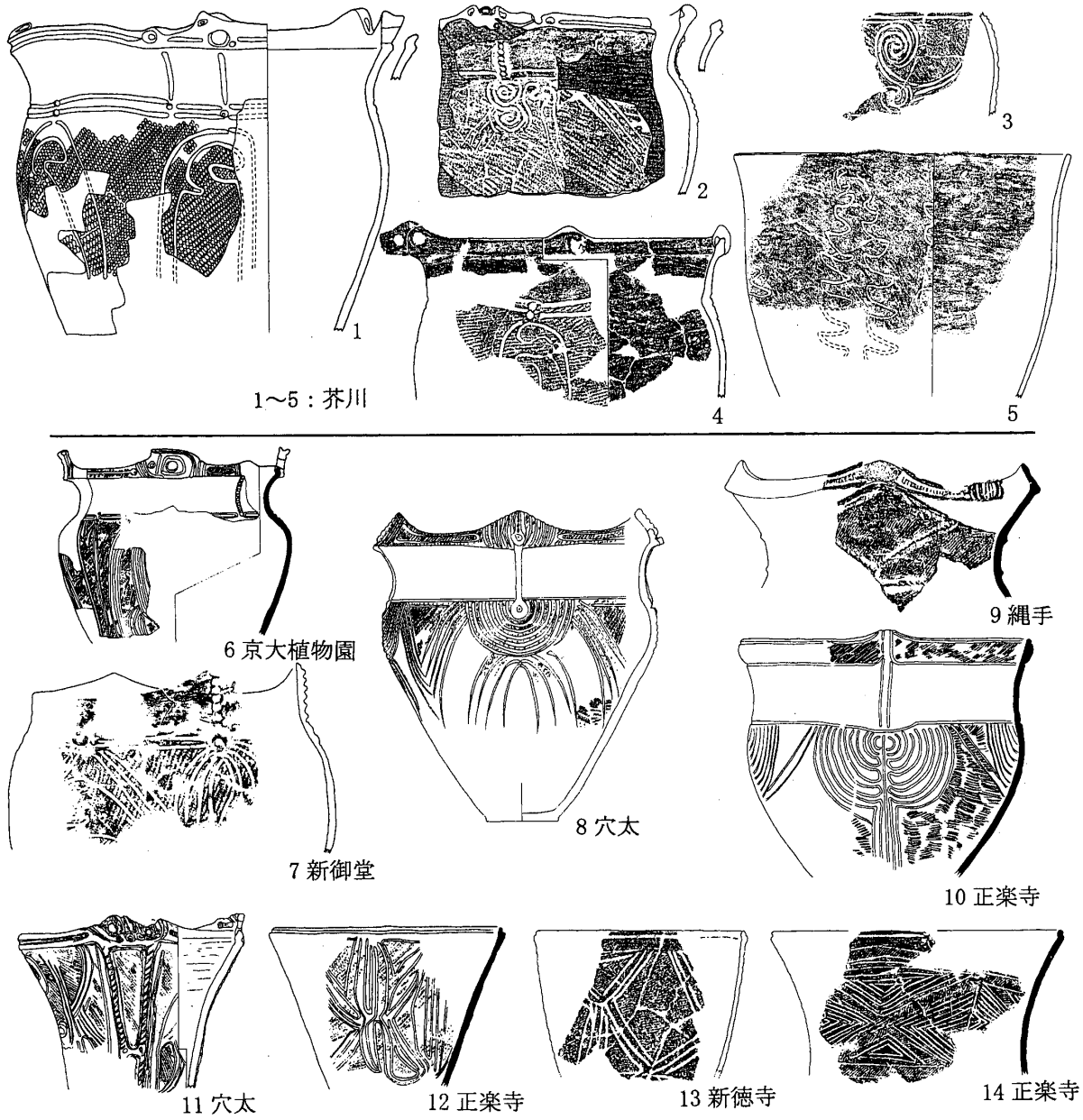


図20　堀之内１式及び堀之内１式と関連を有する土器②　約１/10

芥川に続く段階の堀之内１式として，６～８の土器が挙げられる。縁帯文土器との伴出関係を窺うことのできる資料はないが，８は北白川上層Ⅰ式末と堀之内１式末の折衷的な土器と見ることができ，両者の終焉が大きく食い違わないことを示す良い例である。このような胴部のくびれる深鉢は，堀之内２式になると稀な存在となるが，９～10は，堀之内２式まで下る例で，９は北白川上層Ⅱ式に伴出した。10の口縁部文様帯は北白川上層Ⅱ式，胴部は堀之内２式である。

この他，北白川上層Ⅰ式末頃から増加する一群に，11～14のような朝顔形の器形がある。ここに図示したものは，おおむね堀之内１式末～２式初頭に属するもので，近畿で出土するこの種の土器は，縄文施文を有することが原則であり，北白川上層Ⅱ式に伴う堀之内２式の主体をなす。北白川上層Ⅱ式と堀之内２式は，大阪府縄手（10次）や，三重県下川原（１次）９号住居址，同（５次）11号住居址などにおいて伴出関係にあり，さらに西の備讃瀬戸周辺でも岡山県津島岡大，広江・浜，香川県永井，大浜などで堀之内２式の出土例が知られている。

北白川上層Ⅱ式に伴う堀之内２式には，菱形や三角形などの幾何学的な図形を磨消縄文によって表現するものが多く，渦巻き文を有するものは少ないようである。その一方で，堀之内２式の磨消縄文の影響を受けて成立したと考えられている北白川上層Ⅱ式の磨消縄文土器において，渦巻き文や，横に流れる入組文を有するものが目立つ点は興味深い事実である。

４．関東編年との対比

これまで述べてきた土器の対応関係を改めてまとめると，以下のようになる。

福田Ｋ２式	…称名寺Ⅱ式（芳賀北曲輪・武士）
福田Ｋ２式末～四ツ池式	…堀之内１式（亀川）
四ツ池式	…堀之内１式（新徳寺・広瀬・朝日）
芥川式	…堀之内１式（芥川）
北白川上層Ⅰ式	…堀之内１式（京大植物園・穴太）
北白川上層Ⅱ式	…堀之内２式（下川原）

堀之内１式の側の変遷としては，亀川（図19－１）→新徳寺（図19－10）→朝日（図19－12）→芥川（図20－２）→穴太（図20－８）という経過が想定され，この序列は関東における堀之内１式の変遷観とも整合的である。そして，亀川の土器以前に位置付けられる芳賀北曲輪，武士の福田Ｋ２式は，称名寺Ⅱ式に並行するものであろう。堀之内１式の各細分段階との対比を整合的に示すことは難しいが，おおむね亀川の土器が古段階，朝日，芥川の土器が中段階，穴太の土器が新段階に位置づけられる（石井 1993）。従って，問題とされる福田Ｋ２式の終末は，称名寺Ⅱ式の終末と大きく食い違わないものと考えられる。

さて，この編年に拠って，関西系土器と関東系土器の動向について簡単にまとめておきたい。

まず，福田Ｋ２式と称名寺Ⅱ式に関して，近畿や東海西部で出土している称名寺Ⅱ式近似の土器には，称名寺Ⅱ式に特徴的な列点文を有するものがほとんど見られない一方で，東海東部～関東で発見されている福田Ｋ２式には，福田Ｋ２式そのものと言える例が多い点が注意される[33]。この原因は定かでないが，関西系土器が多数報告された武士遺跡において，称名寺Ⅱ式の段階は，検出された住居址の数から見て最も凋落が著しい時期に重なるようで（加納 2000a），この時期に福田Ｋ２式が遺跡内に運びこまれているという形勢には注意する必要があろう。そして武士遺跡では，これに続く明らかな四ツ池式の出土例は知られておらず，逆に堀之内１式が近畿に進出し，四ツ池式に伴うようになる。

近畿において四ツ池式に伴う堀之内１式系土器の大半は，関東南西部に分布の主体を置く沈線文系のものに限られており，中でも，胴部文様帯の分帯しない懸垂文系の深鉢が大阪湾岸方面まで広がっている一方で，胴部の屈曲する鉢形土器は愛知県朝日や三重県新徳寺，高瀬Ｂなど，伊勢湾岸周辺に限られているようである。また，堀之内１式の影響は特に胴部文様帯に強く及ぶようであり，口縁部文様帯では縁帯文の伝統が維持されている場合が多く，折衷的な土器を多く生み出している。この口縁部文様帯における縁帯文優勢の状況は，北白川上層Ⅱ式まで続く基本的な形勢として重要である。

四ツ池式に続く芥川式では，堀之内１式の系統に大きな変化が見られ，それまでの沈線文系土器主体の構成に替わって，縄文系土器が主体を占めるようになる。この転換は，単に土器の上に施される文様が変化したということではなくて，土器の系統自体が入れ替わるという性格のものであり，構造的な変化と言える。そしてこれ以降，近畿では基本的に沈線文系の堀之内式は見られなくなる[34]。

続く北白川上層Ⅰ式では，個々の遺跡において堀之内１式が安定的に組成の一部をなしており，両者の折衷的な土器も増加する。しかし，ここで注目されるべき点は，両者が異なる系統の土器として明確に作りわけられており，別個の系統的変遷をたどるという事実である。確かに，両者の中間的な土器も少なくないが，こうした中間的な土器群は，両者の系統が混じり合い，一体化していくことによって生みだされたものではなく，土器の伝統という観点からすればごく表面的な現象に過ぎない。言い換えれば，この時期の関東系土器の流入は一過性のものではなく，この地域に根を下ろして連続的に変化することにその特質がある。

北白川上層Ⅰ式の末頃から，近畿の堀之内式系土器では朝顔形深鉢への転換が生じる。北白川上層Ⅱ式に入ると，これに伴う堀之内式系土器は明らかに朝顔形深鉢主体の構成へと切り替わっており，胴部のくびれる器形は稀である。

近畿における関東系土器の以上のような動向を見て，まず注目されるのは，縁帯文土器に伴う堀之内１式，２式が，特定の系統の土器に限られており，しかも時期によってその系統が変化する点である。このような推移は，関東南西部における堀之内式の動向に共通する部分があり（石井 1993），特に堀之内１式中段階における沈線文系土器から縄文系土器への転換，堀之内１式末にお

ける朝顔形深鉢の増加といった現象は，両地域の間でほとんど一致した経過を跡付けることができる。この点に関して，堀之内１式中段階以降，関東南西部を分布の主体とする沈線文系土器が，粗製化の傾向を強めていく現象と，近畿における北白川上層式の深鉢の粗製化は，やはり偶然の一致と見ることは困難で，両地域における土器型式の強い協調性を示すものであろう。

以上のような状況を考慮するならば，近畿の四ツ池式や北白川上層式は，堀之内式に極めて良く似た型式構造を有していたと見ることができるであろう。そしてこの点は，東日本からの影響の一側面を示す事例として重要である。

Ⅶ　東海地方の状況

近畿と関東の編年的対比を検討したところで，両者の中間に位置する東海地方の状況について概観しておきたい。この地域では，時期によって振幅はあるものの，おおむね浜名湖－天竜川を境として西部では近畿の影響が強く，逆に東部では関東の影響が強く及ぶようである。

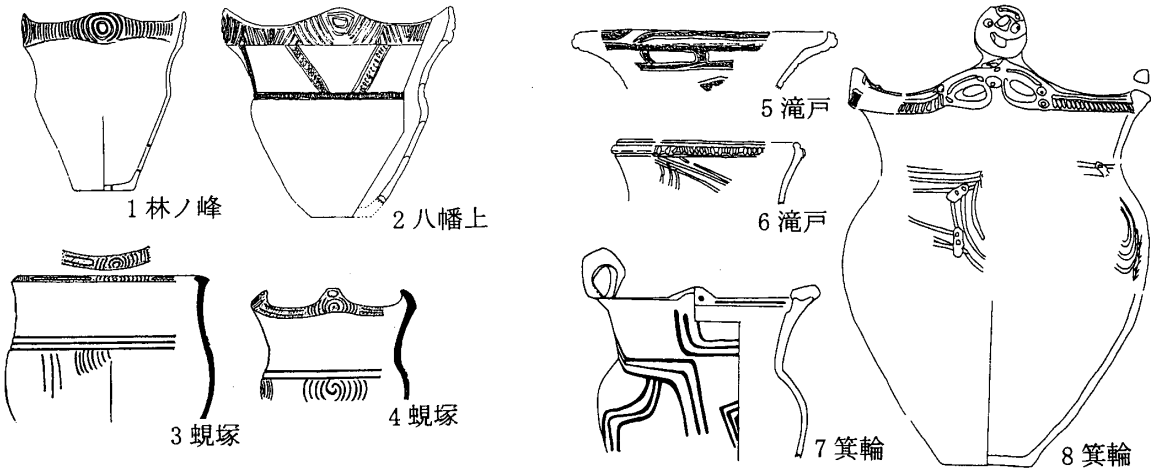


図21　東海地方　約１/10

１．東海西部（図21）

東海西部では，福田Ｋ２式や称名寺Ⅱ式に属する資料は極めて少ない。確実なものとして，愛知県馬場や林ノ峰貝塚には断片的な福田Ｋ２式があり，蜆塚貝塚には称名寺Ⅱ式とされる土器がある（浜松市教育委員会 1985：第12図１）。蜆塚の土器は，関東でもあまり例のないもので判断が難しいが，堀之内１式に近いものであろう。

四ツ池式としては愛知県朝日の資料がまとまっており，沈線文系の堀之内１式が伴っている。また，増子康真氏による東海西部の咲畑Ⅱ式は，明らかな中津式を含むものの，これを除いた残りはおおむね，四ツ池式や北白川上層Ⅰ式近似の土器と堀之内１式である（増子 1979a）。

続く北白川上層Ⅰ式並行期では資料が各段に増加し，愛知県林ノ峰貝塚，八幡上，田中島など，三河湾周辺に良い資料がある。林ノ峰貝塚のＣ貝層出土の一群を基準として設定された林ノ峰Ⅳ式には，福田Ｋ２式が一定量含まれており，これを差し引いた残りはおおむね堀之内１式，北白川上層Ⅰ式並行と見て良いと思われる。この時期の東海地方における縁帯文系深鉢（１，２）は，胴部を無文のまま残す点で，北白川上層Ⅰ式そのものとは異なっており，この特徴は続く天子神社式の一部にも維持されることから，東海西部の地域性と見ることができよう。これとは別に，林ノ峰貝塚，伊川津貝塚，新御堂などには明らかな堀之内１式があるが，遺跡の主体をなすものではないようで，縁帯文土器と堀之内式が共存する点は近畿とも共通した状況と言える（山下 1999）。

土器型式の分布域の問題に関して，北白川上層Ⅰ式，およびⅠ式近似の土器の東限が問題になるが，浜名湖周辺の蜆塚貝塚，前山，川山や，さらに東の大畑貝塚から小破片が出土しており，不明瞭ではあるが，その辺りが分布の東限ではないかと思われる。

東海西部で天子神社式[35]（増子 1979b）と呼ばれる土器型式は，くの字形に屈折した幅狭い口縁上面に円文や渦文を施す深鉢が特徴的である。堀之内２式系土器を主体とする蜆塚Ⅰ式に伴う縁帯文土器（３，４）も，この系統に属するものと見て良いであろう。この種の土器に見られる幅狭い口縁部文様帯は，彦崎Ｋ１式や北白川上層Ⅱ式の一部に見られる口縁部文様帯に近似するものの，円文や渦巻きなどの主文様は，北白川上層Ⅱ式にはほとんど見られないものである。これに関して，堀之内２式の一部に天子神社式類似の口縁部文様帯を有する土器が存在する点には，注意しておく必要があろう。天子神社式は，愛知県神明社貝塚，神戸52番地，八王子貝塚，蜆塚貝塚，中川原などに良い資料があり，堀之内２式系統の土器が多く伴う。天子神社式もやはり西貝塚や大畑貝塚周辺を東限としており，蜆塚貝塚では堀之内２式の影響が強く及ぶことが知られている。

２．東海東部（図21）

称名寺Ⅱ式としては，静岡県上白岩や修善寺大塚，山崎，天間沢，冷川の資料が挙げられる。また，富士山南麓に位置する滝戸遺跡の資料は，東海東部における該期の資料として最もまとまっており，称名寺Ⅱ式や，多量の堀之内１，２式に加えて，福田Ｋ２式と考えられる土器が少量出土していることは重要である（５，６）。この遺跡から出土した土器はかなり多様な内容を示しているが，堀之内式としては，懸垂文を有する沈線文系土器が安定的に存在し，東海西部とは対照的である。

滝戸遺跡に近接する箕輪遺跡からは，かつて四ツ池式の出土が報告されており（７），その後の調査で，堀之内１式に属する住居址が検出されている。８は住居址出土の土器で，おおむね堀之内１式初頭に属すると見られる深鉢であり，胴部の８字形の貼付文が特徴的である。この土器の貫通孔を有する把手の形態は，新徳寺（図16－14）や朝日（同図15）の把手と無関係ではないであろう。

東海地方ではないが，この他，伊豆大島下高洞には福田Ｋ２式に属すると見られる小片がある[36]。

東海地方における土器型式の全体的な動向をまとめると，次のようになる。

まず福田Ｋ２式，四ツ池式は，東海西部に主体を置きながら，東海東部でも出土例がある。一方，称名寺Ⅱ式は東海東部には密に分布しているものの，西部への進出はさほど顕著でない。

関東系土器の西進が顕著になるのはやはり堀之内１式以降で，四ツ池式段階では朝日遺跡に代表されるように沈線文系土器を主体とし，やや遅れて林ノ峰，新御堂など，縄文系土器が色濃く影響を及ぼす。この動きにあわせるように，東海東部では関西系土器の出土は見られなくなる。しかしこの段階でも，東海西部は堀之内式の分布域に飲みこまれてしまうわけではなく，近畿の場合と同様に，堀之内式と縁帯文土器が個々の遺跡において共存する状況を見て取ることができる。この状況は続く堀之内２式でも同様であるが，天子神社式など独自色の強い土器型式を生み出している点は，地域性の強まりを示すものであろう。

表５に，これまでの記述によって示される土器編年とその対比を一括して示しておく。

表５　西日本の編年

<table>
<tr><th>南九州</th><th>東九州</th><th>西南四国</th><th>備讃瀬戸</th><th>山陰</th><th>近畿</th><th>東海西部</th><th>関東</th></tr>
<tr><td rowspan="2">岩崎上層</td><td rowspan="2">小池原下層
（古）</td><td>宿毛</td><td colspan="3">福田Ｋ２</td><td>（馬場）</td><td>称名寺Ⅱ</td></tr>
<tr><td>宿毛末</td><td colspan="3">福田Ｋ２末</td><td>＋</td><td>称名寺Ⅱ～
堀之内１（古）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">指宿</td><td>小池原下層
（新）</td><td>（三里）</td><td>大浦浜下層</td><td>布勢Ⅰ</td><td>四ツ池</td><td>（朝日）</td><td>堀之内１
（古）～（中）</td></tr>
<tr><td>＋</td><td>＋</td><td>津雲Ａ（古）</td><td>布勢Ⅱ</td><td>芥川</td><td>＋</td><td>堀之内１（中）</td></tr>
<tr><td>松山</td><td>小池原上層</td><td>平城
Ａ・Ｂ群</td><td>津雲Ａ（新）</td><td>崎ヶ鼻１</td><td>北白川
上層Ⅰ</td><td>（林ノ峰）</td><td>堀之内１（新）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">市来</td><td>鐘崎Ⅱ</td><td>平城Ｃ群</td><td rowspan="2">彦崎Ｋ１</td><td rowspan="2">崎ヶ鼻２</td><td rowspan="2">北白川
上層Ⅱ</td><td rowspan="2">天子神社</td><td rowspan="2">堀之内２</td></tr>
<tr><td>鐘崎Ⅲ</td><td>平城Ｄ群</td></tr>
</table>

Ⅷ　縁帯文土器の推移とその特質

最後に，これまで多くのページを割いてきた土器編年に拠って，縁帯文土器の成立と変遷についてまとめ，土器の変遷過程から見た画期について指摘する。その上でこのような画期を生み出した背景について検討を加えることにしたい。

１．文様の割りつけから見た画期

まず，この時期の土器型式を特徴づける，口縁部と胴部に独立的に文様帯を割りつける形制の成立過程について概観しておきたい。

図22には，西日本の土器型式に見られる文様帯の配置と変遷の概略を示している。図が煩雑にな

るので，全ての型式を網羅しているわけではなく，大局的な変化を見渡すにあたって，重要と思われる系統関係を選択して示した。

［口縁部文様帯］　西日本における口縁部文様帯の発達の中心は，瀬戸内，山陰と近畿にあり，口縁上の把手や突起の発達と結びついている。瀬戸内，山陰の口縁部文様帯は，主として口縁直下の縄文帯が口端肥厚帯に上昇することによって形成されるもので，近畿ではこれに加えて，口端部に新たに口縁部文様帯を生じるものがある。両者は基本的に異なる系統に属し，縁帯文土器に続く。

一方，宿毛式や小池原下層式（古），岩崎上層式は，本来，福田Ｋ２式とは異なった文様の割りつけを示すが，相似の部位に福田Ｋ２式の影響が及んで，おおむねその末期には，口縁部文様帯を有するものが増加する。そしてこの時期の口縁部文様帯は，以後途切れることなく維持されている。

結局のところ，この時期の土器型式に共通して見られる口縁部文様帯は，異なる系統に属する文様と文様帯が，近似の形態に統合されることによって生み出されたものと言うことができ，堀之内１式，綱取Ⅱ式など東日本の諸型式に見られる口縁部文様帯の成立過程とは対照的である。また，口縁部文様帯の施文される画面としての口縁形態も，西日本では実にさまざまな形態のものが存在し，口縁部に対するこだわりと見ることができよう。

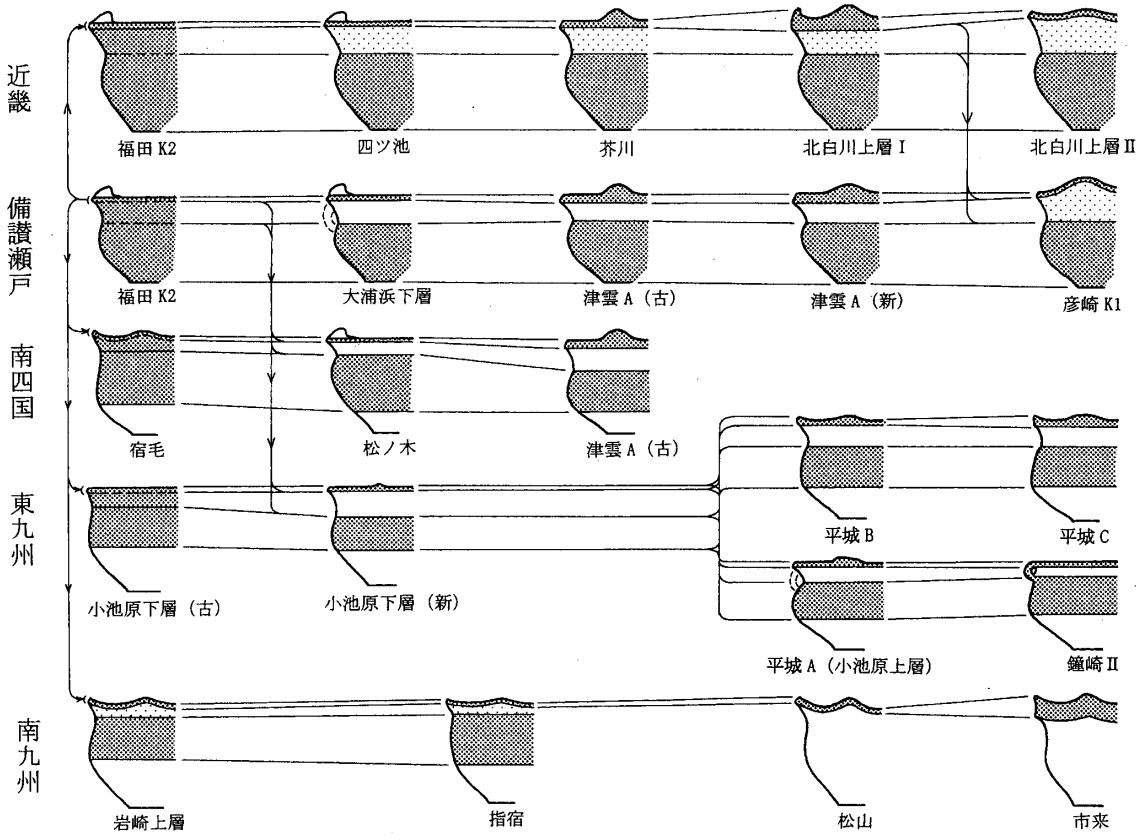


図22　西日本における器形・文様帯配置の変遷模式図

＊空白部は無文帯，濃いトーンは文様帯，薄いトーンは文様帯であるがふるわないもの。

図22では，このような経過を簡潔に示すことに主眼を置いたため，口縁部文様帯における福田Ｋ２式の影響を強調して示してある。しかし，実際には各型式に見られる口縁部文様帯は，それぞれの先行型式から連続的にたどることができ，ここに示した関係は変化の一側面に過ぎない。

［口縁の把手・突起と波状口縁］　瀬戸内・山陰や近畿の福田Ｋ２式では，平縁の土器が多く，口縁上に把手や突起が発達する。一方，宿毛式や小池原下層式（古）では，波状口縁を呈するものが一定量存在し，把手や突起の発達は顕著でない。しかし，続く松ノ木式や小池原下層式（新）で波状口縁が衰退し，把手や突起の添付が盛行するようになる点は，明らかに福田Ｋ２式側の影響と言える。なお，南九州ではこの変化はさほど強く現れないようであり，岩崎上層式や指宿式では，一部の器形において特殊な形態の把手が発達するものの，阿高式以来の波状口縁がさかんである。

福田Ｋ２式に続く大浦浜下層式や四ツ池式などに見られる把手，突起は，津雲Ａ式，北白川上層式で口縁部文様帯に飲み込まれて波状口縁に変わる。初期の波状口縁には，把手から変化した主文様部分が強く突出するような形を留めたものが多く，時代が下るにつれて波状の山はなだらかになる。一方，周防灘，豊後水道沿岸方面では，波状口縁が盛行する平城式Ｂ群，Ｃ群と，平縁で口縁上に小突起を有する平城式Ａ群，および鐘崎式が並存する状況が認められ，南九州では岩崎上層式→指宿式→市来式と，一貫して波状口縁が維持されている。

［胴部文様帯］　福田Ｋ２式とその並行型式では，胴部文様帯がひとつながりに描かれることが一般的である。そして，この時期の胴部文様帯には，瀬戸内や近畿の福田Ｋ２式のように，胴部上半への施文が簡略化される傾向にあるものと，四国の宿毛式や南九州の岩崎上層式のように，胴部文様帯全面に，均等に文様図形が割りつけられるものの両者が見られる点には注目しておく必要がある。

福田Ｋ２式に後続する，四ツ池式や大浦浜下層式など初期の縁帯文土器には，共通して胴部上半が無文化する現象を認めることができ，これとは少し形が違うが南九州の指宿式でも，口縁部文様帯と胴部文様帯の間に無文帯を挟むものが一般的に認められる。

四ツ池式や大浦浜下層式，布勢Ｉ式など，福田Ｋ２式から派生した型式に見られる胴上部無文帯は，福田Ｋ２式の胴上部文様帯が無文化したものと言える。一方，南四国の松ノ木式に見られる胴上部無文帯は，本来宿毛式で口縁下に位置した文様帯が無文化したものと見ることができ，無文帯の幅が狭いものが多い。このような変化の背景には，胴部上半への施文の簡略化がいち早く現れる福田Ｋ２式の影響を考慮しなければならないであろう。

この他注目すべき点として，近畿では四ツ池式以降も胴部上半に単純な施文を見るものが一定量存在し，北白川上層式では盛行する。この系統は，瀬戸内の彦崎Ｋ１式に見られる胴部上半への施文の復活に影響を与えている。

［文様の割りつけから見た画期］　以上のように，北白川上層式や津雲Ａ式，平城式，指宿式などに共通して見られる，口縁部と胴部に独立的に文様帯を割りつける構成は，大雑把に見て，①福田Ｋ２式末の段階で，各地域の土器型式に共通して口縁部文様帯が発達し，②続く四ツ池式段

階で，胴部上半が無文化することによって成立したものと言え，縁帯文土器の基本的形制を準備したという意味において，この二点を大きな画期と見ることができよう。

2．縁帯文土器の成立過程

次に，この口縁部文様帯の発達と胴部上半の無文化という現象がもたらされた要因，すなわち縁帯文土器の成立過程について検討を加えることにしたい。冒頭にも記したように，これまで縁帯文土器の成立と変遷の背景には，しばしば東日本の土器型式の影響が想定されてきた。上記のように，大局的に見て，西日本における縁帯文土器の成立に主導的役割を果たしたのは，瀬戸内～近畿を分布の主体とする福田Ｋ２式の系統であるから，東日本との関わりを検討する上でさしあたって問題とすべきは，近畿の福田Ｋ２式→四ツ池式という変化に，東日本の土器型式がいかに関わったかという点である。

近畿の福田Ｋ２式は，口縁部文様帯の発達や胴部上半への施文の簡略化傾向などの点において，関東の称名寺Ⅱ式の一部との共通性が強く，特に近畿東半において顕著に認められる口端無文帯に新たに発達する口縁部文様帯の系統や，縦位分割への傾斜を示す懸垂的な胴部文様，低調な縄文施文といった諸特徴は，中津Ⅱ式からの独自的展開というよりも，関東の称名寺Ⅱ式と深い関わりを有するものと見なければならないであろう。しかし，福田Ｋ２式全体から見れば，このような事例はむしろ局地的なものと言える。

続く四ツ池式では，胴部のくびれる深鉢で胴部上半が無文化し，縁帯文土器の基本的形制が成立する。先に述べたように福田Ｋ２式→四ツ池式の変化と，称名寺Ⅱ式→堀之内１式の変化との間には，厳密に見れば食い違いがあるのかも知れないが，おおむね両者は並行した変化と見られ，四ツ池式における胴部上半の無文化は，堀之内１式の胴部で強く屈曲する鉢形土器における胴部上半の無文化と足並みをそろえた現象と言えよう。

胴部の文様構成について見ると，四ツ池式では，福田Ｋ２式には見られなかった多条沈線や，地縄文などの新たな手法が加わる。千葉豊氏は，四ツ池式で新たに出現するこれらの手法の由来を堀之内１式に求め，東日本の影響を示すものと見ているが（千葉 1989a），地縄文は四ツ池式に並行する段階の（関東南西部を中心とする）堀之内１式では一般的な手法でなく，多条沈線も堀之内１式のそれとは用いられ方が違っている（註26参照）。そして何よりも，この時期福田Ｋ２式や四ツ池式に伴出する堀之内１式には，地縄文や多条沈線などの手法がほとんど見られないという事実がある[37]。

千葉氏が指摘するように，四ツ池式に見られる多様な文様構成は，単純に福田Ｋ２式の延長上で考えることのできないものであるが，ここで十分に考慮しておかなければならないのは，四ツ池式で胴部上半が無文化する現象で，これは胴下部の文様図形に深刻な影響を与えるものである。四ツ池式やその並行型式に見られる，縄文施文部の混乱や渦巻きの強調などの多様な施文形態は，胴上部の無文化によって文様図形相互の連携が失われ，個々の図形がバラバラに用いられるようになっ

た時に生じたものと理解されよう。これは，このような施文手法の多様化が，近畿に限らず，堀之内１式の影響を直接的に被ることのなかった，瀬戸内以西の地域においても同様に認められることからも推測されるものである。

なお，四ツ池式の胴部上半の無文化については，この時期以降顕著になる堀之内１式の流入と直接的に関連づけて捉えるむきもあるが，四ツ池式に伴って近畿で出土する堀之内１式は，胴部のくびれの弱い懸垂的な施文を有する沈線文系の深鉢を主体としており，胴部上半を無文帯とする鉢形土器の分布は伊勢湾岸周辺に限られている[38]。従って，四ツ池式段階での胴部上半の無文化と堀之内１式の流入は，必ずしも相関関係にあるとは言えないようである。

以上のように，近畿における福田Ｋ２式から四ツ池式への変化には，称名寺Ⅱ式や堀之内１式との密接な影響関係を指摘することができる。しかしこの影響関係は，例えば称名寺Ⅰ式と中津Ⅰ式の間に見られるような，一方の系統がもう一方の系統に直接的に影響を及ぼし，結果的に双方の間で共通性が強まるという性格のものではなく（今村 1977），双方において安定的な地域性を基盤とした，土器型式の連続的な推移を跡づけることができる点に特色がある。

確かに近畿東半においては，福田Ｋ２式から四ツ池式にかけて，称名寺Ⅱ式や堀之内１式の影響を色濃く認めることができるのは事実であるし，これまで度々指摘されてきた通り，四ツ池式以降，関東の堀之内１式が分布域を近畿にまで広げる現象は，東日本の影響の強まりを端的に示す事例と言える。しかし，近畿において縁帯文土器と堀之内式双方の系統が，混じり合って一体化することなく相互に独立した系統的変遷をたどり，北白川上層式のほぼ全期間を通じて共存し続けるという現象は，堀之内式の強い浸透力，波及力を示すとともに，縁帯文土器の根強い伝統を物語るものであろう。

結論的に言って，縁帯文土器の成立に関して，土器の上から東日本の土器型式の影響を直接的に読み取ることは困難であり，むしろこの時期，東西の土器型式が緊密な相互的関係を有しつつ，歩調を合わせた推移をたどる点にこそ目を向ける必要があろう。そして先に示したように，こうした緊密な相互的関係は，近畿の土器型式を介してさらに西へと広がっている。

３．縁帯文土器の推移とその特質

最後にもう少し視野を広げて，西日本における該期の土器型式の全体的な動向について見ておきたい。

既に詳しく見てきたように，縁帯文土器の成立は西日本各地において同調的な経過を示しており，そこに時間的傾斜を想定することは難しい。この現象は，大局的に見れば，東日本の土器型式と密接な関わりを有する福田Ｋ２式の系統が主導した変化と言えるが，土器の変化の詳細に立ち入って見た場合，個々の土器型式が安定的な地域性を基盤として，隣接する型式との間で迅速かつ緊密な情報の伝達を行い，それを器用に読みかえながら，刻々と土器の上に反映させていくことによって生じた現象と捉えることができる。このようなあり方は，例えば前期の北白川下層Ⅱｂ式や，

中期の船元Ⅰ，Ⅱ式の広域分布などとは性格を異にするものであり，ここに縁帯文土器と総称される土器群が有する特質の一側面を見ることができる。

端的に言って縁帯文土器の成立には，後期を通じて晩期にまで続く基本的な深鉢の器形，文様帯の配置を準備したという点で重要な意義があり，このようなハード面での共通性を前提として，そこに割りつけられる個々の文様図形や文様構成などのソフトの面においても，各地域の土器型式が変化の論理を共有するようになることは，この現象がそれまで独自色の強い土器型式を有していた九州をも含めた広い範囲において，歩調をそろえた変化を示すこととも合わせて，画期的な現象と言えるであろう。

繰り返しになるが，このような土器型式の動態を根幹において支えているのは，土器の安定的な地域性である。かつて田中良之・松永幸男両氏は，この時期の土器の地域性について，“コミュニケーションシステム”の開放の度合いが，土器様式の類縁性を規定するとし，ハイレベルの様式，ローレベルの様式という二極的概念によって理解を試みている（田中・松永 1984）。また，千葉豊氏も個性的地域，基層的地域という二つのレベルを設定して，地域間関係のあり方に検討を加えている（千葉 1989a）。

大局的に見て西日本では縄文後期以降，土器の地域性は振幅を示しつつも弥生時代に向けて安定化する方向に向かうが，大方の認めるように，縄文後晩期土器に認められる地域性は，弥生土器のそれほど固定的なものではない。例えば，成立期以降の縁帯文土器およびその周辺型式の変遷は，基本的な器形，文様の割りつけにおいては共通性を維持しつつも，地域型式としての傾斜を強めていく過程と言え，全体として地域内での斉一性が強まる反面，地域間の差異が顕著になることが指摘されている（田中・松永 1984）。しかし，彦崎Ｋ１式に鐘崎式近似の土器が伴う例や，鐘崎式に市来式近似の台付鉢が伴う例，市来式に鐘崎式の鉢形土器が伴う例などは，型式の核となる土器では独自色を示しつつも，特定の器種を媒介として情報の伝達が密に行われたことを示すものと考えられ，少し視野を広げて見ると，近畿の北白川上層式に堀之内式が伴う例も，これとよく似た現象と言えるであろう。この時期の堀之内式の西進は，単に東日本の影響の強まりを示すというだけでなく，このような大局的動向の中に位置づけて把握する必要があるように思われる。そしてこれに続く後期中葉には，再びこれらの地域型式が統合されていくことによって，広域にわたる土器型式の類似相が生み出されることになる。

このように本稿で扱った時期に限って見ても，土器の地域性，型式間関係は極めて柔軟な動きを示しており，振幅を繰り返していることが知られる。ここでその背景に立ち入ることはできないが，このような土器の複雑な動態は，狩猟採集に生業の基盤を置く縄文時代の社会の一側面を反映したものと言え，弥生土器との質的差異と見ることもできるだろう。

かつて前川威洋氏は，九州の縄文中期から後期への移行における文化変化について，「瀬戸内からの波状的文化の到来が大きな要素となっている」（前川 1968）と記している。これは，上述のような土器型式の動態の一面を捉えたものと言えるであろう。その一方で，この時期の物質文化に認

められる質的転換の背景には，本稿で詳細に検討したように伝播－変容という図式では十分説明することのできない，複雑なプロセスを認めることができる。そして，さらにこのようなプロセスの実態に立ち入って，地域社会の充実と展開を論じるためには，土器の上にあらわれる変化のみならず，物質文化一般に関わる多角的な視点が求められよう。

本稿をまとめるにあたり，前田光雄氏には松ノ木遺跡出土土器について詳しく拝見する機会を与えていただくとともに，多くの貴重な御教示をいただいた。

また，下記の方々には本稿に関わる様々な点について御教示をいただいた他，資料の拝見等に際して便宜を図っていただいた。

今村啓爾，後藤直，大貫静夫，佐藤宏之，安斎正人，大塚達朗，阿部昭典，石井　寛，小倉淳一，遠部　慎，金子裕之，加納　実，上村俊雄，北　浩明，君嶋俊之，木村剛朗，久保田昇三，小滝　勉，小林青樹，阪口英毅，重藤輝行，島岡　武，白岩　修，新東晃一，諏訪　元，曽我貴行，高橋　護，田崎博之，橘　昌信，千葉　豊，出原恵三，富井　眞，富田紘一，友澤　明，中園　聡，橋本久和，畠中宏一，秦　広之，藤川智之，松田真一，松藤和人，松村信博，水ノ江和同，美濃口紀子，宮本一夫，柳澤清一，家根祥多，山田康弘，山中一郎，山村貴輝，吉田和彦，吉田　広，米川裕治（敬称略）

このほか下記の諸機関の御厚意により，関連資料を観察，実測させていただいた。

鹿児島県埋蔵文化財センター，熊本市博物館，木城町教育委員会，福岡県教育委員会，九州歴史資料館，御荘町教育委員会，宿毛市中央公民館，高知県埋蔵文化財センター，徳島県埋蔵文化財センター，観音寺市教育委員会，香川県埋蔵文化財調査センター，愛媛大学埋蔵文化財調査室，小松町立温芳図書館，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター，橿原考古学研究所，奈良文化財研究所，高槻市埋蔵文化財センター，京都大学埋蔵文化財調査センター，京都大学総合博物館，同志社大学考古学研究室，三重県埋蔵文化財調査センター，横浜市立歴史博物館，立正大学考古学研究室，東京大学総合研究博物館，千葉県文化財センター

末筆ながら記して謝意を表したい。

本稿は東京大学文学部，同大学院人文社会系研究科に提出した卒業論文，修士論文のそれぞれ一部を基礎として書き改めたものである。

註

1）中期後葉の口縁部文様帯が後期に続くとする考え方は，山内清男氏の説に準じたものと言えるが，関東地方における加曽利Ｅ式と堀之内１式の口縁部文様帯の関係については，今村氏や鈴木氏による詳細な検討があり，これが純粋に連続すると考えるわけにはいかない（今村 1983，鈴木 1991）。一方，西日本を対象とした千葉豊氏の研究も，中期後葉から後期前葉への口縁部文様帯の連続性については慎重な立場である（千葉 2002a）。そもそも文様帯系統論には，①個々の文様の系統性，②文様が施文される画面（施文域）の系統性，という二つの側面があり，どちらを重視するかによって自ずと系統観も異なってくるし，何よりも，実際の土器の分析にあたっては，複数の系統に属す

る器形，文様図形，文様の割りつけ法が，複雑に絡み合いながら変化することが一般的なので，厳密性を追求すればするほど文様帯の理解には困難がつきまとうことになる。

2）蜆塚Ⅰ式に伴う縁帯文土器は，現在，東海西部で天子神社式と呼ばれているものに近似し，蜆塚Ⅱ式は，東海西部の八王子式に並行するものであるが，これらについては東海地方の項で触れることにする。

3）小松川式は当初，福田Ｋ２式に先行する型式とされ，その後，出原恵三氏によって縁帯文土器成立期に属するものとして位置づけが修正された（出原 1992)。犬飼氏の報告後に行われた小松川藤木遺跡の発掘調査で出土した資料は，一部福田Ｋ２式（宿毛式）末を含むものの，ほぼ福田Ｋ２式直後のまとまりと見て良いものであり，ここでは福田Ｋ２式直後の型式という意味で，小松川式の名称を用いることにしたい。

4）大浦浜遺跡下層からは各種の後期土器が出土しているが，本遺跡の福田Ｋ２式に後続する一群について大浦浜下層式とする。

5）福田Ｋ２式（系）の鉢や宿毛式（系）の浅鉢，皿は精製傾向が強く，赤彩を有するものも少なくない。この種の土器は深鉢に比べて浸透力が強く，型式本来の分布域を越えて広範な広がりを示す点には注意しなければならない。

6）ここで言う意匠部（「図」）とは，土器の表面に残されている文様総体のうち，特定の図形として認められる部分をさす。本稿で扱う範囲においては，基本的に沈線によって囲まれた部分と見て良いが，沈線を何本も並べて加えたり，縄文部と無文部を交互に繰り返す傾向の強い型式では，意匠部が不明瞭で文様帯全体がひとつながりの文様図形のように見える場合もある。

7）宿毛式の口縁部文様帯とそこに加えられる窓枠状区画文は，中津式を経て中期末まで遡ることができる。関東では，中期末加曽利Ｅ４式の文様帯配置を引き継いだ続加曽利Ｅ式（加曽利ＥＶ式）が，堀之内１式の口縁部文様帯の成立に影響を及ぼすことが知られているが，宿毛式の口縁部文様帯は，一部の特殊な系統を除いて縁帯文期までは続かず，福田Ｋ２式の系統に飲み込まれて同化してしまうようである。

8）宿毛式で横位区画文が盛行する理由として，まず考慮されるのは口縁部の窓枠状区画文の影響である。

9）この一群は，西南四国で“三里式”と呼ばれているものにあたる（岡本・木村 1978)。“三里式”はそもそも南四国の津雲Ａ式並行の土器型式として設定されたものであるが，実際には宿毛式直後？まで遡るものと見られる。また，“三里式”と後述する平城式２類を結びつける意見もあるが，両者は明らかに区別されるので，これを平城式に組み入れるのは適当でない。平城式２類は，かつて鎌木義昌氏が指摘した通り，津雲Ａ式と深い関わりを有するもので，平城式に対する“三里式”の影響は従であると考えている。

10）これは主として松ノ木５次調査資料の位置づけに関わる問題で，松ノ木５次資料中，なつめの木式並行とされた一群の主体は，なつめの木よりもやや後出的な段階にあると見られる。

11）前田光雄氏は，松ノ木５次調査の報告において，松ノ木式から津雲Ａ式（古）にかけて，精製深鉢が小型のものに収斂していく現象を指摘している（前田 2000)。これは小型の深鉢が多い山陰や瀬戸内との，組成上の共通性の強まりを示す点で，注目すべき事実である。

12）この点についてはすでに千葉豊氏が指摘している通りであり，卓見と言える（千葉 1990)。注意しなければならないのは，単純に布勢式が瀬戸内の系統に取ってかわったわけではないということで，この時期の変化は，各地域間で足並みをそろえた変遷過程を跡付けることができ，例えば布勢Ⅰ式→Ⅱ式の変化に見られる橋状把手の衰退や，描線の多条化といった現象は，布勢式の側が，近畿や瀬戸内の系統との差異を薄めていく過程でもある。

13）彦崎貝塚資料については，現在，東京大学総合研究博物館において，資料の全体を対象とした再整理が行われているので，詳細については整理終了後に改めて報告することにしたい。

14) 彦崎Ｋ１式に，平城式や鐘崎式類似の沈線を伴う突起が存在することは，当初から山内清男氏によって指摘されていたようで（西田・鎌木 1957），柳澤清一氏によって再提起されている（柳澤 1997）。

15) 山陰西部（島根県西部～山口県）で断片的に発見されている鐘崎式，および高知県田村遺跡群で多量に出土した鐘崎式は，九州のものとほとんど区別がつけられない。従って，こうした事例は鐘崎式そのものの進出として理解されるものである。なお，吉野川水系に属する徳島県上野岡遺跡，新田神社裏１号岩陰では，彦崎Ｋ１式が鐘崎式を伴わずに出土しており，おおむねこの地域までは彦崎Ｋ１式が主体的に分布していたようである。

16) 彦崎Ｋ１式ｃ類と北白川上層Ⅱ式の磨消縄文土器は，互いに近似が著しいため，特に大阪湾岸周辺など，両者の分布域の中間地帯では区別の難しい場合も少なくない。一般的に言って，彦崎Ｋ１式ｃ類では縄文の撚りがRLを主とし，渦巻きなどの要所で沈線が途切れるものが多い。また，文様帯下端から渦巻きがぶら下がるように加えられることがある。一方，北白川上層Ⅱ式では，縄文はLRが多く，沈線は互いにきちんと連結しあって閉じた図形を描くのが原則である。中四国以東で発見されているこの種の磨消縄文土器を，小池原上層式（平城式Ａ群）と関連づける見解もあるが，実際には鳥取県布勢などの少数例を除いて，その大部分は鐘崎Ⅱ式以降に並行するものと見られる。

17) この古，新の別をそれぞれ小池原下層Ⅰ式，Ⅱ式と呼ぶのが良いのではないかと思うが，この呼称は別に用いられているので，ここでは小池原下層式（古），（新）と表記する。

18) 鎌木氏はこの１類の存在を根拠として，平城式と鐘崎式の並行関係を説いている。しかし，九州側ではその後，前川威洋氏の研究によって小池原上層式と鐘崎式が分離されており，今日，四国側でも鐘崎式は平城式に含めないことが一般的である。

19) 最近，千葉豊氏は平城貝塚出土土器をａ～ｄ類に分類し，ａ類→ｂ類→ｃ類という変遷を想定している（千葉 2002b）。千葉氏のａ類は筆者の平城式Ｂ群，ｂ類は同Ｃ群にほぼ相当し，ｃ類は同Ａ群と鐘崎Ⅱ式である。後述するように，平城式Ｃ群が彦崎Ｋ１式に並行することは明らかなので，千葉氏の編年ではｂ類以降が彦崎Ｋ１式に並行することになるが，岡山県彦崎貝塚，香川県永井などで彦崎Ｋ１式に伴出したのは，多量の鐘崎Ⅱ式近似の土器と少量の平城式Ｃ群近似の土器であり，Ａ群は全く含まれていない。

20) 報文中において宮本氏も指摘しているように，本資料には津雲Ａ式など，古い段階の土器も少量含まれているものの，遺存状況の良い大型の破片は，おおむね一時期に属するものと見られる。

21) 田中・松永両氏の鐘崎Ⅰ式は小池原上層式を指す（田中・松永 1981）。

22) 細かな点であるが，図14－①において，渦巻きの部分に進入してくる空白部が時計回りに巻き込むのに対して，同図③では逆になっている点に注意。

23) この土器は，橋状把手や三本沈線を用いた文様構成において，布勢式やその影響下にある土器に近似する。しかし，口径が大きく，胴部文様帯の下端を沈線によってきちんと区画する点などは在地への定着を示すものであろう。該期の土器型式の動向を考える上で，興味深い資料である。

24) 1977年までに知られていた近畿の資料は極めて乏しいものであり，この段階での今村氏の指摘はまさに卓見と言える。なお今日でも，近畿において福田Ｋ２式と四ツ池式が共存するという考えも一部にあるが，和歌山県亀川，奈良県広瀬，三重県新徳寺，愛知県朝日などには，遺跡単位あるいは遺構単位で四ツ池式が単純に出土した事例があるので，両者は年代的に分離されると考えなければならない。

25) 小濵学氏は新徳寺式をⅠ式とⅡ式に細分しており，最近，伊勢湾岸周辺の資料について詳細な検討を加えている（小濵 1997，2002）。筆者も小濵氏の新徳寺Ⅰ，Ⅱ式という変化の方向性自体は妥当なものと考えている。ただし，個々の土器については区別の難しい場合も少なくないので，今後，前後の型式とのつながりを含めた検討が必要になろう。なお，新徳寺Ⅱ式は芥川式に並行する可能性が指摘されているが，全体的な形態装飾から見て，むしろⅡ式は四ツ池式に近似し，芥川式までは下らないものと考えられる。

26) この時期の沈線の多条化は，堀之内１式の多条沈線と結びつけて説明されることがあるが，堀之内１式の沈線の多条化は，器面を沈線によって均等に埋めるという意識が根底にあり，地に縄文を施すものが一定量存在する。これに対して，四ツ池式の多条沈線による渦巻き文は，器面を埋めるというよりもバラバラに配される傾向が強く，地に縄文を有さないことが原則である。また，後述するように，四ツ池式と堀之内１式の多条沈線は時期が異なるので，両者を直接的に結びつけることはできない。むしろ四ツ池式の沈線の多条化は，縄文施文の衰退に伴って，意匠部を強調するために生じたものと考えた方が適切であろう。

27) 細かな点であるが，芥川の資料中に見られる，四ツ池式類似の口縁形態を有し，口縁外端の刻み目が消失した一群は，高知県松ノ木などでも検出されており，逆に香川県なつめの木や，北白川上層Ⅰ式にはほとんど存在しないことから，四ツ池式末の一段階を構成する可能性があると考えている。これは小濵氏の新徳寺式の細分とも関わる問題である（小濵 1997）。

28) 後述するように東海地方では，明らかに北白川上層Ⅱ式並行期まで下る円文の例が知られており，近畿でも一部のものはこの段階まで残る可能性がある。しかし，例外的な存在と考えておいて良いであろう。

29) 西日本の後期中葉の深鉢に共通して見られる磨消縄文は，施文形態において相当に強い類似を示す一方で，系統発生的に見るとこれらは，それぞれ異なる由来から生じたものと考えられる。この間の経過はかなり複雑であり，この問題について論じることは本稿の主題から大きく外れるので，ここでは触れない。

30) これに対して，千葉豊氏は半筒状把手が２個存在したと考えている（千葉 1995）。

31) 具体的には，関東南西部を分布の主体とする堀之内１式の一部で，石井寛氏のＢ群に近いものである（石井 1993）。このような器面の縦位分割は，中津Ⅱ式や福田Ｋ２式の文様の割りつけ原理とは基本的に異なるもので，関東的な割りつけ法と言える。なお，関東南西部の堀之内１式は，東関東の堀之内１式に対して下北原式や東正院式と呼ばれることもあるが，本稿では取り敢えず両者を包括した全体を堀之内１式と呼んでいる。

32) 加納実氏は，関東南西部で出土するこの種の土器の一部に見られる沈線間への充填縄文を，関西系土器の影響を示す可能性のある事例として指摘している（加納 2000b）。確かに，「図」への充填縄文は中津Ⅱ式や福田Ｋ２式など，西日本の系統で盛んに用いられる手法であるが，福田Ｋ２式末以降の近畿東半，特に伊勢湾岸周辺では充填縄文は極めて低調なので，これを積極的に西日本の影響と見るのは躊躇される。筆者は，関東南西部の堀之内１式に認められる充填縄文の復活に，東海以西の土器型式が関与した可能性は少ないと考えている。

33) 東海東部～関東で出土している福田Ｋ２式は，鉢や浅鉢などの精製品が中心である。

34) 三重県下川原５次調査では，柄鏡形住居址（11号住居址）から北白川上層Ⅱ式や堀之内２式の朝顔形土器とともに，堀之内２式の一部をなす沈線文系の粗製土器が出土しており，注目すべき事例である。

35) 千葉豊氏は，天子神社式→蜆塚Ⅰ式という変遷を想定しているが（千葉 1989a），基準資料からすれば，両者は土器の組み合わせが異なるだけで，ほとんど並行する型式と見て良いと思われる。

36) 橋口尚武氏によって福田Ｋ２式とされた破片（橋口 1988）は，渦巻きの形態などから考えて，堀之内式（１式？）と考えた方が良いが，これとは別に福田Ｋ２式の深鉢口縁部と見られる小破片がある（大島町教育委員会 1984：第11図205）。

37) 奈良県広瀬SK40で，四ツ池式に伴出した堀之内１式には地文に縄文が加えられている。しかし，関東南西部に分布するこの種の土器は，地文を有さないのが原則である。なお千葉氏は，堀之内１式の影響を示す可能性のある事例として，四ツ池式に櫛歯状施文具による条線を有する粗製土器が伴うことを挙げているが（千葉 1989a），その後増加した資料から見るとこれは疑問である。

38) こうした見かけの分布上の偏りは，現在知られている資料の偏りを反映している可能性もある。し

かし，近畿西部でも四ツ池式に属する遺跡の調査事例に乏しいわけではなく，まとまった資料が出土した遺跡もいくつか知られているので，今後この形勢が大きく覆ることはないと考えている。

＜引用・参考文献＞

論文

麻生　優　1962　「土器」　『蜆塚遺跡』　浜松市教育委員会　78-89頁

足立克己　1987　「山陰地方における縄文後期前～中葉土器について」　『東アジアの考古と歴史』(中)　岡崎敬先生退官記念論集　同朋社　120-143頁

阿部芳郎　1987　「縄文時代後期前葉型式群の構造と動態―堀之内１式と東北地方の型式群の関係について―」　『駿台史学』71　75-105頁

阿部芳郎　1988　「堀之内２式型式基礎論考（Ⅰ）―関東東部地域における成立期の様相―」　『貝塚博物館紀要』15　千葉市立加曽利貝塚博物館　7-20頁

阿部芳郎　1989　「堀之内１式土器の構成と変遷」　『信濃』40-４　１-23頁

阿部芳郎　1998　「上土棚南遺跡出土の後期土器の分類と編年」　『上土棚南遺跡第３次調査』　綾瀬市教育委員会・上土棚南遺跡発掘調査団　118-143頁

石井　寛　1984　「堀ノ内２式土器の研究（予察)」　『調査研究集録』５　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団　１-47頁

石井　寛　1992　「称名寺式土器の分類と変遷」　『調査研究集録』９　横浜市ふるさと歴史財団　１-70頁

石井　寛　1993　「堀之内１式期土器群に関する問題」　『牛ヶ谷遺跡　華蔵台南遺跡』　横浜市ふるさと歴史財団　271-305頁

石井　寛　1995　「原出口遺跡20号住居址出土土器をめぐって」　『川和向原遺跡・原出口遺跡』　横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会　327-364頁

泉　拓良　1979　「西日本の縄文土器」　『世界陶磁全集』１　日本原始　小学館　142-172頁

泉　拓良　1980　「北白川上層式の細分」　『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和54年度　京都大学埋蔵文化財研究センター　53-60頁

泉　拓良　1981a　「近畿・中国・四国の土器」　『縄文土器大成』３　後期　講談社　153-155頁

泉　拓良　1981b　「近畿地方の土器」　『縄文文化の研究』４　縄文土器Ⅱ　雄山閣　166-175頁

泉　拓良　1989　「縁帯文土器様式」　『縄文土器大観』４　小学館　273-276頁

泉　拓良・玉田芳英　1986　「文様帯系統論―縁帯文土器―」　『季刊考古学』17　55-58頁

犬飼徹夫　1976　「愛媛県平城貝塚の再評価」　『考古学ジャーナル』129　17-20頁

犬飼徹夫　1978　「平城上層式について」　『古代文化』30-４　35-41頁

犬飼徹夫　1982　「縄文土器文化の様相」　『愛媛県史』原始・古代Ⅰ　愛媛県　64-112頁

犬飼徹夫　1985　「西四国における小松川式の設定」　『愛媛考古学』８　11-27頁

犬飼徹夫　1993　「愛媛県平城貝塚出土Ⅱ式土器の再検討―西脇論文への反論―」　『古代吉備』15　25-33頁

犬飼徹夫　1997a　「四国における縄文後期研究の動向と問題点」　『縄文時代』８　111-117頁

犬飼徹夫　1997b　「愛媛県南宇和郡平城貝塚出土土器の総括とその課題」　『愛媛考古学』14　30-44頁

犬飼徹夫　2001　「西南四国の縄文型式研究の現状と問題点―三里式土器と平城式土器・その系統性―」　『古代吉備』23　11-24頁

今村啓爾　1977　「称名寺式土器の研究」(上)(下)　『考古学雑誌』63-１，63-２　１-29頁，22-60頁

今村啓爾　1981　「柳澤清一氏の『称名寺式土器論』を批判する」　『古代』71　24-34頁
今村啓爾　1983　「文様の割りつけと文様帯」　『縄文文化の研究』5　縄文土器Ⅲ　124-150頁
植田文雄　1990　「今安楽寺遺跡縄文後期土器の検討」　『今安楽寺遺跡』　能登川町教育委員会　168-178頁
植田文雄　1996　「正楽寺遺跡出土縄文後期土器群の検討」　『正楽寺遺跡』　能登川町教育委員会　227-269頁
岡田茂弘　1965　「縄文文化の発展と地域性―近畿」　『日本の考古学』Ⅱ　縄文時代　河出書房　193-210頁
岡本健児　1956　「四国」　『日本考古学講座』3　縄文文化　河出書房　202-208頁
岡本健児　1966　「宿毛貝塚出土縄文式土器の再検討」　『研究誌』5　高知小津高校　1－4頁
岡本健児・木村剛朗　1978　「総括」　『三里遺跡』　中村市教育委員会　32-35頁
乙益重隆　1965　「縄文文化の発展と地域性―九州西北部」　『日本の考古学』Ⅱ　縄文時代　河出書房　250-267頁
乙益重隆・前川威洋　1969　「九州」　『新版考古学講座』3　雄山閣　269-289頁
賀川光夫　1956　「九州」　『日本考古学講座』3　縄文文化　河出書房　209-224頁
賀川光夫　1964　「所謂鐘崎式土器の層位出土の新例（小池原式の設定）―縄文後期小池原貝塚―」　『大分県地方史』34　42-50頁
賀川光夫　1965　「縄文文化の発展と地域性―九州東南部」　『日本の考古学』Ⅱ　縄文時代　河出書房　268-284頁
加納　実　1986　「中津貝塚出土土器の抱える問題点」　『研究連絡誌』18　6－13頁
加納　実　1994　「縄文時代後期・関西系土器群の新例」　『研究連絡誌』39　1－15頁
加納　実　1999　「第3回原始文化研究会の岡本勇先生のメモ」　『土曜考古』23　11-19頁
加納　実　2000a　「集合的居住の崩壊と再編成―縄文中・後期集落への接近方法―」　『先史考古学論集』9　63-104頁
加納　実　2000b　「武士遺跡出土の関西系土器群の再評価」　『貝塚博物館紀要』27　千葉市立加曽利貝塚博物館　25-46頁
鎌木義昌　1996　『瀬戸内考古学研究』　河出書房新社
鎌木義昌・木村幹夫　1956　「中国」　『日本考古学講座』3　縄文文化　河出書房　188-201頁
鎌木義昌・高橋　護　1965　「縄文文化の発展と地域性―瀬戸内」　『日本の考古学』Ⅱ　縄文時代　河出書房　230-249頁
河口貞徳　1957　「南九州後期の縄文式土器―市来式土器―」　『考古学雑誌』42－2　13-25頁
河口貞徳　1981　「市来式の祖型と南島先史文化への影響」　『鹿児島考古』15　1－21頁
木下哲夫　1993　「気屋式以後(1)―北陸に於ける堀ノ内2式相当の土器型式について（予察）―」　『先史考古学研究』4　55-82頁
木下哲夫　1997　「福井県右近次郎遺跡の福田K2式土器と気屋式土器―北陸と西日本の相関―」　『堅田直先生古希記念論文集』　真陽社　37-56頁
木村剛朗　1996　「総括」　『四国西南沿海部の先史文化』　幡多埋蔵文化財研究所　877-915頁
久保穣二朗　1987　「鳥取県下における後期前葉から中葉にかけての縄文土器の変遷について」　『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』　東伯町教育委員会　46-50頁
後藤晃一　1993　「宇佐平野周辺における磨消縄文土器の編年」　『考古論集』　潮見浩先生退官記念論文集　211-228頁
小濵　学　1997　「結語」　『新徳寺遺跡』　三重県埋蔵文化財センター　159-176頁
小濵　学　2002　「縄文時代中・後期の土器」　『研究紀要』11　三重県埋蔵文化財センター　75-88頁
近藤　敏　1993　「市原市内出土の非在地系土器―縄文時代後期を中心とした資料紹介―」　『市原市

文化財センター研究紀要』Ⅱ　市原市文化財センター　135-150頁
坂本嘉弘　1994　「十合野遺跡出土土器について」　『十合野遺跡』　庄内町教育委員会　62-68頁
佐々木　謙・小林行雄　1937　「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺蹟」　『考古学』8-10　458-475頁
佐藤達夫　1974　「土器型式の実態―五領ヶ台式と勝坂式の間」　『日本考古学の現状と課題』　吉川弘文館　81-102頁
澤下孝信　1994　「九州・四国磨消縄文系土器」　『季刊考古学』48　74-77頁
縄文セミナーの会　1990　『縄文後期の諸問題』
縄文セミナーの会　2002　『後期前半の再検討』
市川考古学博物館　1983　『シンポジウム堀之内式土器の記録』
鈴木徳雄　1991　「称名寺式の変化と文様帯の系統」　『土曜考古』16　25-67頁
鈴木徳雄　1993　「称名寺式の変化と中津式―型式間交渉の一過程―」　『縄文時代』4　21-51頁
鈴木徳雄　1994　「称名寺式の形制と施文域―文様構成の地域的伝統と型式変化―」　『東海大学校地内遺跡調査団報告』4　65-94頁
鈴木徳雄　1998　「称名寺式の文様変化と論理」　『東海大学校地内遺跡調査団報告』8　75-101頁
鈴木徳雄　1999　「称名寺式関沢類型の後裔」　『縄文土器論集』―縄文セミナー10周年記念論文集―　337-370頁
鈴木徳雄　2000　「称名寺式終末期と装飾帯の変化」　『群馬考古学手帳』10　1-13頁
田中良之　1982　「磨消縄文土器伝播のプロセス」　『森貞次郎博士古稀記念論集』上巻　59-96頁
田中良之・松永幸男　1981　「寺の前遺跡縄文後期土器について」　『荻台地の遺跡』Ⅵ　荻町教育委員会　105-114頁
田中良之・松永幸男　1984　「広域土器分布圏の諸相―縄文時代後期西日本における類似様式の並立」　『古文化談叢』14　81-113頁
玉田芳英　1989　「中津・福田Ｋ２式土器様式」　『縄文土器大観』4　小学館　262-265頁
千葉　豊　1989a　「縁帯文系土器群の成立と展開」　『史林』72-6　102-146頁
千葉　豊　1989b　「辻垣内遺跡出土の縄文土器」　『昭和61年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』　三重県教育委員会　7-20頁
千葉　豊　1990　「近畿北部・山陰東部の成立期縁帯文土器」　『小森岡遺跡』　竹野町教育委員会　68-103頁
千葉　豊　1991　「縄文時代後期の土器」　『先史時代の北白川』　京都大学文学部博物館　58-59頁
千葉　豊　1992　「西日本縄文後期土器の二三の問題―瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題―」　『古代吉備』14　27-50頁
千葉　豊　1995　「福田Ｋ２式再論―千葉県武士遺跡出土の『関西系土器』の評価―」　『古代吉備』17　7-19頁
千葉　豊　1997　「福田Ｋ２式と宿毛式・序論―型式弁別の視点について―」　『古代吉備』19　13-27頁
千葉　豊　1998　「後期縄文土器の施文手法ノート―近畿・瀬戸内地方の事例を中心に―」　『古代吉備』20　4-10頁
千葉　豊　2001　「沖丈遺跡出土縄文後期土器の編年的意義―崎ヶ鼻式と『権現山式』のあいだ―」　『沖丈遺跡』　邑智町教育委員会　306-318頁
千葉　豊　2002a　「波状単位と文様帯―縁帯文土器における事例研究―」　『長野県考古学会誌』99・100　33-53頁
千葉　豊　2002b　「平城式について」　『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論集　109-132頁

帝塚山考古学研究所　1988　『近畿地方出土の堀之内系土器―縄文後期の諸問題―』　『縄文文化研究部会紀要』2
出原恵三　1992　「松ノ木式土器の提唱とその意義」　『松ノ木遺跡Ⅰ』　本山町教育委員会　83-89頁
出原恵三　1993　「南四国中央部における縄文後期土器」　『遺跡』34　25-54頁
土肥　孝　1988　「堀之内Ⅰ・Ⅱ（1・2）式土器について―関西『堀之内系土器』の検討―」　『縄文文化研究部会紀要』2　帝塚山考古学研究所　65-110頁
富井　眞　2000　「西日本縄文後期初頭土器の再編へ―山陰地方西部からの問題提起―」　『考古学研究』47-1　34-51頁
西　健一郎　1980　「鐘崎式土器について」　『九州文化史研究所紀要』25　199-249頁
西田　栄・鎌木義昌　1957　「伊予平城貝塚」　『瀬戸内考古学』1　『瀬戸内考古学研究』1996所収　213-242頁
西脇対名夫　1990　「伊木力遺跡出土縄文時代後期土器の検討」　『伊木力遺跡』　多良見町教育委員会　513-551頁
橋口尚武　1988　「東西文化の接点―後期・晩期―」　『島の考古学　黒潮圏の伊豆諸島』　東京大学出版会　35-41頁
橋本久和　1995　「土器について」　『芥川遺跡発掘調査報告書』　高槻市教育委員会　244-258頁
橋本雄一　1994　「彦崎Ｋ２式に先行する土器群について」　『津島岡大遺跡４』　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　278-290頁
久永春男　1969　「中部地方」　『新版考古学講座』3　先史文化　雄山閣　231-248頁
平井　勝　1993　「縄文後期・四元式の提唱―彦崎Ｋ２式に先行する土器群について―」　『古代吉備』15　1-24頁
本田道輝　1981　「市来式土器」　『縄文文化の研究』4　縄文土器Ⅱ　雄山閣　186-194頁
本田道輝　1989　「市来・一湊式土器様式」　『縄文土器大観』4　小学館　299-302頁
前川威洋　1968　「九州後期縄文文化の諸問題―磨消縄文土器の展開―」　『九州縄文文化の研究』1979所収　41-107頁
前川威洋　1979　『九州縄文文化の研究』　前川威洋遺稿集刊行会
前田光雄　1991　「高知県尻貝遺跡出土の縄文時代後期中葉の土器について」　『牟邪志』4　96-104頁
前田光雄　1993　「平城式についての覚え書き」　『牟邪志』6　44-68頁
前田光雄　1994　「宿毛式，その特質」　『研究紀要』1　高知県文化財団埋蔵文化財センター　23-79頁
前田光雄　2000　「縄文時代後期前半の土器群について」　『松ノ木遺跡Ⅴ』　本山町教育委員会　287-293頁
前田光雄　2001　「土器型式相の試論―西四国縄文時代後期を中心として―」　『西四国の縄文文化』愛媛県歴史文化博物館　120-125頁
間壁忠彦・潮見浩　1965　「縄文文化の発展と地域性―山陰・中国山地」　『日本の考古学』Ⅱ　縄文時代　河出書房　211-229頁
増子康真　1979a　「咲畑Ⅱ式土器について」　『東海先史文化の諸段階（資料編Ⅱ）』　26-27頁
増子康真　1979b　「天子神社貝塚出土の土器型式」　『東海先史文化の諸段階（資料編Ⅱ）』　30-31頁
松崎寿和・間壁忠彦　1969　「西日本」　『新版考古学講座』3　先史文化　雄山閣　249-268頁
松永幸男　2001　『縄文時代重層社会論―広域社会と地域社会―』　松永幸雄著作集刊行会
水ノ江和同　1992　「小池原上層式・下層式土器に関する諸問題」　『古文化談叢』27　77-95頁
水ノ江和同　1993　「九州の縁帯文土器―九州における縄文後期前・中葉土器研究の現状と課題―」　『古文化談叢』30（上）　323-366頁

水ノ江和同　2001　「縄文土器について」　『川原西遺跡（第３地点）』　福岡県教育委員会　38-41頁
三森定男　1938　「先史時代の西部日本」　『人類学・先史学講座』３－２　『日本原始文化の構造』1983所収　143-186頁
宮本一夫　1990　「文京遺跡第11次調査出土の縄文土器の検討」　『文京遺跡第８・９・11次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室　64-78頁
三輪晃三　1996　「九州阿高式系・縁帯文系土器群の研究―縄文中・後期の土器ホライズンの形成とその背景―」　『奈良大学大学院研究年報』創刊号　３-47頁
三輪晃三　1998　「南九州縄文後期再論―武貝塚出土土器の位置づけ―」　『鹿児島県桜島町武貝塚発掘調査報告書』　奈良大学文学部考古学研究室　53-120頁
森　達也　1998　「東海地方における縄文後期の縁帯文土器について」　『野帳の会　考古学論集』久永春男先生頌寿記念　61-79頁
柳浦俊一　2000a　「山陰地方における福田Ｋ２式並行の土器群について」　『古代吉備』22　５-17頁
柳浦俊一　2000b　「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」　『島根県考古学会誌』17　169-196頁
柳澤清一　1977，78，79，80　「称名寺式土器論」　『古代』63，65，66，68　22-60頁，１-24頁，１-28頁，１-40頁
柳澤清一　1994　「西日本縄紋後期前葉編年の再検討」　『古代』98　34-109頁
柳澤清一　1995　「西日本縄紋後期前葉～中葉編年の再検討―東京湾から豊後水道へ―」　『先史考古学研究』５　23-58頁
柳澤清一　1996a　「縄紋後期初頭末～中葉における広域編年軸の検討―伊勢寺・芥川・鶴来ヶ元・十合野遺跡等の新資料より―」　『古代』101　83-112頁
柳澤清一　1996b　「近畿福田Ｋ２式と『関西系土器』の編年について」　『先史考古学研究』６　51-69頁
柳澤清一　1997　「西日本における縄紋時代後期中葉編年の検討―津雲Ａ式・彦崎Ｋ１式から小池原上層式・平城式へ―」　『古代』103　１-50頁
柳澤清一　2000　「再び，武士遺跡における『関西系土器群』の編年について」　『茨城県考古学協会誌』12　１-14頁
柳澤清一　2002a　「近畿地方における縄紋後期前葉～中葉初頭編年の再検討」　『人文研究』31　千葉大学文学部　115-168頁
柳澤清一　2002b　「西日本から見た関東地方縄紋後期初頭末～前葉編年の検討―中津貝塚・浜詰遺跡から称名寺貝塚・武士遺跡へ―」　『茨城県考古学協会誌』14　27-64頁
山下勝年　1983　「仮称林ノ峰Ⅰ式～Ⅳ式の提唱」　『林ノ峰貝塚Ⅰ』　152-163頁
山下勝年　1999　「東海地方　後期前半」　『縄文時代』10　141-146頁
山内清男　1937　「縄紋土器型式の細別と大別」　『先史考古学』１-１　29-32頁
山内清男　1940　「堀之内式」　『日本先史土器図譜』第Ⅵ輯
山内清男　1979　『日本先史土器の縄紋』　先史考古学会
山内清男編　1964　『日本原始美術』１　縄文土器　講談社
山村貴輝　1994　「土器様式と縄文時代の地域圏」　『季刊考古学』48　34-39頁
横浜市埋蔵文化財センター　1990　「称名寺式土器に関する交流研究会の記録」　『調査研究集録』７
渡部明夫　1990　「縄文時代後・晩期の土器について」　『永井遺跡』　香川県埋蔵文化財調査センター　788-795頁
渡部明夫　1994　「観音寺市なつめの木貝塚出土の縄文時代後期土器（なつめの木式）について」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅱ　１-28頁

山　崎　真　治

報告書・資料紹介

群馬県

前橋市芳賀北曲輪　前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1990　『芳賀北曲輪遺跡』

千葉県

市川市堀之内貝塚　市立市川考古博物館　1992　『堀之内貝塚資料図譜』

市原市菊間手永貝塚　市原市文化財センター　1987　『菊間手永遺跡』

市原市武士　千葉県文化財センター　1996　『市原市武士遺跡』

東京都

稲城市平尾 No. 9　平尾遺跡調査会　1971　『平尾遺跡調査報告Ⅰ』

大島町下高洞　大島町教育委員会　1984　『下高洞遺跡』

神奈川県

伊勢原市下北原　神奈川県教育委員会　1977　『下北原遺跡』

鎌倉市東正院　神奈川県教育委員会　1972　『東正院遺跡調査報告』

横浜市原出口　横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会　1995　「原出口遺跡」　『川和向原遺跡・原出口遺跡』

横浜市華蔵台南　横浜市ふるさと歴史財団　1993　「華蔵台南遺跡」　『牛ヶ谷遺跡・華蔵台南遺跡』

横浜市称名寺貝塚　吉田　格　1960　『横浜市称名寺貝塚』　東京都武蔵野郷土館調査報告書第1冊

静岡県

磐田市西貝塚　磐田市教育委員会　1961　『西貝塚』

修善寺町修善寺大塚　修善寺町教育委員会・加藤学園考古学研究所　1982　『修善寺大塚』

中伊豆町上白岩　中伊豆町教育委員会　1979　『上白岩遺跡発掘調査報告書』
中伊豆町教育委員会　1984　『上白岩遺跡　第Ⅲ次・第Ⅳ次・第Ⅴ次発掘調査報告書』
加藤学園考古学研究所　1991　『上白岩遺跡　第6次・第7次調査報告書』
加藤学園考古学研究所　1992　『上白岩遺跡　第9次調査報告書』
加藤学園考古学研究所　1993　『上白岩遺跡　第8次調査報告書』

沼津市山崎　沼津市教育委員会　1976　『山崎・大平丸山・高田第六天』

浜松市川山　浜松市文化協会　1995　『川山遺跡』

浜松市蜆塚貝塚　浜松市教育委員会　1952，1953，1955，1961，1962　『蜆塚遺跡』
久永春男　1969　「中部地方」　『新版考古学講座』3　先史文化　雄山閣
浜松市教育委員会　1985　『蜆塚遺跡Ⅴ・Ⅵ』

浜松市前山　浜松市文化協会　1992　『佐成湖西岸遺跡群』

袋井市大畑貝塚　岡本　勇　1955　「静岡県小笠郡大畑遺跡」　『日本考古学年報』4
袋井市教育委員会　1978，1979　『袋井市大畑遺跡』
袋井市教育委員会　1993　『大畑遺跡Ⅶ』

富士宮市滝戸　富士宮市教育委員会　1997　『滝戸遺跡』

富士宮市箕輪　加藤学園考古学研究所　1983　『駿豆地方の縄文土器集成（実測図）』
富士宮市教育委員会　1993　「箕輪A遺跡」　『富士宮市の遺跡』

富士市天間沢　富士市教育委員会　1985　『天間沢遺跡Ⅱ』

石川県

宇ノ気町気屋　奈良国立文化財研究所　1993　「気屋遺跡」　『能登縄文資料』山内清男考古資料6
宇ノ気町教育委員会　1996　『宇ノ気町気屋遺跡』

吉野谷村吉野ノミタニ　吉野谷村教育委員会　1997　『吉野谷の石器時代（Ⅲ）』

福井県

大野市右近次郎　大野市教育委員会　1985　『右近次郎遺跡Ⅱ』

勝山市三室　勝山市教育委員会　1983　『三室遺跡Ⅱ』
三方町北寺　三方町教育委員会　1992　「北寺遺跡」　『市港遺跡・北寺遺跡』
愛知県
足助町馬場　足助町教育委員会　1981　『馬場遺跡概報』
渥美町伊川津貝塚　渥美町教育委員会　1988　『伊川津遺跡』
渥美町八幡上　西の浜久衛森遺跡調査団　1980「八幡上遺跡」　『西の浜久衛森遺跡』
一宮市三ツ井　愛知県埋蔵文化財センター　1999　『三ツ井遺跡』
蒲郡市形原　蒲郡市教育委員会　1982　『形原遺跡発掘調査報告書』
豊田市中川原　豊田市教育委員会　1999　『中川原遺跡』
名古屋市朝日　愛知県埋蔵文化財センター　1991　『朝日遺跡Ⅴ（土器・総論編）』
西尾市新御堂　西尾市教育委員会　1995　『貝ス遺跡・新御堂遺跡』
南知多町神戸52番地　知多古文化研究会編　1997　「愛知県南知多町の考古資料」　『南知多町誌』資料編六　南知多町
南知多町咲畑貝塚　師崎町立師崎中学校　1960　『咲畑貝塚』
南知多町田中島　「愛知県南知多町の考古資料」　『南知多町誌』資料編六（前出）
南知多町林ノ峰貝塚　南知多町教育委員会　1983　『林ノ峰貝塚Ⅰ』
西尾市八王子貝塚　西尾市教育委員会　2000　『八王子貝塚Ⅰ』
西尾市教育委員会　2001　『八王子貝塚Ⅱ』
岐阜県
岐阜市岩垣内　岐阜県文化財保護センター　2000　『岩垣内遺跡』
岐阜市勝更白山神社周辺　日本道路公団・岐阜県文化財保護センター　1995　『西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡』
岐阜市底津　岐阜県美濃土木事務所・岐阜県文化財保護センター　1995　『飛瀬・底津遺跡』
藤橋村塚　水資源開発公団・岐阜県文化財保護センター　1998　『塚遺跡』
宮川村宮ノ前　宮川村教育委員会　1998　『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』
春日村岩井谷　岐阜県文化財保護センター　2000　『岩井谷遺跡』
藤橋村上原　岐阜県文化財保護センター　1998　『上原遺跡Ⅰ』
岐阜県文化財保護センター　2000　『上原遺跡Ⅱ』
三重県
上野市清水北　穂積裕昌・田村陽一　1994　「上野市清水北遺跡出土の縄文土器」　『研究紀要』3　三重県埋蔵文化財センター
鈴鹿市東庄内A　日本道路公団名古屋支社・三重県文化財連盟　1970　「東庄内Ａ遺跡」　『日本道路公団名阪道路埋蔵文化財調査報告書』
紅村　弘ほか　1978　『東海先史文化の諸段階（資料編Ⅱ）』
多気町上ノ垣外　三重県埋蔵文化財センター　1996　『上ノ垣外遺跡』
多気町新徳寺　三重県埋蔵文化財センター　1997　『新徳寺遺跡』
鳥羽市贄　鳥羽市教育委員会　1975　『贄遺跡』
名張市下川原　名張市遺跡調査会　1986　『下川原遺跡』
名張市遺跡調査会　1997　『下川原遺跡５次調査概要』
名張市辻垣内　三重県教育委員会　1989　「辻垣内遺跡」　『昭和61年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』
名張市中戸　「中戸遺跡」　『昭和61年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』（前出）
白山町高瀬B　小濵　学ほか　2002　「高瀬Ｂ遺跡」　『研究紀要』11　三重県埋蔵文化財センター
松阪市伊勢寺　竹内英昭　1994　「松阪市伊勢寺遺跡出土の縄文土器」　『研究紀要』3　三重県埋蔵

山　崎　真　治

文化財センター

滋賀県

大津市穴太　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1994　『一般国道161号線（西大津バイパス）建設に伴う穴太遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

大津市粟津湖底　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1997　『粟津湖底遺跡』（粟津湖底遺跡Ⅱ）

甲良町小川原　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1996　『小川原遺跡３』

能登川町今安楽寺　能登川町教育委員会　1986，1990　『今安楽寺遺跡』

能登川町柿堂　能登川町教育委員会　1992　『中沢遺跡（第８次）・柿堂遺跡（第３次）』

能登川町正楽寺　能登川町教育委員会　1996　『正楽寺遺跡』

能登川町林　能登川町教育委員会　1990　『林遺跡』

能登川町教育委員会　1995　『林・石田遺跡』

彦根市松原内湖　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1993　『松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

マキノ町仏性寺　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1979　「高島郡マキノ町仏性寺遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ―３』

京都府

網野町浜詰貝塚　網野町教育委員会　1993　『浜詰遺跡発掘調査概要』　網野町教育委員会

京都市京大植物園内　中村徹也　1974　『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』

京都大学文学部博物館　1991　『先史時代の北白川』

京都市北白川小倉町　梅原末治　1953　「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」　『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十六冊

京都市京大病院構内　京都大学埋蔵文化財研究センター　1990　「京都大学病院構内遺跡の調査」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』

京都大学埋蔵文化財研究センター　2000　「京都大学病院構内 AG20・AF20区の発掘調査」　『京都大学構内遺跡調査研究年報』1996年度

京都市東土川　小島孝修　1995　「東土川遺跡出土の縄文時代遺物について」　『京都府埋蔵文化財情報』56

長岡京市下海印寺　長岡京市教育委員会　1982　『京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告書』

舞鶴市浦入　京都府埋蔵文化財調査研究センター　2001　「浦入遺跡群」　『京都府遺跡調査報告書』第29冊

舞鶴市桑飼下　平安博物館　1975　『桑飼下遺跡発掘調査報告』

大阪府

和泉市仏並　大阪府文化財協会　1986　『仏並遺跡』

岩崎二郎　1988　「仏並遺跡71―OD の縄文土器」　『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』1

和泉市教育委員会　1993　『仏並遺跡発掘調査報告書―エッソガソリンスタンド建設に伴う発掘調査―』

松尾信裕　1995　「仏並遺跡包含層出土の縄紋土器」　『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3

大阪市森の宮　難波宮址顕彰会　1978　『森の宮遺跡第３・４次発掘調査報告書』

大阪市文化財協会　1996　『森の宮遺跡Ⅱ』

堺市小阪　大阪府教育委員会・大阪府文化財センター　1992　『小阪遺跡』

堺市西浦橋　大阪府文化財センター　1984　『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

堺市四ツ池　第二阪和国道内遺跡調査会　1971　『池上・四ツ池遺跡』16，17

高槻市芥川　高槻市教育委員会　1995　『芥川遺跡発掘調査報告書』
東大阪市縄手　縄手遺跡調査会　1971　『縄手遺跡Ⅰ』
東大阪市教育委員会　1976　『縄手遺跡Ⅱ』
東大阪市教育委員会　1987　「縄手遺跡・若江北遺跡の調査―昭和61年度―」　『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要』28
藤井寺市林　大阪府教育委員会　1981　『林遺跡発掘調査概要Ⅲ』
岬町淡輪　大阪府教育委員会　1981　『淡輪遺跡発掘調査概要Ⅲ』
大阪府教育委員会　1987　『淡輪遺跡発掘調査概要報告書Ⅷ』
奈良県
天理市布留　奈良県教育委員会　1958　「布留遺跡」　『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第10輯
山添村大川　山添村教育委員会　1989　『大川遺跡』
山添村広瀬　橿原考古学研究所　1981　「山添村広瀬遺跡発掘調査概報」　『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）』
橿原考古学研究所付属博物館　1997　『大和の考古学』　常設展示図録
榛原町沢　橿原考古学研究所附属博物館　1987　『大和考古資料目録　宇陀の縄文土器と石器』第14集
和歌山県
海南市亀川　海南市文化財調査研究会・海南市教育委員会　1985　『亀川遺跡Ⅴ』
金屋町糸野　巽　三郎・羯磨正信　1958　「和歌山県下の縄文式文化大観」　『古代学研究』18
北山村下尾井　北山村教育委員会　1979　『和歌山県北山村下尾井遺跡』
清水町粟生　和歌山県文化財センター　1988　『粟生遺跡』
和歌山県文化財センター　1990　『粟生遺跡発掘調査報告書』
兵庫県
関宮町小路頃才ノ木　関宮町教育委員会　1990　『小路頃才ノ木遺跡発掘調査報告書』
高砂市日笠山貝塚　高砂市教育委員会　1968　『日笠山貝塚第２，３次発掘調査報告書』
竹野町小森岡　竹野町教育委員会　1990　『小森岡遺跡』
竹野町見蔵岡　竹野町教育委員会　1997　『見蔵岡遺跡其の二』
鳥取県
倉吉市島　北条町教育委員会　1983　『島遺跡発掘調査報告書第１集』
東伯町森藤第２　東伯町教育委員会　1987　『森藤第１・森藤第２遺跡発掘調査報告書』
鳥取市桂見　鳥取県教育文化財団　1996　『桂見遺跡―八ツ割地区・堤谷東地区・堤谷西地区―』
鳥取市東桂見　鳥取県教育委員会　1992　『東桂見遺跡試掘調査報告書』
鳥取市布勢　鳥取県教育文化財団　1981　『布勢遺跡発掘調査報告書』
『森藤第１・森藤第２遺跡発掘調査報告書』（前出）
名和町南川　名和町教育委員会　1981　『名和遺跡群発掘調査報告書』
福部村栗谷　福部村教育委員会　1989a　『栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
福部村教育委員会　1989b　『栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
福部村教育委員会　1990　『栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
淀江町井手跨　鳥取県教育文化財団　1993　『井手跨遺跡』
淀江町大下畑　鳥取県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所　1994　『大下畑遺跡』
淀江町百塚第７　鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター　1995　『百塚第７遺跡（８区）』
島根県
出雲市三田谷Ⅰ　建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会　1999　『三田谷Ⅰ遺跡（Vol. 1）』
建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会　2000　『三田谷Ⅰ遺跡（Vol. 2）』
出雲市三田谷Ⅲ　建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会　2000　『三田谷Ⅲ遺跡』

邑智町沖丈　邑智町教育委員会　2001　『沖丈遺跡』
木次町平田　木次町教育委員会　1997　『平田遺跡』
頓原町板屋Ⅲ　島根県教育委員会　1998　『板屋Ⅲ遺跡』
頓原町神原Ⅰ　建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会　2000　『神原Ⅰ遺跡　神原Ⅱ遺跡』
頓原町神原Ⅱ　『神原Ⅰ遺跡　神原Ⅱ遺跡』(前出)
頓原町五明田　頓原町教育委員会　1991　『五明田遺跡』
頓原町教育委員会　1992　『五明田遺跡発掘調査報告書』
山崎順子　1999　「飯石郡頓原町五明田遺跡発掘調査概報」　『島根考古学会誌』16
頓原町下山　国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会　2002　『下山遺跡(2)―縄文時代遺構の調査―』
匹見町半田イセ　「山陰地方における縄文後期前～中葉土器について」　『東アジアの考古と歴史』中(前出)
匹見町教育委員会　1991　『匹見町内遺跡群詳細分布調査報告書Ⅳ』
松江市崎ヶ鼻洞窟　佐々木　謙・小林行雄　1937　「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺蹟」『考古学』8-10
宍道正年　1974　『島根県の縄文式土器集成Ⅰ』
瑞穂町郷路橋　島根県教育委員会　1991　「郷路橋遺跡」　『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』
大和村都橋　「山陰地方における縄文後期前～中葉土器について」　『東アジアの考古と歴史』中(前出)
岡山県
岡山市田益田中　岡山県文化財保護協会　1999　『田益田中(国立岡山病院)遺跡』
岡山市津島岡大　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1992　『津島岡大遺跡3』
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1994　『津島岡大遺跡4』
笠岡市高島黒土　岡山県高島遺蹟調査委員会　1956　『岡山県笠岡市高島遺蹟調査報告』
笠岡市津雲貝塚　京都帝国大学　1920　「備中國大島村津雲貝塚発掘報告」　『京都帝国大学考古学研究報告』第5冊
京都大学文学部　1960　「笠岡市西大島・津雲貝塚」　『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部　日本先史時代
鎌木義昌　1986　「津雲貝塚」　『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県
川上町権現谷岩陰　川上町教育委員会　1983　『権現谷岩陰遺跡』
倉敷市阿津走出　岡山県教育委員会　1988　「阿津走出遺跡の調査」　『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅱ』
倉敷市中津貝塚　水原岩太郎　1935　『中津貝塚発見縄文式土器模様』
倉敷市広江・浜　間壁忠彦　1979　「広江・浜遺跡」　『倉敷考古館研究集報』15
倉敷市福田貝塚　倉敷考古館　1972　『倉敷の古代』
奈良国立文化財研究所　1989　『福田貝塚資料』山内清男考古資料2
倉敷市船倉貝塚　倉敷埋蔵文化財センター　1999　『船倉貝塚』
倉敷市舟津原　「舟津原遺跡の調査」　『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅱ』(前出)
新庄市西畑田　千葉　豊　1987　「備前市新庄西畑田遺跡採集の縄文土器」　『古代吉備』9
哲西町佐藤　岡山県文化財保護協会　1978　「佐藤遺跡」　『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査13』
灘崎町彦崎貝塚　池葉須藤樹　1950　『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』

広島県
佐伯町越峠　広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室　1983　「広島県佐伯郡佐伯町越峠遺跡出土の遺物について」　『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報Ⅵ』
新市町芋平　小都　隆　1976　「芦品郡新市町芋平遺跡について」　『芸備』4
東城町帝釈白石洞窟　広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室　1980　「帝釈白石洞窟」　『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報Ⅲ』
広島市比治山貝塚　広島県教育委員会　1951　「広島市比治山貝塚」　『広島県史跡名勝天然記念物調査報告6集』
松崎寿和・間壁忠彦　1969　「西日本」　『新版考古学講座』3　雄山閣
福山市洗谷貝塚　福山市教育委員会　1976　『洗谷貝塚』
山口県
宇部市月崎　宇部市教育委員会　1968　「月崎遺跡」　『宇部の遺跡』
平生町岩田　潮見　浩　1960　「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」　『広島大学文学部紀要』18
岩田遺跡発掘調査団　1969　『山口県岩田遺跡発掘調査概報』
平生町教育委員会　1974　『岩田遺跡』
下関市神田　山口県教育委員会　1973　『与浦遺跡・神田遺跡』
周陽考古学研究所　1978　『山口県先史時代表採遺物集成ならびに編年的研究』
香川県
観音寺市なつめの木　笹川龍一　1993　「なつめの木貝塚の縄文土器」　『香川考古』2
観音寺市樋ノ口　香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1990　『永井遺跡』
坂出市大浦浜　香川県教育委員会・本四連絡橋公団　1988　『大浦浜遺跡』
坂出市ナカンダ浜　『考古資料収蔵目録1』縄文時代編・図版解説付（前出）
善通寺市永井　『永井遺跡』（前出）
高松市中村・前田東　香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局　1995　『前田東・中村遺跡』
詫間町大浜　詫間町教育委員会　1981　『大浜遺跡発掘調査概要』
愛媛県
今治市石井国友　今治市教育委員会　1999　「石井国友遺跡第4次調査」　『石井国友遺跡』
今治市糸大谷　愛媛県埋蔵文化財調査センター　1996　『糸大谷遺跡』
今治市矢田八反坪　愛媛県埋蔵文化財調査センター　2000　「矢田八反坪遺跡」　『今治北道路埋蔵文化財調査報告書』
小松町川原谷　菅　哲彦　1992　『小松町誌』　小松町
小松町小松川藤木　『小松町誌』（前出）
小松町鶴来ヶ元　愛媛県埋蔵文化財調査センター　1994　『鶴来が元遺跡』
津島町犬除　津島町教育委員会　2000　『犬除遺跡』
愛媛県埋蔵文化財調査センター　2001　『犬除遺跡2次調査』
波方町江口貝塚　愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室　1994　『江口貝塚Ⅱ』
松山市南海放送　愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室　1990　『文京遺跡第8・9・11次調査』
松山市文京　『文京遺跡第8・9・11次調査』（前出）
御荘町平城貝塚　長山源雄　1933　「平城貝塚調査報告」　『考古学雑誌』4-11
西田　栄・鎌木義昌　1957　「伊予平城貝塚」　『瀬戸内考古学』1　『瀬戸内考古

学研究』1996所収
草地牲自　1972　「平城貝塚第三次発掘調査概報」　『愛媛の文化財』13
御荘町教育委員会　1982　『平城貝塚Ⅳ』
木村剛朗　1996　『四国西南沿海部の先史文化』　幡多埋蔵文化財研究所
犬飼徹夫　1998　『平城貝塚Ⅴ』　御荘町教育委員会

御荘町八幡野　『四国西南沿海部の先史文化』(前出)

徳島県

池田町上野岡　岡本健児　1951　「徳島県池田町出土の縄文式遺物」　『貝塚』38

板野町貞光前田　徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター　2001　「貞光前田遺跡」　『西部テクノスクール建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

三加茂町新田神社裏1号岩陰　同志社大学文学部文化学科　1999　「新田神社裏1号岩陰」　『加茂谷川岩陰遺跡群』

高知県

大月町尻貝　大月町教育委員会　1991　『尻貝遺跡』
『四国西南沿海部の先史文化』(前出)

宿毛市宿毛貝塚　高知県教育委員会　1951　『宿毛貝塚』
高知県教育委員会　1986　『宿毛貝塚発掘調査報告書』
『四国西南沿海部の先史文化』(前出)

土佐清水市片粕　高知県教育委員会　1975　『高知県片粕遺跡』
『四国西南沿海部の先史文化』(前出)

中村市国見　中村市教育委員会　1994　『国見遺跡』

中村市船戸　高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター　1996　『船戸遺跡』

中村市三里　中村市教育委員会　1978　『三里遺跡』
木村剛朗　1984　「高知県中村市三里遺跡出土の縄文後期三里式粗製土器」　『遺跡』26
木村剛朗　1987　『四万十川流域の縄文文化研究』　幡多埋蔵文化財研究所

南国市奥谷南　高知県文化財団埋蔵文化財センター　2001　『奥谷南遺跡Ⅲ』

南国市栄エ田　高知県文化財団埋蔵文化財センター　1995　『栄エ田遺跡』

南国市田村遺跡群　高知県教育委員会　1986　『田村遺跡群』第1分冊

春野町西分増井　春野町教育委員会　1990　『西分増井遺跡群発掘調査報告書』

東津野村北川　東津野村教育委員会　1995　『北川遺跡』

本山町松ノ木　本山町教育委員会　1992　『松ノ木遺跡Ⅰ』
本山町教育委員会　1992　『松ノ木遺跡Ⅱ』
本山町教育委員会　1993　『松ノ木遺跡Ⅲ』
本山町教育委員会　1996　『松ノ木遺跡Ⅳ』
本山町教育委員会　2000　『松ノ木遺跡Ⅴ』

西土佐村大宮・宮崎　西土佐村教育委員会　1999　『大宮・宮崎遺跡Ⅰ』
西土佐村教育委員会　2000　『大宮・宮崎遺跡Ⅰ(続編)』

福岡県

芦屋町山鹿貝塚　山鹿貝塚調査団　1972　『山鹿貝塚』

大平村土佐井　大平村教育委員会　1990　『土佐井地区遺跡』

岡垣町元松原　岡垣町教育委員会　1981　『元松原遺跡』

春日市柏田　福岡県教育委員会　1977　「春日市柏田遺跡の調査」　『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第4集

北九州市永犬丸　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1994　『永犬丸遺跡』

北九州市菊水町　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1988　『菊水町遺跡（Ⅰ区の調査）』
北九州市黒崎貝塚　黒崎貝塚調査会　1981　『黒崎貝塚』
北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1993　『黒崎貝塚』
北九州市下吉田　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1985　『下吉田遺跡』
北九州市勝円C　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1985　『勝円遺跡（C地点）』
北九州市中縄手　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1996　『中縄手遺跡　1区～3区』
北九州市貫川　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1988　『貫川遺跡1』
北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1992　『貫川遺跡5』
北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1992　『貫川遺跡6』
北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1993　『貫川遺跡7』
北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1994　『貫川遺跡8』
北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1995　『貫川遺跡10』
北九州市芸術文化振興事業団埋蔵文化財調査室　2002　『貫川遺跡12』
玄海町鐘崎貝塚　杉山寿栄男　1934　「筑前鐘ヶ崎の縄文土器」　『考古学』5－4
西　健一郎　1980　「鐘崎式土器について」　『九州文化史研究所紀要』25
花田勝広　1994　「宗像郷土館の研究―鐘崎貝塚の縄文土器―」　『文化財学論集』
古賀市川原西　福岡県教育委員会　2001　『川原西遺跡（第3地点）』
椎田町山崎・石町　福岡県教育委員会　1992　『山崎遺跡　付　石町遺跡』
志摩町天神山貝塚　志摩町教育委員会　1974　『天神山貝塚』
大平村上唐原　福岡県教育委員会　1996　『上唐原遺跡Ⅱ　福岡県築上郡大平村所在上唐原遺跡の調査2』
大平村土佐井　大平村教育委員会　1990　『土佐井地区遺跡』
築城町松丸D　築城町教育委員会　1992　『城井谷Ⅰ』
福岡市入部　福岡市教育委員会　1999　『入部Ⅸ』
豊前市中村石丸　福岡県教育委員会　1996　『中村石丸遺跡』
佐賀県
唐津市徳蔵谷　唐津市教育委員会　1995　『徳蔵谷遺跡(2)』
神埼町志波屋六本松　神埼町教育委員会　1983　『志波屋六本松遺跡』
大分県
朝地町朝地田村　朝地町教育委員会　1986　『朝地田村遺跡』
安心院町飯田二反田　大分県教育委員会　1993　『飯田二反田遺跡』
宇佐市尾畑　大分県教育委員会　1995　「尾畑遺跡」　『宇佐別府道路埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』
宇佐市西和田貝塚　『石原貝塚・西和田貝塚』（前出）
宇佐市森貝塚　樋口清之　1931　「大分県西国東郡河内村森貝塚の研究」　『史前学雑誌』3－1
『石原貝塚・西和田貝塚』（前出）
大分市大分川　大分市教育委員会　1996　『大分市の文化財―大分市域の縄文土器資料集成―　第30集』
大分市小池原貝塚　大分県教育委員会　1965　『小池原貝塚』
『九州縄文文化の研究』（前出）
大分市横尾　大分市教育委員会　2002　「横尾遺跡」　『大分市市内遺跡確認調査概報―2001年度―』
荻町寺の前　荻町教育委員会　1981　『荻台地の遺跡Ⅵ』
杵築市山迫貝塚　坂本嘉弘　1998　「杵築市山迫貝塚採集の縄文時代の遺物」　『おおいた考古』9・10
国東町下堀田　国東町教育委員会　1991　『下堀田遺跡』
国東町ワラミノ　大分県教育委員会　1960　『ワラミノ遺跡調査報告』

三光村佐知　大分県教育委員会　1989　『佐知遺跡』
庄内町十合野　庄内町教育委員会　1994　『十合野遺跡』
中津市ボウガキ　三保の文化財を守る会　1992　『ボウガキ遺跡』
野津原町下原　大分県教育委員会　1997　『下原遺跡』
日出町エゴノクチ　大分県教育委員会　1993　「エゴノクチ遺跡」　『宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書』
豊後高田市上野　豊後高田市教育委員会　1990　『上野遺跡』
宮崎県
綾町尾立　田中熊雄　1962　「綾町尾立遺跡の研究(1)(2)」　『宮崎大学学芸学部紀要』13・14
木城町石河内本村　木城城教育委員会　2000　『石河内本村遺跡』
清武町竹ノ内　宮崎県埋蔵文化財センター　2000　『竹ノ内遺跡』
串間市下弓田　宮崎県総合博物館　1991　『埋蔵文化財調査研究報告Ⅳ　下弓田遺跡―資料編１―』
田野町丸野第二　田野町教育委員会　1987　『丸野第二遺跡』
田野町本野原　田野町教育委員会　2002　『本野原遺跡』
南郷町崩野　南郷町教育委員会　1990　『崩野遺跡』
鹿児島県
市来町市来貝塚　鹿児島考古学会　1991　「市来貝塚特集」　『鹿児島考古』25
市来町教育委員会　1991　『川上（市来）貝塚』
市来町教育委員会　1993　『川上（市来）貝塚２』
上屋久町一湊松山　上屋久町教育委員会　1981　『一湊松山遺跡』
鹿児島市春日町　『九州縄文文化の研究』（前出）
鹿児島市草野貝塚　鹿児島市教育委員会　1988　『草野貝塚』
加治木町干迫　鹿児島県立埋蔵文化財センター　1997　『干迫』
志布志町倉園　河口貞徳　1981　「市来式の祖型と南島先史文化への影響」　『鹿児島考古』15
志布志町中原　志布志町教育委員会　1985　『中原遺跡』
志布志町柳井谷　志布志町教育委員会　1984　『柳井谷遺跡』
末吉町宮之迫　志布志町教育委員会　1981　『宮之迫遺跡』
川内市麦之浦貝塚　末吉町教育委員会　1987　『麦之浦貝塚』

＜図の出典＞

図１－１～３・５・６：奈良国立文化財研究所 1989，図２－１・２：本山町教育委員会 1996，図２－４・５・図５－４・５：本山町教育委員会 2000，図３－１・３：香川県教育委員会・本四連絡橋公団 1988を一部改変，図３－２：岡山県文化財保護協会 1999，図３－４：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1992，図３－５：愛媛県埋蔵文化財調査センター 1994，図３－８～10：本山町教育委員会 1991，図５－６：松崎・間壁 1969を改変，図５－７：広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室 1980，図６－７：瀬戸内海歴史民俗資料館 1978，図７－１・図８－２・４・６：鳥取県教育文化財団 1996，図７－２：北条町教育委員会 1983，図７－３：竹野町教育委員会 1997，図７－４：小島孝修 1995，図７－５：鳥取県教育文化財団 1981，図７－６・８・図８－１：東伯町教育委員会 1987，図７－７：福部村教育委員会 1989a，図８－３：宍道正年 1974を再トレース，図８－５：鳥取県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所 1994，図９－１・５・図10－２・図15－４・図15－８：前川 1979，図９－２・６：岡垣町教育委員会 1981，図９－３・図11－２：市来町教育委員会 1993，図９－４：大分県教育委員会 1997，図９－７：唐津市教育委員会 1995，図10－１・３・図12－１・２：西田・鎌木 1957（図10－１は筆者の観察によって図を改変），図10－４・６：大分県教育委員会 1993，図10－５：宇佐市教育委員会・大分県教育委員会 1979，図11－３：木村 1996，図11－５：福岡県教育委員会 1977，図11－６：岩崎二郎 1988，図11－７：神埼町教育委

員会 1983，図12－3・4：荻町教育委員会 1981，図12－5：大平村教育委員会 1990，図15－1・2：南郷町教育委員会 1990，図15－3：志布志町教育委員会 1984，図15－5・7：志布志町教育委員会 1985を一部改変，図15－6：河口 1981，図15－9・13：鹿児島市教育委員会 1988，図15－10・11：上屋久町教育委員会 1981，図15－12：鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997，図16－2・11・図17－5・6：三方町教育委員会 1992，図16－4・10：大野市教育委員会 1985，図16－5：勝山市教育委員会 1983，図16－6・図17－4：能登川町教育委員会 1990，図16－7：紅村　弘ほか 1978を改変，図16－9：滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1993，図16－12・13・図 19－11：橿原考古学研究所 1981，図16－14・図 19－8～10・図20－13：三重県埋蔵文化財センター 1997，図16－15・図 19－12：愛知県埋蔵文化財センター 1991，図17－1・2・図20－1～5：高槻市教育委員会 1995，図17－3：難波宮址顕彰会 1978，図17－7・8・10・12・18・図20－10・図20－12・14：能登川町教育委員会 1996，図17－9：京都大学埋蔵文化財研究センター 1990，図17－11・15・図20－6：京都大学文学部博物館 1991，図17－13・図20－8・図20－11：滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1994，図17－14：東大阪市教育委員会 1976，図17－16：能登川町教育委員会 1986，図17－17：名張市遺跡調査会 1986，図18－1：前橋市教育委員会 1990，図18－2：千葉県文化財センター 1996を一部改変，図 19－1～5：海南市文化財調査研究会・海南市教育委員会 1985，図 19－6・7：三重県埋蔵文化財センター 1996，図20－7：西尾市教育委員会 1995，図20－9：東大阪市教育委員会 1987，図21－1：南知多町教育委員会 1983，図21－2：西の浜久衛森遺跡調査団 1980，図21－3・4：久永 1969，図21－5・6：富士宮市教育委員会 1997，図21－7：加藤学園考古学研究所 1983，図21－8：富士宮市教育委員会 1993

図2－3・図3－6・7・図5－1・3・8・図6－1～6・図11－1・4：筆者実測，図1－4・図16－1・3・8は写真から，図5－2は拓本から作図した模式図である（図5－2は報告（笹川 1993）の005と103が接合することを知ったのでそのように作図してある）。また図14の文様変遷図に用いた資料の一部は，筆者の観察によって図に修正を加えたため，欠損部分の復元が報告とは異なるものがある。